日本IT書紀

10 迅風篇

巻之二十五 懊悩

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

10 迅風篇

巻之二十五 懊悩

179 赤軍

180 市ヶ谷乱入

181 崩れゆく”戦後”

182 暴発

183 大地の牙

184 アラブの反撃

185 静かなる多数派

186 ボートピープル

187 龍の目覚め

188 テレビの時代

179 赤軍

第百七十九

赤　軍

一

この節からしばらく、情報産業のことから離れる。時代背景ないし〝世相〟を概観するように思えるだろうが、一九五〇年代から積み重ねられた戦後社会の宿痾がはじけ、一九八〇年代以後、つまり〝われらの時代〟の下地を形成した。

と同時に、情報産業の世界から一九七〇年代を眺めると、社会・経済・文化というものがコンピュータやネットワーク、情報システムに急速に接近する時代である。つまり〔情報化社会〕の幕開けだった。

しかし視点を変えると、本当は全く逆で、情報産業が社会性や経済的なウエイトを高めていった、と見ることもできる。地球に帰還する宇宙船が大気圏に突入するときのような震動がこの時期に始まったといえなくもない。

これまでと違うのは「激しさ」というものである。一九七〇年代前半の激動に対する評価はさておき、その渦動が収束して以後、この国は変化することを拒否し妥協と同調に迎合する体質に転換したように見える。

一九六九年の時点で、反米・反戦の学生運動は「全学連」の名で総称されていた。街頭でビラを配りデモを繰り返す学生たちは、十把一絡げで「ゼンガクレン」と呼ばれたのだが、厳密にいうとこれは間違いであるらしい。

全学連とは、一九四八年に発足した「全日本学生自治会総連合」である。発足後十年の一九五八年に主流・反主流に分裂し、六〇年安保闘争後、さらに三つに分かれていた。実体がなかったにもかかわらず諸派が「全学連」を名乗ったのは、あたかも本家争いのお題目に似ていた。

三つグループのうち、日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義（革マル）派と日共系全学連（平民学連）の二派は「旧左翼」と呼ばれた。

第三のグループが「新左翼」である。ただそれも一枚岩ではなく、四つの派に分かれていた。

革マル派、平民学連、新左翼四派は「三派全学連」を結成したが、これもまた羽田闘争を経て六八年夏に分裂し、からくも「全国全共闘連合」としてまとまりを作っていた。『新左翼理論全史』（新左翼理論全史編集委員会、一九七九、流動出版）巻末掲載の「全学連の系譜」によると、そ

れは次のようなものだった。

一九六九年当時、まず存在したのは革マル派全学連である。

一方に全国全共闘連合があった。主要な党派は、革共同中核派、社学同、社学同ＭＬ（マルクス・レーニン主義）派、学生解放戦線、日本共産主義学生同盟（共学同）、全国反帝学生評議会連合（反帝学評）、統社同フロント派、プロレタリア学生同盟（プロ学）であって、これをもって「全共闘八派」と称し、全国百七十八大学の全共闘が結集した。社青同と構改派が細かな党派に分裂し、社学同の流れを汲む一派は「反帝全学連」を結成しつつあった。

一九六九年の九月五日、日比谷野外音楽堂に全国から陸続と二万六千人の学生が集まった。全国全共闘連合の結成大会だった。この大会で全共闘は議長に東大全共闘の山本義隆、副議長に日大全共闘の秋田明大を選出した。

ただし山本は一月の東大安田講堂闘争の首謀者として逮捕され獄中にあった。このため、副議長の秋田明大が実質的な代表者となった。

大会では中核派、ＭＬ派、反帝学評の間で激しい応酬があり、すでにして内部対立のほころびが見え隠れしていた。だが圧倒的多数を占めるノンセクトラジカルの各大学全共闘が、秋田支持を表明したために、全学連各派は大会の進行を阻止することができなかった。阻止するも何も、全共闘との連携なくして七〇年安保闘争は闘えないのである。

七〇年安保粉砕、沖縄闘争勝利
十一月佐藤訪米阻止
一〇・一〇、一〇・二一闘争勝利
破防法、騒乱罪攻撃粉砕
大学立法発動粉砕、全国大学闘争勝利
ベトナム人民の解放闘争勝利、全アジア人民と連帯して闘おう
反戦派労働者と連帯して闘おう
全国大学をバリケードで占拠せよ

のスローガン八項目が採択された。赤軍派が登場したのはこのときである。

赤軍派の出自は、第二次共産主義者同盟（ブント）にさかのぼる。この組織はインテリゲンチャの集まりであって、その分だけ純粋理論主義的傾向が強かった。

ために結成早々に主流派と労働者革命派（「労革派」または「マル戦派」）に分裂し、さらに労革派が「前衛派」「怒涛派」に分裂した。次いで主流派が三派に分かれた。すなわち「情況派」「叛旗派」「赤軍派」である。

二

赤軍派は六九年四月二十八日の沖縄反戦デーを前にブント内に結成された「共産主義突撃隊」に祖形を求めることができる。突撃隊は約五十名で構成され、その前日の四月二十七日、社学同四百、中核百三十、ＭＬ三十の計六百人とともに東京医科歯科大学に陣取った。

東京駅から有楽町、銀座一帯で展開する同時多発ゲリラ戦で機動隊を引き寄せ、その隙を突いて霞が関を占拠する計画だった。

二十八日、警備当局は東京医科歯科大学を機動隊約二千で包囲して封じ込めを図ったが、突撃隊が奮戦して機動隊の壁を突破することができた。ところが主力部隊が後続せず、計画が狂った。

突撃隊以下約百人は新橋で他の部隊と合流して虎ノ門、霞が関に進もうと考えた。東京駅周辺に中核派二千、有楽町に全共闘、社学同赤ヘル反戦グループなど二千、銀座にべ平連三千、浜松町に中央大学全共闘五百が、それぞれに機動隊と激しい攻防戦を展開していた。突撃隊以下百人の別働隊は、こうした部隊を糾合して前進しようとした。

誤算だったのは、「鉄の軍団」を誇った中核派二千が敗勢になったことだった。中核派は逮捕者を出しつつ有楽町に退き、全共闘、社学同赤ヘル反戦グループと合流して隊勢を立て直そうとした。ここに銀座方面に展開していたべ平連グループ三千が逃げ込んできたため、統制が利かなくなった。

「新橋へ」

の指示で移動し始めたとき、機動隊が襲いかかった。

デモ隊は総崩れとなり、約六千のヘルメットの集団が新橋に向けて走った。待ち受けていた突撃隊は潰走してくる人数に圧倒され、その流れに呑み込まれてしまった。

――後続部隊を待つことなく、突撃隊がそのまま虎ノ門に進出していれば……。

それは結果論というものだったが、批判とは多くその性格を帯びる。

――焦点は虎ノ門・霞が関に移り、東京、有楽町、銀座の諸部隊は闘いを継続できていたであろう。

執行部への批判が高まった。

次いで六月九日、伊東市で開催された第四回アジア太平洋閣僚会議（ＡＳＰＡＣ）で、中核派や反帝学評は二千五百人を動員して機動隊七千と対峙し、車内の非常コックを引いて列車を停め、東海道線や伊東線の各駅で機動隊と衝突した。

だが社学同、共産同の二派は

「秋の蜂起のために勢力を温存したい」

として、この闘いに参加しなかった。「秋の蜂起」とは、十一月中旬に予定される首相佐藤栄作の訪米阻止闘争を意味していた。

このとき、共産同の内部で三派の抗争が始まっていた。

より先鋭化して武力闘争に突き進もうとする左派、中核派など多数と連携して戦おうとする右派、中間派が意見を対立させ、右派と中間派は左派を遠ざけるようになっていた。

七月六日、明治大学和泉校舎で右派と中間派が拡大中央委員会を開いていたとき、左派の百五十人がこれを急襲し、議長さらぎ徳三に重傷を負わせ、出動した機動隊がさらぎを保護するという事態が発生した。さらぎはすでに破壊活動防止法違反で指名手配中であったため、そのまま逮捕となった。

この結果に対して左派は自己批判を提出して共産同に復帰したが、収まりがつかない右派の一部が左派のリーダー格四人を軟禁し、その中の望月上史が逃亡を図って重症を追ったことから再び抗争が勃発した。右派と中間派は結束して八月二十二日に総会を開いて左派を除名処分としたために左派は独立に追い込まれた。

一九六九年の八月二十八日、神奈川県三浦半島の城ヶ島に関西弁の学生が三々五々集まった。気楽な学生たちの合宿か何か、としか見えなかった。

実はこの集会は「共産主義者同盟赤軍派」の結成総会であって、彼らは月が変わった九月二日に桃山学院大学で「西日本共青赤軍派総決起集会」、三日に関東学院大学で「結成政治集会」、四日に東京・立石の葛飾公会堂で「赤軍派大政治集会」と立て続けに会合を開き、五日に東京・日比谷野外音楽堂で開かれた「全国全共闘連合結成大会」で、「赤軍派」の名乗りをあげた。

『新左翼運動全史』（蔵田計成、一九七八、流動出版）は記す。

結成間もない赤軍派一〇〇名は、場外でブント連合派との内ゲバに勝利したあと、手に手に「軍旗」を持って大会途中から入場した。その瞬間、会場には異様な空気が流れ、やがて拍手がわき起こった。赤軍派の合言葉は「蜂起貫徹、戦争勝利」であり、政治的立場は「八派解体」であった。

治安当局は、七月六日に発生した共産同三派の内ゲバ事件で、なにがしかの変化が起こりつつあることを察知していたが、「赤軍派」の結成はこのときまで知らなかった。

同じ九月に赤軍派が発表した文書「全同志への赤軍派からのアピール」を入手した当局は、相当の危険分子であると理解した。そこには次のようにあった。

我々赤軍派は、大胆に次のことを告げなければならない。一〇・八の時代が終り、世界階級闘争の大転換が迫っている。自衛武装から攻撃的武装へとその質的飛躍をなすべき主体の質が問われている。全学連・反戦・全共闘部隊を、世界革命戦争を切り拓く部隊へと再編し、統合し、世界党――世界赤軍――世界革命戦線として自己を階級闘争に位置付け直すことによってしか敵権力の攻撃に対置しえない。前段階蜂起を実現し世界革命戦争を準備せよ！

文中「自衛武装から攻撃的武装へ」「世界革命戦争」といった言葉は、それまでの反戦・反帝活動組織のチラシやビラに全くない過激さを持っていた。同時に配布した文書「世界戦争」には次のようにあった。

君達にブラック・パンサーの同志を殺害し、ゲットーを戦車で踏みつぶす権利があるなら、我々にも、ニクソン、佐藤、キージンガー、ドゴールを殺し、ペンタゴン、防衛庁、警視庁、君達の家々を爆弾で爆破する権利がある。君達に、沖縄の同志を銃剣で突き刺す権利があるなら、我々にも君達を銃剣で突き刺す権利がある。

アメリカの黒人武装過激派組織ブラック・パンサーを「同志」と呼び、「爆弾」という言葉が使われていることに当局は注目した。一月の東大安田講堂事件からこのかた、警察力は格段に強化され、一方の反戦・反帝活動家たちは自由な行動を封じ込められていた。

全共闘八派は、抗議デモの参加者が減少する中で、機動隊と衝突するたびに大量の逮捕者を出した。中でも四月二十八日の沖縄反戦デー闘争で、諸派の中堅幹部がねらい撃ち的に逮捕され、さらに中核派と共産同の幹部五人が破壊活動防止法違反で指名手配されたために、指導力が急速に弱まった。

このような状況の中で当局が最も恐れたのは、「窮鼠、猫をかむ」の喩えだった。「赤軍派」がいう「武装」とは、従来の角材や石、火炎ビンといったものを指していなかった。

当局はかなり早い段階で「赤軍派」の中心的な人物に目星をつけていた。共産同急進左派の塩見孝也（京大）、物江克男（滋賀大）、田宮高麿（大阪市大）、小宮隆裕（東大）、奥平剛志（同志社大）、森恒夫（大阪市大）、大西一

夫（同志社大）、植垣康博（弘前大）といった名前が浮上した。

また九月四日に行われた「赤軍派大政治集会」に、約三百人が参加していたことも突き止めた。シンパも含んでの数字であろうが、無視できない規模だった。

特徴的なのは関西の大学が拠点になっていることだった。関東の勢力は六九年春までの闘争で主要な大学がほとんど骨抜きにされていて、代わって関西勢が主導権を握りつつあることを当局は察知した。

このため当局は九月十三日から、桃山学院大、同志社大、大阪市大、京大および、京阪神地域における過激派拠点に強制捜索を実施し、その動きを牽制した。

三

この年最大の焦点は、十一月中旬に予定されていた首相・佐藤栄作の訪米だった。日本製繊維製品の対米輸出規制を受諾する代わりにコンピュータの輸入・資本の自由化を延期する、日本政府がベトナム戦争に間接的に協力する代わりに沖縄を返還する。アメリカ政府が突きつけた〝飴と鞭〟に対する最終回答をしに行くのである。

反戦・反帝運動各派にとって、国内の繊維会社が窮地に陥ることは些細な問題だった。ましてコンピュータの輸入・資本自由化は眼中になかった。彼らは反戦・反帝のもとで「佐藤訪米阻止」を掲げて計画を練り、対して治安当局はその前に彼らの動きを封じ込めるかに全力をあげた。十月二十一日の国際反戦デーが前哨戦となった。

『新左翼運動全史』によると、「最大の激戦地」は山手線の高田馬場駅から新宿駅にかけての一帯だった。中核派八百人が高田馬場駅でバリケード、火炎ビン、角材を使って機動隊と衝突する一方、別の部隊が複数の交番を放火・炎上させ、青梅街道大ガード下付近でＭＬ派三百人と合流して、深夜十一時過ぎまで火炎ビン、投石を繰り返した。

社学同、全共闘武装行動隊、反戦武装行動隊の三百人は両国から神田にかけて複数の交番を襲った。反帝学評、旧構改諸派は築地から東京駅に展開した。東京駅の八重洲口中央広場が火災ビンによって炎上し、銀座四丁目交番と日本橋中央署が襲撃され、築地魚市場正門に火炎ビンが投げられた。

革マル派百人は、新宿戸塚二丁目交番を火炎ビンで炎上させ、西大久保職安通りで機動隊と衝突した。大学ベ平連の約二千人は飯田橋駅ガード付近にバリケードを築き、機動隊は催涙ガス弾で対抗した。

以上の記録に登場するデモ隊の人数は計五千人前後だが、

当日の逮捕者が一千二百二十二人と過去最高に達したことからすると、『新左翼運動全史』が記すのはごく一部の目立った動きということになる。

このとき、過激派の動きに大きな変化が生まれていた。数人編成の特命部隊が特定機関を狙い撃ちするゲリラ戦法が、組織的・計画的に行われたのだ。

『新左翼運動全史』は次のように記す。

首相官邸、自民党本部、福岡県庁、日経連、生産性本部、ＮＨＫへの突入、占拠、火災ビン襲撃が反帝学評によって敢行され、ＭＬ派は東京拘置所、自衛隊市ケ谷に突入、その他、赤軍派三名は第八、第九機動隊本部にたいして手製爆弾を投げた。

さらに、京浜安保共闘（日共革命左派神奈川県常任委＝日共山口左派から分裂した中国派系）は、米軍横田基地にたいして火災ビン攻撃を行い、米軍機を炎上させた。だが、この闘いは報道管制によって、握りつぶされた。

「手製爆弾」「京浜安保共闘」という言葉が登場した。

さらにその戦法がゲリラ化し、攻撃の対象が治安当局や行政府ばかりでなく、日経連やＮＨＫ、さらに在日米軍基地にまで広がった。

のちに明らかになったことだが、赤軍派は十月二十一日の国際反戦デーで鉄パイプ爆弾を使用することを計画していた。彼らは六十本の鉄パイプ爆弾を製造し、東京薬科大学構内に運び込んでいたが、事前に警視庁が押収した。

このため実際には、両切りタバコ「ピース」の缶を使った小型爆弾が使用され、中野坂上でのパトカー襲撃が行われたにとどまった。

治安当局は赤軍派が九月に発行した文書「全同志への赤軍派からのアピール」「世界戦争」に記載された過激な内容に敏感に反応し、具体的な行動計画を探ろうと務めていた。その結果、彼らが東京・永田町の首相官邸を襲撃し、佐藤栄作首相を「逮捕」する目論見であることを察知した。

佐藤首相の訪米は十一月十七日に予定されていたが、間際は警備が厳重にも厳重さを増す。首相官邸襲撃があるとすれば十一月初旬であろう、と当局は推測した。

この推測は当たっていた。

彼らは一〇・二一の反省から、鉄パイプ爆弾の製造・保管基地を地方に移し、十一月十日前後を期して行動に出るべく、猟銃、斧、ナイフなどを集めていた。

十一月三日の文化の日、千葉県警から警視庁に緊急連絡が入った。かねて張り込んでいた赤軍派学生が動いた、というのである。

その学生はナップザックを背負ったハイキング姿で、総武線から中央線を乗り継ぎ、山梨県に向かっていた。むろん、これだけでは警察当局は動きようがない。休日を利用してハイキングに行くだけの人を不審尋問する根拠がなかった。

やむを得ず張り込みをしていた刑事が尾行し、連絡を受けた警視庁の刑事があとを引き継いだ。その学生は中央線塩山駅で降り、大菩薩峠に向かうバスを待つ人の列に紛れ込んだ。

現在のように携帯電話があれば尾行の状況を逐一報告することができるが、当時は公衆電話が唯一の手段だった。刑事は駅の公衆電話から本庁に連絡を取った。

塩山駅から大菩薩峠に行くには、バスで登山口のある「裂石」という集落まで行かなければならない。古く武州多摩川筋と甲州笛吹川筋をつなぐ青梅街道が、標高一千九百メートルの山頂に細々と続いている。

林道を登っていくと、まず到達するのが上日川峠で、ここに「長兵衛山荘」という山小屋が建っている。さらに登っていくと唐松尾根で道が分かれ、その分岐に「福ちゃん荘」、さらにその先の富士見新道分岐に「富士見山荘」「勝縁荘」があった。

そのうちの「福ちゃん荘」という山小屋に学生は入った。

東京から尾行してきた警視庁の刑事はここでしばらく張り込みを続け、千葉からやってきた学生と同じような年代の若者たちが二人、三人と入っていくのを確認した。総勢三十人以上で、山小屋には「ワンダーフォーゲル部の合宿」と称していることも突き止めた。

刑事は一度山を下り、途中の交番で電話を借りて応援を求めた。そのころには全国の警察から、監視していた赤軍派学生のうち数人がハイキング姿で山梨方面に向かったという情報が入っていた。赤軍派がここで何ごとかを企んでいることが判明した。

警察が福ちゃん荘に踏み込んだのは五日未明である。容疑は「凶器準備集合罪」だった。逮捕者は五十二人に及び、大量の鉄パイプ爆弾、ナイフ、斧などが押収された。赤軍派は首相官邸襲撃のための武闘訓練を行っていたのだった。

乱闘の中、一人が逮捕を免れ逃走することに成功した。彼は大慌てで山を降り、息せき切って都内の喫茶店に電話をかけた。そこは赤軍派の連絡場所で、緊急事態が発生した場合、必ず通報することになっていた。

折りしもそこに議長・塩見孝也がいた。

「公安当局に簡単に尾行される未熟さを露呈したという恥ずかしさと、赤軍派は口先ではなく本気で武装蜂起をしようとしていることが、これで分かってもらえると思った」

と塩見は後年語っている。

ともあれ蜂起部隊の一斉逮捕で赤軍派の計画は頓挫せざるを得なかった。

～～～～　補　注　～～～～

全日本学生自治会総連合　一九四七年連合国軍総司令部（ＧＨＱ）が打ち出した国立大学の地方自治体委議案や大学理事会法案、授業料三倍値上げ案などに反対し、四八年六月授業料値上げ反対と大学理事会法案反対を掲げた教育復興学生決起大会が東京・日比谷公園で開かれた。このとき約五千人の学生が文部省までデモ行進を行った。これがきっかけとなって「全国国公立大学高等自治会連盟」が結成され、全国大学での一斉ストを決議した。同年九月十八日から二十日までの三日間、百四十五校の代表による全国国公立大学高等代表者会議が開かれ、全日本学生自治会総連合が結成された。

「新左翼」四派　①革命的共産主義者同盟全国委員会＝革共同中核派（マルクス主義学生同盟中核派）②社会党社青同解放派（社会主義青年同盟学生班）＝社青同③社会主義学生同盟＝社学同④統一社会主義同盟フロント派＝統社同構造改革派

全国全共闘連合　六八年一月中央大学昼間部の学費値上げをめぐる紛争を引き金に、各地で学園紛争が盛んになり、多くの大学でバリケード封鎖やストライキが起こった。日大、東大では全学共闘会議（全共闘）が結成され、党派に属さない「ノンセクトラジカル」と呼ばれる一般学生が多く参加した。

山本義隆　やまもと・よしたか／１９４１～　：大阪に生まれ六四年東京大学理学部を出て同大学大学院に進んだ。湯川秀樹から「千人に一人の逸材」の評を得たが、六八年東大全共闘委員長となり六九年一月の安田講堂事件で逮捕され、のち大学院博士課程を中退して駿河台予備校の講師となった。

秋田明大　あきた・あけひろ／一九四七～　：広島県に生まれ日本大学二年生のとき学内サークル「社会科学研究会」に入った。六八年日大闘争で全学共闘会議議長となり、全共闘の指導者として大きな影響力を持った。当時は名前を「めいだい」と読ませていた。活動の時期は約三年間で、その後闘争時代の回顧を『獄中記～異常の日常化の中で』（一九六九、全共社）としてまとめた。

ブント　Bund：一八四七年、ロンドンで亡命ドイツ人を中心に結成された「共産主義者同盟」（der Bund der Kommunisten）に由来する。「Ｂｕｎｄ」は「同盟」の意味。第二次共産主義者同盟の中から森田実、西部邁、加藤紘一などが出た。ただし赤軍の出自がそうだからといって、この三人が非合法過激派であったわけではない。むしろこの組織はインテリゲンチャの集まりであって、その分だけ純粋理論主義的傾向が強かった。

▼森田　実　もりた・みのる／１９３２～２０２３。静岡県伊東市に生まれ東京大学工学部を出て日本評論社に入った。同社出版部長、「経済セミナー」編集長を経て七三年独立し評論家となった。現在はテレビの報道番組や政治討論会などでコメンテイターや司会も務めている。主な著書に『森田実政治評論集』がある。

▼西部　邁　にしべ・すすむ／１９３９～２０１８。北海道に生まれ六四年東京大学経済学部を出て横浜国立大学助教授、東大教養学部助教授を経て八六年東大教授。学生時代は東大自治会委員長、全学連執行委員を務め六〇年安保闘争を指揮した。七八年ごろから保守的な傾向を強め八三年に出版した『大衆への反逆』以後、大衆社会時代を批判的に論じた。

▼加藤紘一　かとう・こういち／１９３９～２０１６。山形県に

生まれ六三年東京大学を出て外務省に入った。七二年の衆院選で父・精三のあとを継いで山形二区から自民党公認で当選、七八年大平内閣で官房副長官、八四年中曽根内閣で防衛庁長官、九一年宮沢内閣で官房長官、九七年自民党幹事長。宮沢派に属し九八年宏池会会長。二〇〇〇年十一月衆院における森内閣不信任案提出の際、同調する動きを見せたが失敗した。

霞が関　地名は「霞が関」、地下鉄の駅名は「霞ヶ関」と表記される。

ベ平連　正式名称は「ベトナムに平和を！市民連合」。ベトナム戦争の激化と世界規模の反戦運動の高まりを背景に、一九六五年小田実、開高健、鶴見俊輔、堀田善衛らが始めた市民運動が全国に広まった。平和的デモ・反武力闘争、討論会や反戦広告、米兵の脱走援助などを活動の原則とした。草の根的な運動で地域や母体組織の名を冠したベ平連が発足し、ピーク時には「ベ平連」を名乗る団体が全国に三百以上存在した。小田実らが設立したベ平連は一九七四年に解散した。

さらぎ徳二　さらぎ・とくじ／１９２９～２００３。本名は「右田昌人」。「仏徳二」の筆名もある。

望月上史　もちづき・たかふみ／１９４７～１９６９。同志社大学社会学部の三年生だった。七月七日中央大学一号館三階の法学部長室に軟禁され、二十五日に消防用ホースを伝って逃亡を図った際、転落した。六十六日後の九月二十九日、昏睡状態のまま死亡した。

ブラック・パンサー　一九六六年、カリフォルニア州オークランドでヒューイ・ニュートン（Huey Percy Newton／１９４２～１９８９）とボビー・シール（Bobby Seale／１９３６～）が結成した。初めは都市部の貧しい黒人を白人差別主義者グループから守るのが目的だった。キング牧師の暗殺（一九六八年四月）を機に、共産主義と民族主義を標榜し、武装蜂起による黒人開放運動に転換した。

キージンガー　Kurt Georg Kiesinger／１９０４～１９８８。ドイツ連邦共和国第三代首相（在任一九六六～六九年）を務めた。第二次対戦前、ナチス党員として外務省ラジオ宣伝部に勤務したことを咎められ十八か月収容所に収監されていた。

ピースの缶　「ピース」は一九四六年一月十三日に一箱十本入り七円で発売された。駐留アメリカ軍兵士向けにパイプタバコ風の豊かな香りにブレンドされ、「PEACE」の表示が斬新だった。缶入り五十本パッケージが発売されたのは四九年で、オリーブの枝をくわえた鳩のデザインが使われるようになったのは五二年からである。

凶器準備集合罪　もともとは第二次大戦後に多発した暴力団同士の武装抗争を取り締まる目的で制定された。その場合の「凶器」とは銃刀・爆発物類を指しており、新左翼過激派の反米・反帝闘争には騒乱罪が適用されていた。赤軍派は鉄パイプ爆弾などが「凶器」と判断された。

塩見孝也　しおみ・たかや／１９４１～２０１７。兵庫県に生まれ六二年京都大学文学部に入り共産同関西派の活動家として頭角を現わし六九年赤軍派議長となった。七〇年三月東京都内で逮捕され八三年懲役十八年の判決を受けた。八九年満期出所し評論活動を行った。主な著書に『封建社会主義と現代』などがある。

180 市ヶ谷乱入

第百八十

市ヶ谷乱入

一

それは六八年の十月二十一日「国際反戦デー」のことだったという。

新左翼各派と機動隊の衝突を見つめていたサングラスの男がいたことを、当時、陸上自衛隊一佐・調査学校情報教育課長だった山本舜勝が記録に残している。

その男の名は平岡公威という。

一九二五年一月十四日東京に生まれ、学習院から東大法学部に進んだ。学習院中等科在学中から小説を書き始め、川端康成に見出されて世に出た。世の中での通り名は「三島由紀夫」。

『仮面の告白』『愛の渇き』で作家としての地位を確実にし、五三年の『禁色』、五四年の『潮騒』、五六年の『金閣寺』で阿部公房と並んで戦後日本を代表する作家として世界に知られた。

だが彼は小説の世界だけでは飽き足らなかった。

来る七〇年安保の騒擾で自衛隊の治安出動があるかもしれない、と考えた山本は、調査学校の学生である自衛官数十人と「楯の会」の十数人をデモ隊に紛れ込ませていた。現場の空気を肌で感じ、新左翼闘士たちの心理の動きや行動パターンを探らせるのが目的だった。

デモが終わったあと、彼らは永田町に用意した某所に集まることになっていた。山本は私服で御茶ノ水から某所まで、三島とともに歩いた。あたりは機動隊が発射した催涙ガスで充満し、サングラスの下の彼の眼も真赤に充血していた。

『戦後史開封』（一九九五、産経新聞社）によると、山本が三島と知り合ったのは六七年十一月だった。仲介したのは陸自第一師団長の藤原岩市だった。

そのとき三島は、

――七〇年安保闘争で六〇年安保と同じように二十万人規模でデモ隊が蜂起したら、警察力ではどうしようもない。自衛隊の治安出動には、市民の協力が欠かせない。そのために祖国防衛隊を作りたい。

ということを言った。六八年三月に二十人程度の学生を自衛隊に体験入隊させることが決まった。その学生たちが中心となって「楯の会」が結成された。

『戦後史開封』は次のように記す。

自衛官や楯の会のメンバーが三々五々、アジトに引き上げてきた。山本は、「騒乱は終った。われわれの演習も終った。解散」と告げた。

が、三島は「この場でわれわれは立ち上がるべきだ」と勇み立ち、山本と対立した。三島と山本の関係は急速に冷えていく。

「三島さんは騒乱事件を契機にクーデターのようなものを起こせれば、と考えていた。しかし、われわれとしては騒乱が鎮圧されれば、それでいいわけで、結果的には目的が違っていたということになります」

山本の述懐は、自衛官として正しい判断といっていい。

翌六九年五月十三日、三島は東大全学共闘会議駒場共闘焚祭委員会主催の学生との討論会に単身で出席した。会場は東大駒場教養学部九〇〇番教室だった。午後二時五分に始まった討論会は三時間近くに及んだが、その中ごろで三島は、

「たとえば安田講堂で全学連の諸君がたてこもった時に、天皇という言葉を一言彼等が言えば、私は喜んで一緒にとじこもったであろうし、喜んで一緒にやったと思う」

と発言した。

二時間半が経過し、議事進行者が

――時間の都合でそろそろ終りたいと思う。

とし、三島に「若干の感想」を求めた。

このとき、出席者と三島との間で最後のやり取りがあった。

全共闘　これは会場の諸君とは関係ないですけれども、ぼくから三島さんに呼びかけたいのですが、ぼくは「あなたに共闘していただきたい」と。さっきあなたは、もし諸君が天皇という言葉を口にしたならば、喜んでやるだろうとおっしゃった。

（中略）

三島氏がさっき言ったことがほんとうとするならば、三島氏はぼくと共闘してくれてしかるべきだと思う。

三　島　いまの言葉は非常に感銘が深く聞きました。

（中略）

私は諸君の情熱は信じます。これだけは信じます。ほかのものは一切信じないとしても、これだけは信じるということはわかっていただきたい。

全共闘　それで共闘するんですか？　しないんですか？

三　島　今のはひとつの詭弁的な誘いでありまして、非常に誘惑的になったけれども、私は共闘を拒否いたしま

す。（笑・拍手）

この討論は、後日、新潮社から『討論三島由紀夫ＶＳ東大全共闘《美と共同体と東大闘争》』というタイトルの本にまとめられた。その末尾に置かれた「討論を終えて」で三島は、

「概して私の全共闘訪問は愉快な経験であった」

と書き出している。

二

『年表作家読本　三島由紀夫』（河出書房新社）などから、一九七〇年十一月二十五日に起きた出来事の顛末のみを再現する。

その日の午前十一時、三島は小賀正義運転の四一年型白色のコロナで東京・市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部正面玄関で降りた。同行したのは「盾の会」の学生四人だった。

このとき一行は「楯の会」の制帽、制服に身を固め、三島は軍刀を腰に下げていた。前日、総監・益田兼利（陸将）に面会の約束を取り付けていたため、沢本泰治（三等陸佐）が総監室に案内した。

応接室で益田が

「先生は、そのような軍刀をさげてとがめられませんか」

と尋ねると、三島は

「この軍刀は、関の孫六を軍刀づくりに直したものです。鑑定書をごらんになりますか」

といって、鑑定書を示すとともに、軍刀を抜いて見せた。益田は刀をよく眺めてから、三島に返し、

「いい刀ですね」

といった。刀と取り交えるかたちで、三島は

「これを」

といって、折りたたんだ書類を益田に渡した。

その冒頭には「要求書」と書かれていた。その間に、小賀が席を立ち、いきなり益田の首を腕で締め、同時に小川と古賀がロープで両手、両足を椅子に縛りつけた。

「ふざけたことをするな」

と益田が大声を出した。

外にいた自衛隊員が物音に気づき、隣接した会議室に飛び込んで急を知らせた。

そこでは中村董正二等陸佐らが会議を行っていた。このときすでに総監室正面のドアは、内側からバリケードで封鎖されていた。すりガラスにセロテープを貼って中の様子をうかがうと、幕僚長室と幕僚副長室に通じるドアが手薄

なのが分かった。
幕僚長室から体当りで総監室のドアを開けた瞬間、三島が軍刀で斬りかかった。前後して幕僚副長室から会計課予算班長の寺尾克美（三等陸佐）らが飛び込み、短刀で武装した学生の一人と格闘になった。
行政副長・山崎皎（陸将補）ら七人が背中や手足に負傷し、六人が入院した。中村は全治六か月の重傷だった。
三島が益田に軍刀を突きつけていたため、幕僚副長・吉松秀信を残して全員が総監室から出た。
「要求書を堂々と読んでみろ」
という吉松に対して、三島は
「書いてある通りだ」
と繰り返すだけだった。
三島が軍刀で突きかかってきたため、吉松も退出せざるを得なかった。
こうして総監室が占拠された。
立て籠もった五人は、日の丸に「七生報告」と墨で書いた鉢巻きをしめた。短刀は三島携行のアタッシェケースに収められていたものだった。
破れたガラス窓越しに吉松は説得を続けたが、三島は「正午までに隊員を集めてくれ」と要求した。
吉松が同意すると、三島は「総監は必ず安全にお返しします。私はバルコニーから演説する」といった。
東部方面総監部から警視庁に緊急事態が通知されたのは十一時二十二分だった。警視庁はただちに公安第一課警備局長室に臨時本部を設置、機動隊百二十人と私服警官を市ヶ谷に出動させた。
報道機関がそれを知り、テレビは、
「七人の男が自衛隊に乱入」
とテロップを流した。
十一時四十分、吉松が
「全隊員は本館前に集合するように」
と放送した。それに従って約八百人が集まった。
同五五分、森田、小川の二人が総監室前バルコニーに六項目の要求を書いた垂幕をさげ、檄文を撒いた。
午後零時五分、三島が森田とともにバルコニーに現れ、「檄」とほぼ同じ内容の演説を始めた。
――われわれ盾の会は自衛隊によって育てられ、いわば自衛隊はわれわれの父であり、兄である……われわれにとって自衛隊は故郷であり、生温い現代日本で凛烈の気を呼吸できる唯一の場所であった。教官、助教諸氏から受けた愛情は測り知れない。しかもなお、敢てこの挙に出たのは何故であるか。たとえ強弁と云われようとも、自衛隊を愛するが故であると私は断言する。われわれは戦後の日本が

経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ……。

隊員の反応は冷ややかだった。

上空を旋回する報道機関のヘリコプターの爆音と自衛隊員の野次で、三島の肉声はほとんど聞こえなかった。三島の話し方はどなり声に変わり、野次が飛ぶ方向を見すえるように「オレのいうことがわからんのか」「静聴にしろ」とどなり返した。

「わたしの側に立つものはだれもいないのか。生命より大切なものを教えてやる」

それを最後に三島は演説を止め、「天皇陛下万歳」を三唱して総監室に戻った。

切腹をしたのはその数分後だった。

益田が「介錯するな」と叫んだが、左後ろに立った森田必勝が刀を降り降ろした。次いで森田が切腹し、古賀浩靖が一太刀で介錯した。小賀正義、小川正洋、古賀浩靖が総監室を出て逮捕されたのは午後零時二十分だった。

三

当時、防衛庁長官（のち首相）だった中曽根康弘は同日、

「全く遺憾な事態だ。常軌を逸した行動と言うほかない」

とコメントした。

「せっかく日本国民が築きあげてきた民主的な秩序をくずすものだ。世の中にとってまったく迷惑だ」（朝日新聞同日付夕刊）

中曽根は外人記者クラブの会見で

「楯の会をどう思うか」

と尋ねられて、

「宝塚少女歌劇を思い出す」

と答えて満場を爆笑させたことがあった。

これを聞いて三島は、

「人々はわれわれを玩具の兵隊さんと呼んで、わらっている。私が組織した楯の会は、会員が百人にも満たない。そして武器も持たない、世界で一番小さな軍隊である」

と皮肉を込めて語っていた。

読売新聞同日付夕刊は石原慎太郎のコメントを載せた。

「現代の狂気としかいいようがない。若い命をかけた行動としては、あまりにも実りないことだった」

司馬遼太郎は毎日新聞十一月二十六日付朝刊に次のように書いた。

「三島氏の死は文学論のカテゴリーに入るものである。三島氏の場合、思想と言うものを美に置き換えてみると分かりやすい」

参院無所属の議員だった青島幸男は、こうコメントした。

「あれは一言でいえば、ひどく知性的なオカマのヒステリーだ」（十二月十一日付週刊読売）

野坂昭如は言った。

「ぼくはまだ愚かしく混乱しつづけている。ぼくにできることは、ただ喪に服するのみ」（十二月十二日付週刊現代）

澁澤龍彦は語った。

「とうとうやったか、という気がした。ただ、私は彼の思想はまったく信用していない。自分の信じていないことにだんだんのめり込んでいって、その結果がああいう行動になったんじゃないか」

ある自衛隊幹部はこう言い放った。

「この事件は、三島先生が自衛隊を片思いして、自衛隊がちょっと大事にしたから、ますますのぼせ上がった。ところが最近冷たくされ出したので、無理心中を企てた、というところですな」

防衛大学の学生のコメントも紹介された。

「ぼくにとって、戦後いちばん不愉快な事件です。悪夢というか、白日夢というか一日も早く忘れてしまいたい事件ですよ。ぼくら、防大生だからといって彼の死に特殊な見解を持っているなんて思われたら、困りますよ」

真っ向からその死を否定したのは金芝河だった。

「どうってもたぁねえよ。朝鮮野郎の血を吸って咲く蘭の花さ。かっぱらっていった鉄の器を溶かして鍛え上げた日本刀さ」

様々な解釈や意見があった。

「私はただ、諫止するすべはなかったかと悔やむばかりである」

と言った川端康成は、その一年半後の四月十六日、仕事場として使っていた逗子小坪のマンションの一室で自殺した。

その死をめぐっても様々な解釈があった。

三島がこの行動に出る前、六八年七月の参院選に出る準備を進めていたことが、のちに明らかにされた。

石原慎太郎が一歩早くその意思を表明していたので、三島は参院選をあきらめ、七一年に予定されていた東京都知事選に気持ちが傾いた。それを知って、美濃部亮吉に対抗できる候補を探していた自民党は、七〇年に三島に接触したが、

「そういう時機は過ぎた」

とそっけなかった。

三島は、六八年十月二十一日の騒擾を目撃し、決起を迫った山本舜勝にあっさりかわされ、六九年に入って陸上自衛隊統合幕僚監部第三室（作戦担当）に招かれたとき、楯

の会と自衛隊によるクーデター構想を熱弁した。
このとき出席者から
「改憲は国会のＯＫが必要です。二・二六の再現は夢物語です」
と相手にされなかった。
五月に行われた東大全共闘との討論会でも決起に賛同を得ることができなかった。六月九日のＡＳＰＡＣ反対闘争、十月二十一日の国際反戦デーで新左翼各派は局地的な騒擾状態を生み出したが、機動隊の警備力がはるかに勝った。
新左翼の騒擾に対して自衛隊が治安出動する可能性がなくなった。
事件から二日後、警視庁公安部は
「三島らの目的は、精強の三十二連隊をしてクーデターを起こさせることにあった」
と発表したが、裁判における検事論告は
「本件を具体的に計画する段階においてはすでにクーデター計画はなかったと見られる」
とし、同判決文では
「自衛隊と結託して政治的野望を遂げようとか、武力革命を自衛隊にそそのかしたとかいう点はうかがえず」
と明確に否定した。
自衛隊を憲法第九条の枠内にとどめる限り、クーデター計画そのものを否定せざるをえなかった。
三島が市ヶ谷での決起を決意し、森田、小川、小賀、古賀を交えた共同謀議を行ったのは、裁判判決によると
「七〇年四月ごろ」
であって、
「改憲を熱望していた森田の独力で国会を占拠し改憲を発議せしめようとの提案が契機で本件を計画決意」
したと、森田必勝が果たした役割を重視している。
再び七〇年十一月二十五日午後零時二十分過ぎに時間を戻す。
バルコニーから三島の姿が消え、「わけがわからんぞ」「総監を解放しろ」「垂幕を降ろせ」などと野次を飛ばしていた自衛隊員は、とりとめなく散会した。
上空に報道機関のヘリコプターが旋回し、パトカーと救急車が駆けつけ、報道陣のカメラが放列を作るなか、広場に近いバレーコートでは運動着の隊員たちのバレーボールが始まっていた。

四

産経新聞の記者だった河端照孝が三島と知り合ったのは六八年だった。河端は武道家向けの雑誌「月刊秘伝」二〇

○三年七月号に、三島由紀夫とのことをこう書いている。

三島さんは竹刀剣道と居合をやっていましてね。私が天真正自源流をやっていると話すと、抜刀を見せてくれたりしましたよ。長い刀を遣っていたのが印象的です。

私は鑑定の勉強もしていまして、その後ご自宅で二振り、鑑定を頼まれました。そのうちの一本が、最期の自決に使用されたものでした。残念ながら、介錯を頼んだ青年の斬り込んだ刀は、固い骨に当たって、一回では打ち下ろせなかったようですが。

私が実際に三島さんに「切腹の作法」を話したのは昭和四十四年の六月。父に教わった作法でした。

この河端から、三島はコンピュータの知識も仕入れていた。東大全共闘との討論集会で、コンピュータについて触れたくだりがある。

日本という国は二十一世紀になるとどういう国になるだろうか。（中略）次々とコンピューターがカチカチカチカチと音を立て、あらゆるビルディングの中はちょうどマジソン・アベニューとおんなじになってしまう。われわれは管理あるいは技術管理だけに生きる時代がきてしまって直接的な生産関係というものから切り離されてしまう。

諸君が言われる自然への復帰ということは、（中略）私はバリケードとか石とかいうものは、これは非常に直接的な自然への復帰の感覚だろうというふうに理解している。私はもう少し文明が進歩している私のほうは目下日本刀へ復帰しつつあるし（笑）――大体私は核だとか近代兵器なんというものを信じちゃいないのです。

彼がコンピュタやネットワークというものをどう捉えていたかなど、小ざかしい詮索はしない。六八年に川端康成がノーベル文学賞を受賞してから、三島の心境がどう変化したか、という謎解きめいた推理は、もとより本書の主題ではない。

三島はボディビルで肉体を鍛え、金のネックレスをし、カフスといういでたちで幅広い交友を持った。

「武士たらんとするものに、金のネックレスは似合わんじゃないか」

とからかわれたとき、三島はいった。

「ボクは、そういってボクを笑っているヤツラを笑ってるんだ」

楯の会のために西武百貨店に特注したピエール・カルダ

ンのデザインによる制服は、「おもちゃの兵隊さん」とはやされ、中曽根康宏には「宝塚少女歌劇団のようだ」と揶揄された。そういう社会を三島は笑っていたのだろうが、その死の意味は多くの人に謎を残した。

おそらく福田恆存の指摘が最も的を射ているように思う。

「三島とは全く立場が違うが、全くわからない。理解できない。実際のところが分からない。私には将来、永遠わからないだろう」（十二月十二日付週刊現代）

～～～～　補　注　～～～～

山本舜勝　やまもと・ときかつ／１０１０～２００１。愛知県に生まれ、一九三九年陸軍士官学校を出て歩兵第二十連隊付少尉、四一年戦車第十二連隊中隊長、戦車第一師団参謀部付、千葉戦車学校教員、四四年少佐。五二年警察予備隊に入り六九年陸上自衛隊調査学校校長を経て陸将補となった。「楯の会」の指導官だった。

藤原岩市　ふじわら・いわいち／１９０８～１９８６。兵庫県に生まれ陸軍予科士官学校、陸軍士官学校を出て歩兵第三十七連隊付少尉となった。四一年十月「マレーの虎」と異称された谷豊を使って現地で情報活動を展開、次いでチャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bose／１８９７～１９４５）によるインド国民軍創設を支援した。五五年陸上自衛隊に入り五六年陸上自衛隊調査学校校長、第十二師団長、第一師団長を歴任した。

益田兼利　ました・かねとし／１９１３～１９７３。陸上自衛隊第二師団師団長、東部方面総監を歴任した。三島事件で人質になった自責して退官した。

三島由紀夫の檄　全文三千二百十文字（署名を除く）の長文で、Ｂ４用紙二枚に三島の肉筆で筆記されていた。『三島由紀夫全集34巻（評論Ｘ）』（新潮社、一九七六）に収録。

中曽根康弘　なかそね・やすひろ／１９１８～２０１９。群馬県に生まれ四一年東京帝国大学を出て内務省に入った。終戦時海軍主計将校だった。四七年群馬三区から衆院議員となり保守合同のときは河野派に属した。五九年岸内閣で科学技術庁長官、六六年中曽根派を結成し六七年親佐藤派に転じ佐藤内閣で運輸相、防衛庁長官、党総務会長を歴任した。七二年田中内閣で通産相、七四年三木内閣で党幹事長、八〇年鈴木内閣で行政管理庁長官を経て八二年党総裁、首相となった。「小さな政府」「民活」「規制緩和」「自由競争」の四原則を掲げ、三公社五現業の民営化を推進した。八六年七月の衆参ダブル選挙で自民党三百議席超の大勝をもたらしたが、消費税導入で支持を失い八七年十月竹下登に政権を譲った。八九年五月リクルート事件疑惑で国会証人喚問を受け自民党を離れたが、のち復党し二〇〇二年引退した。

石原慎太郎　いしはら・しんたろう／１９３２～２０２２。神戸市に生まれ五五年一橋大学在学中に書いた小説『太陽の季節』で第三十四回芥川賞、第一回文学界新人賞。以後大江健三郎、三島由紀夫などと並ぶ人気作家となった。六八年の参院選でトップ当選し、七二年衆院に転じた。七五年東京都知事選に出馬したが落選、再び衆院議員となって七七年福田内閣で環境庁長官、八七年竹下内閣で運輸相、八九年自民党総裁選に出て敗れ、九五年国会議員勤続二十五年表彰を機に議員を辞職し九九年東京都知事となった。作家としての主な著作は『太陽の季節』のほか『亀裂』（五六年）、『完全なる遊戯』（五七年）、『化石の森』など。評論に『「ＮＯ」といえる日本』『国家なる幻影』などがある。

司馬遼太郎　しば・りょうたろう／１９２３～１９９８。本名は「福田定一」。大阪に生まれ四三年大阪外語大学を仮卒業して陸軍に応召、四四年満州陸軍四平戦車学校十一期生となり見習士官として旧牡丹江省寧安県石頭の戦車第三小隊長となった。四五年本土防衛のため戦車六十輌とともに新潟を経て栃木県佐野に駐屯しているとき終戦となった。四六年新日本新聞社に入ったが四八年倒産のため産経新聞に移って文化部記者となり、五五年から文筆

活動を始めた。ペンネームは『史記』の司馬遷にちなみ「遥かに及ばない」の意を込めて「遼太郎」とした（遼は「はるか」とも読む）。五八年『梟の城』、五九年『大阪侍』、六〇年産経新聞大阪文化部長のとき直木賞を受賞、六二年から産経新聞に『竜馬がいく』を連載し、以後、独特の時代小説・歴史小説を開拓した。小説の題材は源平、室町、戦国、幕末維新、明治大正と広範に及び、古代史研究や民俗学、地誌学、文明学の考察を残した。

青島幸男　あおしま・ゆきお／１９３２～２００６。東京・日本橋の仕出弁当店「弁菊」の次男として生まれ五五年早稲田大学商学部を出て大学院に進んだ。このころから放送作家として活動し五六年早稲田大学大学院を中退してプロの道に入った。五九年フジテレビジョンのバラエティ番組「おとなの漫画」の脚本を手がけたときハナ肇とクレージーキャッツと出会い、同年日本テレビの「シャボン玉ホリデー」に飛入り出演して「青島だ～」のギャグが人気となった。クレージーキャッツの「スーダラ節」「ドント節」で歌謡曲の作詞家としてデビュー、植木等を主人公としたサラリーマン映画「無責任シリーズ」で映画の脚本も手がけた。六八年参院選全国区に立候補し街頭演説など選挙運動をせず当選した。七一年国会代表質問で首相・佐藤栄作に「アメリカ政府の男妾」と発言し物議をかもした。九五年東京都知事選に立ち当選、世界都市博覧会の中止を決定した。九九年東京都知事を任期満了し石原慎太郎にバトンタッチした。

野坂昭如　のさか・あきゆき／１９３０～２０１５。神奈川県鎌倉に生まれ、一九四五年空襲で養父を失い実父に引き取られた。旧制新潟高校を経て早大文学部仏文科に入り七年間在籍した。この間、アルバイトで「伊東に行くならハトヤ」のＣＭソングやコント、テレビ番組の台本などを書いた。六三年「おもちゃのチャチャチャ」でレコード大賞作詞賞、小説『エロ事師』、六七年『火垂るの墓』『アメリカひじき』で直木賞。焼跡闇市派といわれた。七二年雑誌「面白半分」編集長となり八三年参院選比例代表制で当選した。九七年『同心円』で吉川英治賞、二〇〇二年泉鏡花賞。

澁澤龍彦　しぶさわ・たつひこ／１９２８～１９８７。本名は「龍雄」。東京に生まれ東京大学文学部フランス文学科在学中シュールレアリスムに刺激を受け、アンドレ・ブルトン、マルキ・ド・サドに傾倒した。五四年ジャン・コクトーの『大股びらき』を出版して以後、フランス文学の翻訳を行った。五九年サド著『悪徳の栄え・続』翻訳が発禁処分となったが、『夢の宇宙誌』などエッセーや美術評論、中世の悪魔学など幅広い分野で活躍した。『唐草物語』『うつろ舟』『高丘親王航海記』など小説も手がけた。

金　芝河　Kim Chi-Ha／キム・ジハ／１９４１～２０２２。ソウル大学を出て反体制詩人となり、七四年反体制政治犯として無期懲役の判決を受けたが八〇年釈放。韓国を代表する詩人・劇作家として知られ、『五賊』『黄土』など代表作がある。

福田恆存　ふくだ・つねあり／１９１２～１９９４。東京に生まれ一九三六年東京帝国大学英文科を出て中学教師となった。在学中から戯曲と評論を執筆し、第二次大戦後、文明論や社会論を展開した。『近代の宿命』『一匹と九十九匹と』（四七年）、『芸術とはなにか』（五〇年）で評論家としての足場を固め、五三年アメリカに留学後、平和論を展開した。六三年現代演劇協会を発足させ劇団「雲」（のち劇団「昴」）を結成、多くの戯曲を書いた。個人全訳『シェイクスピア全集』を完成させている。

181 崩れゆく”戦後”

第百八十一

崩れ行く〝戦後〟

一

七一年と七二年の出来事を時系列に記す。

一九七一年

1月22日　佐藤栄作首相が施政方針演説で、初めて中国を「中華人民共和国政府」と呼ぶ。

2月17日　京浜安保共闘が真岡市の銃砲店に押入り散弾銃十丁などを強奪。

22日　千葉県成田で新空港建設用地の強制代執行。逮捕者四八七名（～25日）。

3月31日　ハイジャック防止条約を承認。

4月11日　第七回統一地方選挙（東京都知事に美濃部亮吉、大阪府知事に黒田了一）。

5月12日　三菱自動車工業とクライスラー社が提携。

6月17日　沖縄返還協定締結。

27日　第九回参院選挙（自民六三、社会三九、公明一〇、民社六、共産六、無所属二）。

7月1日　環境庁設置（初代長官・山中貞則）。

3日　東亜国内航空のYS―11型旅客機が函館北方山麓に激突（六八名死亡）。

17日　今井通子がグランド・ジョラス北壁登頂（女性初の三大北壁登頂）。

30日　岩手県雫石上空で自衛隊ジェット戦闘機が全日空機と衝突（一六二名死亡）。

8月16日　東京証券取引所、ダウ平均株価が史上最大の暴落

27日　政府、為替変動相場制への移行を決定。

9月16日　成田新空港用地第二次強制代執行。機動隊員三名死亡、逮捕者四七一名（～9月20日）

21日　公明党委員長・竹入義勝が暴漢に刺され重傷。

27日　天皇・皇后が初めて欧州歴訪（～10月14日）。

10月1日　第一銀行と勧業銀行が合併し「第一勧業銀行」に。

11月27日　自民党、沖縄返還協定を強行採決。

12月18日　警視庁警務部長宛てに小包爆弾。夫人が死亡。

○流行語

列島改造／日本株式会社／ドルショック／脱サラ／東京ゴミ戦争／ガンバラナクッチャ／のんびりゆこうよ／こ

れにて一件落着／ディスカバー・ジャパン

○歌謡曲

また逢う日まで／わたしの城下町／花嫁／十七才／水色の恋／知床旅情／傷だらけの人生／雨の御堂筋／ナオミの夢／よこはま・たそがれ／おふくろさん／雪が降る

ＮＨＫ総合テレビの全番組がカラー化され、ＴＢＳテレビの『８時だよ！全員集合』がレギュラー番組として驚異的な五〇・四％の視聴率を取り、素人参加の新人歌手スカウト番組『スター誕生』が人気を集め、『帰ってきたウルトラマン』『仮面ライダー』などで〝変身ブーム〟が起きた。

一九七二年

1月3日　日米繊維協定締結。

24日　グアム島で旧日本軍横井庄一軍曹発見（2月2日帰国）。

2月3日　札幌冬季オリンピック開催（～13日）。

19日　連合赤軍あさま山荘事件（～28日）。

3月15日　山陽新幹線の新大阪―岡山間が開通。

26日　奈良県高松塚古墳で石室に極彩色壁画を発見。

5月15日　沖縄施政権返還。「沖縄県」として日本に復帰。

24日　佐藤首相、中国共産党政府を「中国の唯一の正統政府」と認める。

30日　イスラエル・テルアビブ空港で過激派ゲリラが小銃を乱射。死亡二二十六人。首謀者は連合赤軍の岡本公三。

6月11日　田中角栄『日本列島改造論』を発表。

7月7日　田中内閣が発足。

25日　公明党竹入委員長らが訪中。

9月1日　ハワイで田中―ニクソン会談。

17日　自民党椎名副総裁が台湾を訪問。

25日　田中首相が中国を訪問。

10月9日　第四次防衛力整備計画を正式決定。

11月5日　上野動物園、中国から寄贈のパンダ二頭を一般公開。

13日　女優・岡田嘉子、三十四年ぶりにソ連から一時帰国。

12月10日　第33回総選挙（自民二七一、社会一一八、共産三八、公明二九、民社一九、諸派二、無所属一四）

○流行語

三角大福／総括／甘えの構造／恍惚／未婚の母　／わんぱくでもいい／あっしにゃかかわりのねぇことでござんす／ナウい／恥ずかしながら／どうにもとまらない／ア

ヘアへ。

○流行歌

瀬戸の花嫁／旅の宿／結婚しようよ／さよならをするために／ひとりじゃないの／雨／別れの朝／ピンポンパン体操／だれかが風の中で／学生街の喫茶店／たどりついたらいつも雨ふり／ひなげしの花／北国行きで／どうにもとまらない／女のみち／終着駅／あの鐘を鳴らすのはあなた／せんせい／喝采。

緒方拳扮するところの藤枝梅安らが極悪人を殺す『必殺仕掛人』、太刀捌きはカッコ悪いがニヒルな渡世人を描いた『木枯し紋次郎』が人気を集め、平岩弓枝脚本の『ありがとう』が五六・三％の視聴率新記録を作り、刑事アクションドラマ『太陽にほえろ！』が始まった。テレビコマーシャルに遠藤周作、山口瞳、岡本喜八、中原誠、植草甚一などが登場した。

二

第二次大戦の終結から二十五年、日本は自他ともに認める〝経済大国〟に成長を遂げていた。東京オリンピック、大阪万博を経て、人々は「昭和元禄」を謳歌していた。

この発展は、いうまでもなく「貿易立国政策」によってもたらされた。それは一ドル＝三百六十円という固定為替レートによって支えられていた。経済という視点で見れば、「もはや戦後ではない」と宣言した一九五一年は「戦後体制」が始まった年でもあった。

前節に掲げた七一年と七二年の出来事から読み取れるのは、その「戦後体制」の崩壊にほかならない。ここで日本は大きく回頭したのである。

一ドル＝三百六十円の為替レートが決定したのは、一九四九年四月二十九日である。以下のことは第八十九「1ドル＝三百六十円」の繰り返しになる。

このレートの決定はＧＨＱによって行われ、日本政府はまったく関与していなかった。というより、日本政府は商品ごとに異なる為替レートを設定する複数為替制度の創設をひそかに検討していたが、ＧＨＱはこれを無視して一方的に固定レートを決定したのだった。

『わが国の金融制度と金融政策』『日本銀行』など百冊を優に超える著書を持つ吉野俊彦は当時、日本銀行の調査局に勤務していた。いわば複数為替レート制度立案の中心人物といっていい。

ところが彼は後年、

――どのような経緯で三百六十円のレートが設定されたのか、まったく知らなかった。

と述懐している。

一般論として、その決定にはデトロイト銀行頭取でＧＨＱ特別顧問として四九年二月に来日したジョセフ・ドッジが深く関与している、といわれる。

来日したドッジの目の前には、激しいインフレがあった。敗戦処理に伴う臨時軍事費特別会計と傾斜生産方式による復興金融金庫融資が通貨を増発し、インフレの元凶となっていた。

日本政府は生産拡大を優先し、段階的にインフレ収束を図る「中間安定論」を唱えたが、インフレの収束を重視するアメリカ政府の「一挙安定論」が優勢となった。アメリカは日本を反共陣営の一員として位置づけるために、経済の「自立化」「安定化」を図ろうとした。これを具体化したのがドッジ・ラインだった。

来日後初の記者会見で、ドッジは

「日本の経済は両足を地につけていず、竹馬にのっているようなものだ。竹馬の片足は米国の援助、他方は国内的な補助金の機構である。竹馬の足をあまり高くしすぎると転んで首を折る危険がある」

と語り、また

「為替レートの実施はできる限り早く公式に設定されることが望ましい」

と述べ、単一固定レートの設定を主張した。

そのベースとなったのは四八年に来日したアメリカ連邦準備制度理事会（ＦＲＢ）調査統計局次長ラルフ・ヤングの報告書である。彼は日本の国際社会への復帰を前提に、ＧＨＱから円・ドル為替レートにかかわる調査を行った。

のち五七年五月から、吉野は日銀からＦＲＢに出向し、ワシントンの事務所でラルフ・ヤングの下で金融政策の調査研究に従事したが、むろんそのときは直属の上司が円・ドル為替レートの決定に重要な役割を担った人物とは思いもしなかった。

一九七一年の一月、日銀理事に昇進していた吉野のもとに分厚い封書が届けられた。差出人はラルフ・ヤング、このとき国際通貨基金（ＩＭＦ、四五年十二月発足）顧問。封筒の中に入っていたのは二十四年前に彼がＧＨＱに提出した報告書の写しだった。

そこには固定レートによる単一為替制度が強調され、

「一ドル＝三百円前後が適当と確信する」

という文言が示されていた。かつ、上下一割程度の浮動性をもってＧＨＱが設定する権利を持つよう勧告していた。

ところで国際為替レートにおけるドルの地位は、それまで国際標準通貨の座にあったポンドの凋落と交錯している。

このあたりは経済学の基本的な知識として抑えておかな

ければならないのだが、金との兌換性および、外貨準備高とのかかわりなどが複雑に絡み合うため、一言で説明するのが難しい。

一ついえることは、第二次大戦後にイギリスがポンドを切り下げたとき、アメリカの金保有量は世界の七二％に相当する二百四十八億ドルだった。金との兌換性が最も高い国際通貨だった。

ところが朝鮮戦争をきっかけにアメリカが保有していた金は流出に転じ、さらにマーシャル・プランに基づいて第二次大戦直後の欧州復興に投じられたＩＭＦ枠外のユーロ・ダラーがアメリカに還流し始めた。これによりアメリカの金準備高は一〇〇％を割り込み、世界の投資機関はドル選好から金選好にシフトした。

つまり戦後の世界経済の基盤でもあった「金一オンス＝四十ドル」の固定相場――ＩＭＦ体制――にほころびが生じていた。ここにベトナム戦争の戦費増加が追い討ちをかけた。

対して日本は西ドイツと並んで貿易黒字を積み上げていた。そのプロセスは、世界経済におけるアメリカの地位が相対的に低下し、日本と西ドイツ、とりわけ日本の地位の相対的な上昇を生み出した。

例えば国民一人一時間当たりの国内生産量（ＧＤＰ）の年間上昇率を見ると、一九五〇年から七六年にかけて、アメリカが二・三％であったのに対し、日本は七・五％、西ドイツは五・八％、イタリアは五・三％だった。生産性上昇率において、日本はアメリカの三倍を超えていた。

三

貿易黒字を重ねた結果、日本には膨大な額の外貨が集まった。

一方のアメリカは保有する金の流出に悩んでいた。

日本の「円」は外貨準備高によって支えられ、かつドルの国際信用力に裏打ちされていた。そのドルの信用度が低迷しつつあった。国際経済政策として〔円とドル〕の関係見直しが迫られるのは時間の問題だった。

この状況を日本はどのように分析していただろうか。まず大蔵省は、「ドル陣営」の一員として、ドル防衛に立つ意向を固めていた。強まる円買い圧力に、ドル買いで対抗しようというのである。

このとき大蔵省事務次官だった鳩山威一郎は、ドル防衛策一辺倒では危険と考えていた。このため「欧州派」――ポンド、フランの変動為替制度を「円」にも導入すべきとする考え――の論者である竹内道雄を大臣官房長に、津島

雄二を参事官に、佐上武弘を調査企画課長に、それぞれ配置して対応策の検討を進めていた。

五月九日、西ドイツが対ドル変動為替制度への移行を正式に表明した。主要国で態度が明確でなかった日本の「円」に世界の投資機関が目を向けた瞬間だった。日本の対応が遅れた。

アメリカ・ワシントン現地時間で八月十五日日曜日の午後八時、アメリカ大統領・ニクソンは

――ドルと金の交換を停止する。

と発表した。

日本では八月十六日の月曜日午前十時だった。

東京外国為替市場ではすでに取引きが始まっていた。このとき財務官だった細見卓（のちニッセイ基礎研究所会長）は、

――商社や旅行業者の金繰りがつかなくなる。

と判断して、市場を閉鎖することに消極的だった。

投資三課長だった大場智満（のち財務官を経て国際金融情報センター理事長）は、市場を閉め、再開したとき円高の大波が襲ってくる、と考えた。

細見の判断が通った。

日銀は必死のドル買いで防戦した。市場を閉鎖した八月三十日までの間に、日銀が買ったドルは総額四十億ドルに達していた。外貨準備高の約半分が、東京市場の十一営業日でドルに交換されたのだ。

ドル・金交換の一時停止が発表された直後、東京証券取引所が暴落した。十九日、ダウ平均株価は二千百九十円六〇銭の最安値をつけ、経済は混乱を極めた。

八月二十七日、大蔵省は変動為替制度への移行を決定し、翌二十八日から実施した。ややしばらく一ドル＝三百六十円が維持されたが、十月に一ドル＝三百三十三円、十一月に三百二十九円とジリジリと円高が進み、十二月には三百二十円になっていた。日本政府に思い切った円の切り上げが求められた。

結局、円・ドルの為替レートは、その年の十二月十八日、ワシントンD・Cのスミソニアンで開かれた十か国蔵相会議で「一ドル＝三百八円」と決定した。切り上げ率は一六・八六％だった。

この時点でアメリカは、ラルフ・ヤングの報告書「一ドル＝三百円」の考え方を強く押し出した。

ヤングが吉野俊彦に報告書の写しを送付したのは、アメリカ政府の意図を事前に知らせようとした配慮だった、と見ていい。であればこそ首相佐藤栄作はワシントン・スミソニアン十か国蔵相会議に出席する細見卓を官邸に呼んで、

「三百五円まで譲歩していい」

という指示を下したのではなかったか。

四

このとき、大蔵大臣だったのは水田三喜男である。

彼は一ドル＝三百八円への対抗策として、ひそかにデノミを考えていた。百円を一円に切り上げるのである。この考えを始めて公の席で明らかにしたのは、六七年の国会答弁だった、とされている。

首相佐藤は消極的――というより、引退を決意していた――ために、大胆な変革を求めなかった。ニクソンのドル防衛策が発表される直前の七一年七月にも、水田は

「デノミをやるべきだという意見には変わりはない」

と記者会見で語っていた。

事務次官の鳩山威一郎、調査企画課長の佐上武弘もまたデノミ論者だった。「デノミに向けた最強の布陣」といわれていた。八月二十五日、水田は記者会見で、七三年一月一日から現在の百円と等価の通貨単位を設けることを目途として所要の準備を進める、と発表する予定だった。だがこの計画は、大蔵省の理財局と造幣局の反対でお蔵入りとなった。

理財局は言った。

――補助単位「銭」が必要になり、かえって煩雑になる。また造幣局は、

――コインを全面的に切りかえるには時間がかかりすぎる。

と反対した。

経済効果や国際通貨としての「円」の信用力向上という視点はまったくなかった。結局、首相・佐藤が「見送り」を指示し、水田のデノミ計画は幻に終わった、といわれる。リチャード・ニクソンは、このドル防衛策でアメリカ経済の建て直しを目指したが、三つのことを見落としていた。

ために、ねらい通りの効果を上げることができなかった。一つはベトナム戦争を早期に終結できなかったことだった。

ニクソンは必死の努力をした。

七月九日に補佐官ヘンリー・キッシンジャーをひそかに中国・北京に派遣し、周恩来首相と会談させ、同年十月にも再度、キッシンジャーを派中してベトナム和平工作への協力を依頼した。台湾国民政府の代わりに中国共産党政府を中国の代表として認めるというのが交換条件だった。

翌七二年二月二十一日、ニクソンは北京空港に降り立ち、中国共産党主席・毛沢東、首相・周恩来と会談した。中国は北ベトナムへの軍事援助を弱め、アメリカも可能な限り速やかに軍を撤退するという合意が成立した。中国共産党

政府が国連で代表権を認められたのは十月二十五日である。

とはいえ、アメリカは南ベトナムを見捨てることができなかった。七二年五月、アメリカ軍は北ベトナムへの爆撃を強化するとともに、港湾を機雷で封鎖する作戦に出た。

その一方で、キッシンジャーは八月十四日にパリで北ベトナム政府代表のレ・ドク・トと秘密会談を行い、和平協定案を示していた。十二月十八日には過去最大の規模をもって北ベトナムのハノイ、ハイフォンを爆撃したのだから、アメリカのやり口は矛盾に満ちていた。要するに自分たちが撤退した後、南ベトナムが負けないよう、叩けるだけ叩いておこうという作戦だった。

七三年一月二十七日、パリでベトナム和平協定が調印され、アメリカ軍が南ベトナムから撤退を完了したのは二月二十八日である。とりあえずアメリカはベトナムの泥沼から足を抜くことができたが、ラオス、カンボジアの混乱という難問が残っていた。

戦費の縮小→国内経済の回復

というシナリオが動き出すには、もう少し時間が必要だった。

二つ目は、ドルの信用低下を甘く見ていたことだった。七一年十二月十八日のワシントン・スミソニアン十か国蔵相会議で「金一オンス＝三十八ドル」「一ドル＝三百八円」の新しい為替レートが定まったものの、ドル売りは勢いを失わなかった。スミソニアン合意では、新しい為替レートの上下最大二・二五％の範囲で変動を認め、その範囲を維持するよう、各国が市場に協調介入することになっていた。

二・二五％の変動幅内に為替レートを維持するには、相当の外貨準備がなければならない。翌年六月、イギリスがスミソニアン体制からの離脱を宣言し、国際通貨危機が再燃した。ヨーロッパ主要国がスミソニアン体制からの離脱を決定したのは七三年三月十一日だった。

これがニクソンの三つ目の見落としだった。

中東の産油国は油井の開発をアメリカ大資本に依存し、原油の輸出をドル建てで行っていた。原油のほかに輸出するものがない砂漠の国は、ドル安で収入が大幅に減った。油井がアメリカ資本に抑えられていることに対して、民族主義が勃興した。

国内経済の建て直しを優先するあまり、中東に与える問題を軽視したアメリカのやり方は、世界経済における南北問題を生み出した。

七二年十月、石油輸出国機構（ＯＰＥＣ）は、

――石油関連企業の株式の五一％以上を国有化すること。

を目標に設定した。

これが七三年から七四年にかけて起こったオイルショッ

クに結びつき、ひいては中東におけるイスラム革命戦争の下地となっていく。アメリカはベトナム戦争に続いて、「中東」という重い荷物を背負うことになる。

～～～～　補　注　～～～～

黒田了一　くろだ・りょういち／１９１１～２００３。大阪に生まれ一九三三年東北大学を出て満州の大同学院の教官となった。四五年八月十四日ソ連軍の捕虜となりシベリア抑留から五〇年帰国、五六年大阪市立大学で憲法学教授となった。戦争の放棄をうたった日本国憲法の護持を訴え社会・共産推薦で七一年大阪府知事選に立候補し当選した。高齢者医療費の無料化、府営春木競馬廃止、同和問題解消などに取り組んだ。三期目を迎えた七九年の選挙で自・社・公・民・社民推薦の岸昌に敗れた。

山中貞則　やまなか・さだのり／１９２１～２００４。鹿児島に生まれ一九四一年台湾・台北第二師範を出た。戦後、鹿児島県議となり五三年鹿児島三区から衆院議員となった。七〇年佐藤内閣で総理府総務長官、環境庁長官、田中内閣で防衛庁長官、中曽根内閣で通産相。八八年消費税法案をまとめたが八九年辞任、九〇年の総選挙で落選した。

ＹＳ―１１型旅客機　第二次大戦後、日本が開発した初の中型輸送機で、一九六二年に初飛行し、七二年に製造を終了した。全幅三十二メートル、全高八・九九メートル、最大巡航速度毎時四百七十四キロ、航続距離三百三十キロだった。六十二人から六十七人を乗せることができた。試作機二機を含め一八二機が作られた。

今井通子　いまい・みちこ／１９４２～　：東京に生まれ六六年日本女子医大を出た。学生時代から登山のスペシャリストとして知られ、大学卒業の六六年一ノ倉烏帽子沢奥壁ダイレクトルートの初登攀に成功、六七年マッターホルン北壁、六九年アイガー北壁、七一年グランド・ジョラス北壁の登攀に成功した。アルプス三大北壁に成功した初の女性となった。

竹入義勝　たけいり・よしかつ／１９２６～　：長野県に生まれ陸軍士官学校在学中に終戦となり、戦後は国鉄機関区職員となった。結核に罹ったことから五三年創価学会に入信、六三年政治大学校を出て六四年公明党結党とともに副書記長、六七年公明党第三代委員長。八六年に委員長を退任するまでの二十年間、書記長・矢野絢也とコンビを組み国会議員八十人、地方議員三千六百人を擁するまでに党勢を拡大した。六九年、藤原弘達の『創価学会を斬る』の出版をめぐって言論出版妨害事件の際、委員長辞任を表明したが党内の反対でとどまり、政教分離に努めた。

第一勧業銀行　一九七一年、当時都銀第六位の第一銀行と第八位の日本勧業銀行が合併して発足した。合併により当時一位だった富士銀行を上回る規模となった。二〇〇三年日本興業銀行、富士銀行と合併して「みずほ銀行」となった。

８時だよ！　全員集合　人気コメディグループのザ・ドリフターズを起用して、一九六九年十月から東京放送系列で土曜日午後八時から九時に放送された。六七年三月に新宿コマ劇場で行われた公演「春だ　若さだ　全員集合!!ザ・ドリフターズ」に着目した東京放送が四月から放送した特別番組「ザ・ドリフターズ・ドン」が発展した。放送開始から平均視聴率が三〇％超というオバケ番組だった。八五年九月まで計八百三回という長寿番組となった。

スター誕生　一九七一年十月から八三年九月まで日本テレビ系で放送された新人歌手発掘番組。公開オーディションを経て決勝に残った出場者に対してレコード会社や芸能プロダクションが契約希望を意思表示するかたちだった。応募総数は約二百万通に及び、

予選通過者は約六十万人、番組出場者は五千五百組、決戦大会出場者は四百二十三組で、ここから森昌子、桜田淳子、山口百恵、城みちる、伊藤咲子、片平なぎさ、岩崎宏美、新沼謙治、ピンク・レディー、石野真子、柏原よしえ、小泉今日子、中森明菜　松本明子などが出た。番組の名は、当時テレビ作家だった阿久悠が付けた。

帰ってきたウルトラマン　一九七一年四月から七二年三月まで東京放送系で毎週金曜日の午後七時から三十分放送された円谷プロダクション制作の特撮映画。

仮面ライダー　一九七一年四月から七三年二月まで毎日放送・NET系で放送された特撮変身ヒーローもの実写映画で石ノ森章太郎が原作と漫画の執筆を担当した。原作者・石ノ森は当初ガイコツをモチーフにした怪奇もの「スカルマン」を考えていたがテレビ局や雑誌社などから「ガイコツでは支持されない」と反対された。バッタの顔がガイコツに似ていることに気づき、バッタがベースになった。

横井庄一　よこい・しょういち／１９１５～１９９７。愛知県に生まれ、陸軍に応召して第二十九師団の食料・弾薬運搬部隊の兵卒となった。四四年アメリカ軍が投降を呼びかけた際、本隊は降伏したが投降命令が伝わっていなかった。アメリカ軍が空中から撒いた宣伝ビラなどで戦争が終わったことは知っていたが、出て行ったら処刑されるのではないかと考えた。七二年二月二日現地の漁民に発見され保護された。

その二年後の七四年二月、フィリピンのルバング島で元日本陸軍少尉・小野田寛郎（おのだ・ひろお／１９２２～２０１４）が救出されたが、中野学校で教育を受けた諜報将校と一兵卒の違いが興味本位で取りざたされたり、私生活を報道されたり当人たちには迷惑なことが少なくなかった。

高松塚古墳　奈良県明日香村に存在する直径約十八メートル、高さ約五メートルの円墳。一九七二年三月に奈良県立橿原考古学研究所が行った発掘調査で鮮やかな彩色が残る壁画が発見された。北壁に玄武、西壁に男女人物群像、東壁に青龍、天井に星宿が描かれており、唐や高句麗の影響が確認された。極彩色壁画は、国宝に指定されている。

その後の調査で最大幅約二・五メートルの周濠が見つかり、築成時は下段が直径二十三メートル、上段が直径十八メートルの二段の円墳と確定した。また最下層に飛鳥期（六九〇年代―七一〇年）形式の須恵器四点が混じっていたことから、二〇〇五年二月、文化庁は「築造時期は藤原京期とみられる」と発表した。

岡田嘉子　おかだ・よしこ／１９０２～１９９２。広島県に生まれ一九一八年（大正七）東京女子美術学校を出て二〇年舞台協会に参加し、二一年帝国劇場で初舞台を踏んだ。二二年映画に初出演し二五年日活専属女優となり二七年『椿姫』の撮影中に男優・竹内良一と失踪し〝恋の逃避行〟として話題になった。三八年一月、演出家の杉本良吉と樺太国境を越え、消息不明となる。スターリンによる大粛清のソ連で二人はスパイ容疑で国家警察に逮捕され杉本良吉は銃殺、岡田嘉子は収容所に送られたが十年後に解放されモスクワ放送のアナウンサーとなった。のち同じくソ連に潜入していた滝口慎太郎と結婚したが七二年に夫が死去したため、その遺骨とともに同年十一月帰国した。七四年に再度来日しテレビなどに出演、八六年にモスクワへ帰った。

緒方　拳　おがた・けん／１９３７～２００８。本名は「伸明」。

東京に生まれ五七年都立竹早高校を出て新国劇に入り六〇年『遠い一本の道』で主役、六五年NHK大河ドラマ『太閤記』で豊臣秀吉役を演じ高橋幸治（一九三五～）の織田信長と好対照な軽妙さで人気となった。テレビ時代劇『必殺仕掛人』で愛嬌と凄みのある奥深い演技を見せ、映画『砂の器』『八甲田山』『鬼畜』などで人間の多面性を演じることができる貴重な役者として不動の地位を固めた。

必殺仕掛人　池波正太郎の小説『仕掛人・藤枝梅安』を原作にNET（のちテレビ朝日）系列で七二年九月二日から七三年四月十四日まで計三十三回放送された。最初の二回を深作欣二が監督した。際立った陰影と色彩の映像を作った。

木枯し紋次郎　一九七二年フジテレビ系列で計十八回放送された時代劇で第一回から第三回まで市川昆が演出を担当した。渡世人・木枯し紋次郎が「あっしにはかかわりのねえことでござんす」と言いつつ、社会的弱者につい手をさしのべていく。本来は経営難に陥った大映が映画製作資金を得るために製作を受けた。クイズ番組「クイズ・タイムショック」の司会で人気があった俳優・田宮二郎（1935～1978）が笹沢佐保の原作を持ち込んだ。

平岩弓枝　ひらいわ・ゆみえ／1932～　：東京・代々木八幡宮司の家に生まれ日本女子大学を出て小説家を目指した。五九年『鑿師（たがねし）』で直木賞。七二年『かまくら三国志』、七四年『御宿かわせみ』、七五年『へんこつ』など小説を書くかたわらテレビドラマの脚本も手がけ『肝っ玉母さん』『女と味噌汁』『ありがとう』などで知られる。

ありがとう　東京放送系列で七一年に第一作が放送された。東京の下町に暮らす母一人娘一人の日常を描くホームドラマで、演歌歌手・水前寺清子に石井ふく子がトイレで出演交渉したというエピソードがある。

太陽にほえろ！　日本テレビが石原プロと組んで七二年から放送した。石原裕次郎、渡哲也を軸に「警視庁七曲警察署捜査第一課」を舞台にハードボイルドと人情を織り交ぜ、派手なカーアクションが話題となった。町おこしの一環でロケの誘致合戦が起こるなど社会現象を生み出した。このドラマから萩原健一、松田優作、勝野洋、神田正輝といった男優が輩出した。

遠藤周作　えんどう・しゅうさく／1923～1996。東京に生まれ満州の大連に移り住んだ。三五年夙川カトリック教会で受洗、洗礼名「ポール」を得た。四三年慶應義塾大学文学部予科に入り、四七年初のエッセイ『神々と神と』が雑誌「四季」（角川書店）に掲載された。五〇年フランスのリヨン大学大学院に留学したが体調を崩し五三年に帰国した。同年処女エッセイ集『フランスの大学生』を出版、五五年小説『白い人』で第三十三回芥川賞。七〇年代からテレビCMに出演するなど多彩な活動を展開、洒脱なエッセイ『狐狸庵閑話』が人気を集めた。七〇年ローマ法王庁からシベストリ勲章、七七年芥川賞の選考委員、七九年芸術院賞、八一年芸術院会員、八五年日本ペンクラブ会長、九五年文化勲章を受けた。

山口　瞳　やまぐち・ひとみ／1926～1995。東京に生まれ早稲田大学を中退して鎌倉アカデミアに学び、のち国学院大学日本文学科を出て国土社、河出書房、五八年寿屋宣伝部に入った。開高健らとPR雑誌「洋酒天国」を編集するかたわら書いた小説『江分利満氏の優雅な生活』で直木賞。主な著作に小説『人殺し』『家族（ファミリー）』、エッセイ『男性自身』などがある。

岡本喜八　おかもと・きはち／１９２４～２００５。鳥取県米子市に生まれ、四三年東宝に入った。映画界にはいるきっかけはジョン・フォード監督の西部劇『駅馬車』などに魅せられたためだった。その直後に戦時徴用され、豊橋予備士官学校などを経て戦後復職し、成瀬巳喜男監督らの助監督を務めた後、五八年『結婚のすべて』で監督としてデビュー、五九年自作脚本の戦争風刺活劇『独立愚連隊』で監督としての地位を確立した。

中原　誠　なかはら・まこと／１９４７～　∴鳥取県に生まれ将棋の高柳敏夫門下に入って五八年六級、六一年初段、六五年十八歳で四段となり奨励会からプロ棋士となった。六七年六段、六八年七段、六九年八段となり、二十四歳のとき（七二年）大山康晴から名人位を奪取した。棋風は「自然流」と呼ばれ、二〇〇三年日本将棋連盟会長に就任した。

植草甚一　うえくさ・じんいち／１９０８～１９７９。東京に生まれ一九三〇年早稲田大学理工学部に入ったが除籍処分となった。三五年東宝に入り四四年新宿文化座主任となり空襲の中でも映画の上映を止めなかった。四七年フリーとなり映画評論や海外ミステリーの翻訳を始め、並行してモダンジャズ評論を手がけた。以後、米欧のジャズやポップスの専門評論家となり、エッセイ集も出した。

１ドル＝三百六十円　この為替レートが決定したのは一九四九年四月二十九日である。日本政府は複数為替制度の創設をひそかに検討していたが、ＧＨＱはこれを無視して一方的に固定レートを決定した。一般論として、その決定にはデトロイト銀行頭取でＧＨＱ特別顧問として四九年二月に来日したジョセフ・ドッジが深く関与しているといわれる。

吉野俊彦　よしの・としひこ／１９１５～２００５。千葉県に生まれ一九三八年東京帝国大学法学部を出て日本銀行に入った。四一年調査局に配属され六六年調査局長、七〇年理事、七四年山一証券経済研究所理事、八四年同研究所会長、八五年顧問。『わが国の金融制度と金融政策』『日本銀行』など計百二十二冊もの著書を出版し、森鴎外の研究家としても知られる。

水田三喜男　みずた・みきお／１９０５～１９７６。千葉県の富農に生まれ、三一年京都帝大法学部を出て北越石油に入り、大同石油取締役を経て四六年、自由党から立候補し衆院議員となった。吉田内閣で経済審議庁長官、五五年の保守合同で誕生した自由民主党で政調会長を務め、石橋内閣で通産相、池田・佐藤内閣で蔵相。京大時代はマルクスに傾倒し、柔道五段、剣道三段の腕を見込まれて河上肇のボディガードを務めたこともあった。

佐上武弘　さがみ・たけひろ／１９２２～２０１８。一九四八年東京大学法学部を出て大蔵省に入った。六九年銀行局課長、七一年大臣官房調査企画課長、七三年近畿財務局長、七五年大臣官房審議官、七七年大臣官房長、七八年財務官を経て八六年モルガン銀行国際顧問となった。

ヘンリー・キッシンジャー　HenryAlfred Kissinger／１９２３～　ドイツに生まれナチス・ドイツのユダヤ人迫害を逃れて一九三八年アメリカに移住、四三年アメリカ国籍を取得した。ハーバード大学で博士号を取り五〇年代末から同大学教授として外交委員会に関与し外交安保専門家となった。アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン大統領時代に国家安保会議と国務省顧問を経てニクソン政権で大統領補佐官に抜擢され、ソ連との戦略兵器制限条約、七一年には極秘に中国を二度訪問し米中和解への道筋をつけた。

七三年ベトナム和平によりノーベル平和賞。同年から七七年まで国務長官を務め、二〇〇二年十一月の同時多発テロ後、真相を究明する特別委員会委員長となった。

182 暴発

第百八十二

暴　発

一

第百七十九「赤軍」の続き。

六九年十一月、新左翼諸派は同月十七日の佐藤訪米阻止に向けて、その年最大規模の動員をかけていた。治安当局も対抗して大規模な捜索活動を行った。

まず十一月十四日に川崎地区の活動家宅、勤務先十七か所を強制捜索し、併せて中核派拠点二か所から火炎ビン計二千九百六十八本を押収した。次いで十六日には中央大学、一橋大学、東京外語大学などの学生寮を強制捜索し、事前の戦力削減を図った。

並行して敷いた警備体制は、首相一行を羽田まで空輸する自衛隊ヘリコプター四機、護衛用ヘリコプター六機のほか、機動隊を首相官邸に三百人、霞が関一帯に三千人、蒲田から羽田空港にかけて二万人を配備して三重の防衛線を張る物々しさだった。

衝突は十六日夕刻から始まった。

当時の新左翼の闘士には定番のスタイルがあった。ヘルメットをかぶり、タオルで覆面をし、ビニールのレインコートと軍手というのが基本だった。足下はもちろんズックである。この恰好で角材を手にすれば、即席で新左翼の闘士が誕生した。

タオルは「面」が割れないようにするのと、催涙ガスを少しでも吸引しないようにするためだった。レインコートは機動隊の放水に備えるためである。この恰好で通常の山手線や私鉄の電車にドヤドヤと乗り込んで、〝戦場〟を移動したのだから、何ともマンガチックではある。

ともあれ十一月十六日、中核派は五千人の勢力で立ち向かった。

まず、午後四時に先発隊五百人が国鉄京浜東北線蒲田駅に降り立った。ここから羽田空港に向けて進んだところ、途中で機動隊に阻止された。ここで百人が逮捕された。

同じころ、別動隊百五十人が警視庁蒲田署に火炎ビンを投げた。さらに別動の五百人は非常停止コックを引いて京浜東北線の大森―蒲田間で電車を停め、線路沿いに羽田に向かって〝進軍〟した。先発隊と蒲田駅前で合流したが、再び機動隊に行く手を阻まれた。

その後、蒲田署を再度攻撃し、品川署に押しかけ、五百人をもって交番を襲い、午後七時、ＭＬ派三百人、社学同

二百人と合流して八時過ぎまで機動隊ともみ合った。
一方、社学同の赤ヘル隊一千五百人は、東横線田園調布駅で電車から降り、徒歩で下丸子を経て蒲田に向かった。この部隊も途中で機動隊とぶつかり、蒲田駅にたどいついたときは百人に減っていた。
ＭＬ派一千人は京浜東北線がストップしていたため品川で降り、品川署前で機動隊と衝突した。プロ学同・フロント連合の四百人は東急池上駅から羽田空港を目指したが、池上署前で機動隊と衝突した。反帝学評の五百人は東京駅で機動隊の先制攻撃を受けた。
新左翼各派が個別に行く手を阻まれ、動きを封じられた翌十七日、佐藤訪米のスケジュールは大きな混乱もなく、無事に終了した。首相佐藤栄作ら一行は、自衛隊のヘリコプター四機に分乗し、官邸から十分で羽田飛行場に到着した。
新左翼各派は、アジテーションで口にする過激な言葉とは裏腹に、動員力や機動力の限界を露見していた。それを尻目に赤軍派は、より「革命」的であろうとした。大菩薩峠の挫折を経て、彼らは世界の反帝勢力と手を結ぼうと企てた。
十一月中旬、同派「国際部長」の元京大生が結婚し、新婚旅行を兼ねてメキシコを経由してキューバに潜入した。
ここで現地の勢力とコンタクトを取った。彼らはまず、キューバに革命の拠点を作ろうと考えた。この企ては「フェニックス計画」と名づけられた。出国するだけでなく、高飛び用の航空機がなければならない。
議長・塩見が都内で逮捕されたとき、保持していた手帳に「ＨＪ」の文字があった。公安当局は人の名のイニシャルだと思って、深く追求しなかった。赤軍派ナンバーツーの田宮高麿は、塩見が逮捕されたことから計画が露見するのを恐れ、主要な幹部に
――フェニックス計画の発動を早める。
と連絡した。
当初、決行は三月二十七日に予定されたが、参加者の不都合が生じて三十一日に延期された。
当日、羽田空港に集まったのは九人だった。彼らは福岡行き日航ボーイング７２７ジェット旅客機「よど号」にバラバラに搭乗し、安定飛行に移った富士山上空で行動を起こした。
ハイジャックだった。
――平壌に飛べ。
と田宮が命じた。
北朝鮮の平壌に逃れた九人のうち、元工員の吉田金太郎はほどなく平壌で病死、リーダーの田宮も九五年に死亡し

たが原因は分かっていない。岡本武も未確認ながら一九八八年に死亡したと伝えられている。

柴田康弘は八五年に日本に戻ったが八八年に逮捕され、田中義三は二〇〇〇年にタイで身柄を拘束された（日本に送還され逮捕）。

若林盛亮、小西隆裕。赤城志郎、安部公博の四人は、ポプラ事件が勃発した一九七六年、そろって平壌で結婚式を挙げた。その後異変がなければ現在も平壌にとどまっているはずである。

二

七〇年の三月十五日、アジトを出たところで議長の塩見が警視庁に逮捕され、同三十一日に実行したフェニックス作戦で幹部九人が北朝鮮に出国した。このことで赤軍派は壊滅的な状況に追い込まれた。このため赤軍派の残党は、いったん離脱していた森恒夫をリーダーに立てて再編を進めていった。

――活動を継続するために資金の強奪も辞さず。

とした森に、はたしてどれほどの思想性があったか。

ともあれ森の指導のもとで「ＰＢＭ作戦」が動き始めた。

・Ｐは「ペガサス」＝人質を取って獄中の幹部を奪回

・Ｂは「ブロンコ」＝国際拠点の建設

・Ｍは「マフィア」＝活動費の確保

だったが、ＰとＢは非現実的に過ぎた。

結果として、Ｍのみが実行に移された。

この時期、治安当局は赤軍派より「京浜安保共闘」を名乗る過激派の動きに目を光らせていた。京浜工業地帯の労働者や学生を中心に赤軍派とほぼ同時期に結成され、「武装闘争によって政権が生まれる」というスローガンを掲げていた。

京浜安保共闘は六九年十月三十一日、岐阜県の赤坂山石灰採掘現場からダイナマイト十五本、雷管三十本を盗み、アメリカ軍の厚木基地、立川基地、横浜の米国館などで爆破未遂事件を起こしていた。

また七〇年十二月十八日に東京の志村署上赤塚交番を襲撃し、拳銃を奪おうとした横浜国立大学生・柴野春彦が巡査に射殺された。彼らはその報復を思い立ち、交番に手製爆弾を投げ込み、警視総監公邸や警視庁職員寮に爆弾を仕掛け、ついに小包爆弾作戦を実行した。

翌七一年二月十七日、栃木県真岡市の塚田銃砲店から散弾銃十丁と空気銃一丁、散弾実砲二千三百発が強奪された。次いで二月二十二日、千葉県市原市の辰巳台郵便局で現金七十一万八千六百七十八円が強奪される事件が発生した。

赤軍派は強奪した現金のうち三十万円で、京浜安保共闘から銃二丁と実弾二百発を購入した。以後、現金強奪事件が頻発した。

横浜市の小学校職員給与強奪事件（五月十五日）からほどなくして、新左翼各派は六月十七日、「沖縄返還調印阻止闘争」を展開した。

午後九時、デモを規制中だった機動隊の隊列に鉄パイプ爆弾が投げ込まれた。機動隊員二名が腹部裂傷、大腸露出の重傷を負ったほか、計三十七人が重軽傷を負った。赤軍派と京浜安保共闘の合体がこうして準備されていく。

七一年十二月十八日、警視庁警務部長の土田国保宅に届いた小包が爆発した。その妻・民子が死亡、そばにいた四男も重傷を負った。

この日、午後六時から板橋区民会館で「一二・一八柴野春彦虐殺弾劾一周年追悼集会」が開かれた。主催は京浜安保共闘と赤軍派の合同だった。二つの超過激ゲリラ組織が手を結んだときだった。

十二月二十四日のクリスマス・イブ、新宿伊勢丹デパート前の四谷署追分交番でクリスマスツリーに見せかけた爆弾が爆破した。二人の巡査が重軽傷を負い通行人十人が巻き添えをくった。

一方、京浜安保共闘は赤軍派に銃、実弾を売却した三十万円で山梨県北都留郡に「小袖ベース」、同じく山梨県東山梨郡の破不山に「塩山ベース」をそれぞれ設けていた。

相前後して向山茂徳、早岐やす子の二人が組織から抜けたため、この二つの秘密基地は撤収されたが、ここから先、彼らは狂気の世界に入っていく。

幹部の永田洋子、坂口弘、寺岡恒一、吉野雅邦らは、

――組織防衛のためには、逃走した二人を殺さなければならない。

と決意し、八月四日、早岐やす子を絞殺して、死体を千葉県印旛沼付近の雑木林に埋め、同十日には小平のアジトに向山茂徳を誘い出して絞殺した。

その死体は早岐と同じ印旛沼の雑木林に埋められた。殺された二人が埋められていたのは、十メートルも離れていない穴だった。彼らは殺人集団になった。

九月以後、彼らは関東地方の山に秘密基地を建設していったが、逮捕者が出るたびに露見を恐れて撤収せざるを得なかった。神奈川県丹沢に「丹沢ベース」、十月には静岡県大井川に「大井川ベース」、十一月には群馬県北群馬郡伊香保町の山中に「榛名山ベース」を設置した。このとき、京浜安保共闘は女性九人を含む計二十人だった。

十二月二十日、森恒夫が率いる赤軍派の九人が合流した。「連合赤軍」がここに誕生した。

その合体は、豊かな資金を持つ赤軍派と、武器や秘密基地を持つ京浜安保共闘の野合にほかならなかった。

革命戦士として戦うには、まず、全メンバーを共産主義化させることを党建設の中心として位置づけることであった。それは、人間の共産主義化であり、人間改造の手段として「総括」があり、銃器奪取闘争、殲滅戦争がある。敵を倒すことで日本革命戦争＝味方の飛躍―建軍という常に発展性を有した新たな地平が開かれる。

などというのは詭弁以外の何物でもなかった。

彼らは森恒夫を中央執行委員長、永田洋子を副委員長とする「人民裁判」を行い、十二月三十一日から翌七二年一月十七日にかけて、榛名山ベースで八人を殺害した。車で死体を運び、榛名山のふもとの倉渕村の山林に埋めた。

そうこうしているうち、「総括」を恐れた一人が逃走した。これによって彼らは再び移動を余儀なくされたが、バスを利用したためにすべてが白日のもとに晒されるきっかけとなった。運転手が群馬県警に通報したのである。

このとき群馬県警は、次のように情報を発信した。

――妊娠した女性を含むハイカーの一向が、榛名山中に入ったまま行方が分からなくなっている。お気づきの方は最寄の警察、消防などに通報願いたい。

この情報は報道機関に手渡され、東京でもニュースとして放送された。

この間、連合赤軍はアジトを沼田市上発知町の山林に移していた。ここに「迦葉山ベース」を設け、一月三十日から二月八日にかけて三人を殺害した。ニュースで流れた「妊娠中の女性」というのは嘘ではなかったが、彼女はここで殺害されている。

二月一日から警視庁は、指名手配中の森、永田、坂口ら十人の顔写真をテレビ・スポットで流し、市民の協力を呼びかけ始めた。当局が危惧したのは、危機的状況に追い込まれたと認識した京浜安保共闘と赤軍派が暴発することだった。

そのさなか、二月三日から森と永田は大胆にも東京に戻り、資金を調達していたことが、のちに明らかになった。次いで同月九日、坂口が都内に戻って森、永田と連絡を取った。その連絡とは、二月八日に男性一人、女性二人が逃亡した、というものだった。

二月十五日、森と永田は新たに設置された妙義山ベースに向う途中、同日の朝刊で榛名山ベースが群馬県警に発見されたことを知った。

十六日、山中に取り残された男女各一名が逮捕され、翌

十七日、午前六時から総員五百人を動員して実施された群馬県警による妙義山の山狩りで森と永田が遂に逮捕された。

十八日、警視庁は群馬県警四百七十人、栃木、茨城、長野、埼玉、新潟、神奈川の各県警から計一千三百人、警視庁から一千人を動員して幹線道路などを一斉検問を行った。同日、森と永田が逮捕されたというニュースをラジオで知った一党九人は、山越えして長野県軽井沢町のレイクニュータウン若草山に逃げ込んだ。

十九日朝、男女各二名、計四人が国鉄軽井沢駅で長野県警に逮捕された。四人は衣類や食糧などを購入するために山を下りてきたのだった。それを知った残りの五人は、定期便のトラックを運転手ごと奪って逃走し、無人の山荘「さつき山荘」に侵入して一息ついていた。

このとき、五人の機動隊が積雪に残る足跡を追って「さつき山荘」までやってきた。午後三時過ぎ、中の様子を見ようとした機動隊員に向って連合赤軍は銃やライフルなどを乱射した。これにより警官一人が顔や脚に全治三週間の外傷を負った。

連合赤軍の五人は「さつき山荘」から約五百メートル離れた河合楽器の保養所「あさま山荘」に侵入した。のちの検事調書によると、午後三時二十分ごろだったとされている。

三

あさま山荘には、たまたま管理人・牟田郁男の妻・泰子が居合わせ、人質になってしまった。このとき五人の中で若干の意見の相違があった。当時二十三歳だった元横浜国大生・吉野雅邦は、「車で強行突破して、どこかの山中に逃げ込もう」と主張した。

山荘の前に管理人の自家用車があった。

対して二十五歳の元東京水産大生・坂口弘と京大卒の坂東国男は、「無理だ」と言った。

彼らは玄関や一階非常口などを家具や布団、畳などで封鎖しバリケードを築き、三階の「いちょうの間」に立て籠もった。このとき、彼らが所持していたのは、ライフル銃一、拳銃一、二連発銃三、五連発銃一、爆弾数個、実弾約七百発だった。

県警本部は軽井沢署に「連合赤軍軽井沢事件警備本部」を設置し、三百八十八人で山荘を包囲した。警察庁でも、「連合赤軍あさま山荘警備本部」が設置され、警察庁長官・後藤田正晴の任命で警備局参事官・丸山昂、警備局付警務局監察官・佐々淳行らが長野県警に派遣された。このなかに公安第一課の警視だった亀井静香（のち衆院議員）

がいた。
警察による説得工作は二月二十日午前六時過ぎから始まった。
――山荘にいる諸君に告げる。君たちは完全に包囲されている。のがれることはできない。これ以上罪を重ねることはやめなさい。管理人の奥さんはまったく関係ない人だ。早く返しなさい。君たちの仲間はすでに逮捕された。君たちも抵抗をやめて出てきなさい。君たちの家族や友人もみんな心配している。無駄な抵抗はやめて出て来なさい。
これに連合赤軍は発砲で応じた。
二十一日、スナック喫茶経営者田中保彦が立ち入り禁止区域に侵入した。警察が軽犯罪法違反で逮捕すると田中は
「人質の身代わりになるために来た」
と言った。
この日、連合赤軍の五人は立て籠もったあさま山荘のテレビで、アメリカのニクソン大統領と中国の毛沢東主席がにこやかに握手する姿を見た。
二十二日には日野市からやって来た島田勝之という画家と信越放送の桂富夫記者が山荘に近づこうとしていたところを警察に取り押さえられた。その隙を突いて、田中保彦が北側斜面をよじ登り、山荘西側を廻って南側玄関に到達した。
吉野が
――帰れ。帰らないと撃つぞ。
と怒鳴ったが、男は知らん振りで、警察部隊の方に向かって手を振ったりウインクしたりした。坂口はこの男を警察だと思い、拳銃を発射した。
田中は倒れたものの、すぐ自力で起き上がって警察隊まで歩いてきた。救急車で軽井沢病院に運びレントゲン写真を撮ったところ、三八口径の弾が脳の中に留まっていた。佐久病院で弾の摘出手術を受けたが、三月一日に死亡した。
彼は覚醒剤の常習者で、過去に何度も警察の厄介になったことがのちに分かった。撃たれたときも、やや常軌を逸した言動があった。だが、さすがに警察当局はそのことを口にできなかった。
午後、「救援連絡センター・モップル社」と名乗る四人の男が軽井沢署を訪れ、申し入れ書を示して面談を求めた。夜になると今度は岡山県の右翼団体「士誉の会」がやってきた。山荘に飛び込み、日の丸を立てる、という。
彼らは警察の説得に応じて引きあげたあと、近くの宿に報道陣を集めて警察の対応をののしり、だけでなく連合赤軍を弁護する論を開陳した。このため報道陣はあきれて記事にしなかった。警察はこうした有象無象の輩にも対応しなければならなかった。

四

あさま山荘の様子は全国にテレビで中継され、野次馬が押し寄せた。警察はレイクニュータウン別荘地への道路を遮断したが、違法駐車は三千台を超えた。そうした物見高い人を目当てに屋台まで立ち並んだ。

説得工作とともに警察が取った作戦は、「擬音作戦」だった。催涙ガス弾の発射音、機動隊指揮官の号令、警備車のエンジン音などをテープに録音して拡声器で流す一方、屋根に向かって石を投げた。

犯人たちを眠らせないようにし、できるだけ弾薬を消耗させるねらいがあった。この作戦は大きな効果をあげた。

二十四日午後四時過ぎ、警察は

――君たちが抵抗をやめないので我々は武器を使用する。

とメガホンから流し、銃眼に向け高圧放水を開始した。その水は屋根や軒から流れ、たちまち氷柱になった。水の勢いで玄関ドアのガラスが割れ、そこを狙ってガス弾が撃ち込まれた。

二十六日は双方に目立った動きがなかった。

このとき警察は人質救出作戦を練っていた。同日午前十一時半、報道陣五十六社と警察の間で「Xデー報道協定」が結ばれた。

二十七日、携帯ラジオから警察の動きに関するニュースがなかったことから、犯人たちも何かが迫っていることを察知した。

二十八日が「Xデー」だった。

作戦は午前八時の警告広報で始まった。

――連日に渡る警告や説得にもかかわらず、君たちは何の罪もない泰子さんを監禁している。監禁時間は二百時間を超えた。もう、これ以上待つことはできない。これ以上罪を重ねることなく泰子さんを解放して銃を捨てて出てきなさい。また、話し合うなら、白布を持って警察部隊の見えるところに立ちなさい。

午前十時前、最後通告がスピーカーから流された。

――山荘の犯人に告げる。君たちに反省の機会を与えようとする我々の警告にもかかわらず、君たちは何ら反省を示さない。最後の決断の機を失って一生後悔することのないよう考えなさい。今こそ君らの将来を決するときだ。まもなく泰子さんを救出するため実力を行使する。

午前十時、一斉にガス弾が撃ち込まれ、山荘正面から高圧放水が開始された。山荘からは狂ったように銃弾が発射された。十一時ごろ、クレーン車の工事用モンケーン（大鉄球）があさま山荘のモルタル壁を破壊した。

第二機動隊の山野決死隊が三階南西側管理人室から山荘内に突入したのは午前十一時十七分だった。続いて第九機動隊の長田中隊が一階に突入し、これを占拠した。直後にクレーン車と放水車を指揮していた警視庁特科車輛隊の高見繁光警部が散弾銃で狙撃され、死亡。

第二機動隊の大津高幸巡査は山荘に突入しようとしたとき、顔面に散弾を被弾して、左眼を失明する重傷を負った。土塁端の大楯から様子を偵察していた第二機動隊長の内田尚孝警視はライフル銃で撃たれ死亡。

午後十二時三十八分、警察庁から拳銃使用の許可が出た。「適時適切な状況を判断し、適時適切に拳銃を使用せよ」というものだった。

午後一時、警察の攻撃が中断した。連合赤軍五人の投降を促すためだったが、午後二時五十分、三階調理室に鉄パイプ爆弾一発が投げ込まれた。このために機動隊から五人の重軽傷者が出た。

午後三時三十分を期して第二次攻撃が始まった。高圧放水の水は「いちょうの間」まで入り込んだ。続いてガス弾が一斉に射撃され、「いちょうの間」はガスが充満した。午後六時二十分ごろ、穴から楯をかざした機動隊員が一斉に飛び込んだ。連合赤軍五人が逮捕され、人質の牟田泰子が無事救出された。監禁二百十九時間ぶりのことだった。

～～～～　補　注　～～～～

田宮高麿　たみや・たかまろ／１９４３２～１９９５。岩手県に生まれ一九六二年大阪市立大学に入り日韓条約反対、アメリカ軍原子力潜水艦寄港反対阻止闘争などに参加、六八年塩見孝也らとともに武装蜂起論を唱える赤軍派を結成した。七〇年三月議長・塩見が逮捕され、拘留中の塩見から「ハイジャック中止」の指示を受けたが同月三十一日に決行した。当初はキューバに行く予定だったという。九五年北朝鮮平壌で心臓発作のため死去と伝えられる。

よど号ハイジャック事件　赤軍派にハイジャックされたとき機長が機転をきかせ「燃料を補給する」と言って、福岡空港に着陸した。ここで公安当局と押し問答の交渉があり、搭乗者のうち女性と子ども計二十三人が解放され、次いで着陸した韓国金甫空港で運輸省政務次官・山村新治郎が身代わりに人質となることを条件に乗客全員が解放された。このとき赤軍派の犯行声明にあった「われわれは明日のジョーである」という言葉について、治安当局は何かの暗号であろうと緊張した。金甫空港は平壌空港であるかの擬装が施され、ハイジャックした赤軍派もそれを信じてタラップを降りる寸前だった。ところが犯人グループの一人が窓の外にアメリカ空軍のジェット戦闘機やフォルクスワーゲンのマークを発見したために擬装が露見した。機長は中学校で使う地図帳を頼りに平壌まで飛んだという逸話がある。

▼山村新治郎　やまむら・しんじろう／１９３３～１９９２。千葉県選出の衆議院議員で、よど号ハイジャック事件のとき人質の身代わりとして北朝鮮に渡り、四月五日解放された。のち農林水産大臣、運輸大臣、衆議院予算委員長を歴任した。

森　恒夫　もり・つねお／１９４４～１９７３。大阪に生まれ六三年大阪市立大学に入った。赤軍派に入り六九年退学、赤軍派「東京戦争」では一隊員の立場にあったが議長・塩見孝也逮捕、よど号ハイジャックによる幹部の北朝鮮脱出などで浮上した。七一年浅間山荘事件前に逮捕され七三年元旦東京拘置所で自殺。遺稿集『銃撃戦と粛清』（八四年）がある。

現金強奪事件

2月27日　茂原市高帥郵便局：９万４９００円
3月4日　船橋市夏目郵便局：１万５３５０円
5日　相模原市横浜銀行相模台支店：１５０万９千円
22日　泉市振興相互銀行黒松支店：１１５万９２００円
5月15日　横浜市吉田小学校：職員給与３２１万６５３９円
6月24日　横浜市横浜銀行妙蓮寺支店：３２６万円
7月22日　米子市松江相互銀行米子支店：６０５万１６００円

後藤田正晴　ごとうだ・まさはる／１９１４～２００５。徳島県に生まれ一九三九年東京帝国大学法学部を出て内務省に入った。第二次大戦後自治省を経て六九年警察庁長官、七二年内閣官房副長官ののち七六年衆議院議員となった。自治大臣、行政管理庁長官、総務庁長官、内閣官房長官、法務大臣、副総理を歴任した。〝カミソリ後藤田〟の異名を持つ。

佐々淳行　さっさ・あつゆき／１９３０～２０１８。東京に生まれ五四年東大法学部を出て国家地方警察本部（現・警察庁）に入った。警察大学校（助教授）、大分県警、埼玉県警、大阪府警、警察庁等に赴任し、あさま山荘事件のとき警視庁機動隊の指揮を担

当した。

亀井静香　かめい・しずか／１９３６～　：広島県に生まれ一九六〇年東京大学経済学部を出て別府化学工業（現・住友精化）に入った。六二年警察庁に入り、鳥取県警察本部警務部長、埼玉県警察本部捜査二課長などを歴任した。七一年警察庁警備局極左事件初代統括責任者となり、成田空港事件、連合赤軍あさま山荘事件、日本赤軍テルアビブ空港事件等を指揮した。七七年警察庁警備局理事官、長官官房調査官を経て退官し七九年衆院議員。九四年村山内閣で運輸相、九六年橋本内閣で建設相、九八年亀井派を結成し、二〇〇三年自民党総裁選に立候補したが小泉純一郎に敗れた。

カップ・ヌードル　日清食品の創業者・安藤百福が「チキンラーメン」をスーパーの仕入れ担当者に試食してもらったとき、それを砕いて紙コップに入れお湯を注いでからフォークで食べた。それを見て、カップ入りのインスタントラーメンならお湯さえあればどこででも食べることができるというアイデアがひらめいた。容器は保温性がよく軽くて丈夫な発泡スチロール、フリーズドライの具を入れた「カップヌードル」が発売されたのは七一年五月だった。

183 大地の牙

第百八十三

大地の牙

一

あさま山荘事件では警官二名と民間人一名が死亡、重軽傷者は二十七名に及んだ。事件解決のためにかかった費用は国費約二千六百七十五万円、県費約六千九百八十四万円だった。

〝Ｘデー〟（二月二十八日）にテレビ各社は夕方まで現場から中継を流し続けた。ＮＨＫは午前九時四十分から午後八時二十分まで、延べ十時間三十四分、民放各社も軒並み九時間前後という、放送史上かつてない中継となった。ＮＨＫの最高視聴率は八九・七％、平均視聴率は六五％だったと記録されている。

このとき厳しい寒さの中で警備に当る警察官たちに、温かい軽食として日清食品の「カップ・ヌードル」が配られた。これがテレビの映像となって全国に流され、この新しいインスタント食品は一躍、社会的な認知を得た。

連合赤軍の壊滅は、当初、一部から同情的に受け取られた。ところが三月七日にいたって奥沢修一（二月十六日、妙義山中で逮捕）が容易ならぬことを口にした。同志十二人をリンチの上、殺害したことを自供したのである。

最後に殺害された山田孝の遺体が掘り起こされ、三月十三日までに全員の遺体を発見した。帝国主義反対を唱え、まがいなりにも世界平和を追求したはずの新左翼が生んだ無残な結末だった。

首謀者の一人である森恒夫は、初公判を控えた七三年一月一日、東京拘置所で首を吊って自殺した。享年二十九。

森と行動をともにした永田洋子、山荘銃撃戦の中心人物だった坂口弘はともに八二年六月十八日、死刑の判決を受けた。東京高裁に控訴したが八六年九月に棄却され、さらに最高裁に控訴したがこれも九三年二月に棄却され刑が確定した。

銃撃戦で警官を狙撃し死に至らしめた吉野雅邦は、八三年二月二日、東京高裁が検察の控訴を棄却し、無期懲役の刑が確定した。

坂東国男は東京拘置所に拘置されていた七五年八月四日、日本赤軍がクアラルンプールのアメリカ大使館占領事件のとき、超法規的措置によって海外に逃亡した。同じく日本赤軍が釈放を要求した坂口弘は自らの意思でこれを拒否し、死刑の判決を受ける道を選んだ。

「よど号」ハイジャック事件や三島由紀夫の割腹自殺があった一九七〇年は、情報処理振興事業協会（ＩＰＡ）、センター協、ソフト協が発足した年なのだが、両者の間はかけ離れていて、同時性を伴っていないように見える。それはなぜかと考えると、つまり両者は、実際の市民の生活からほど遠いところにあって、かつ両者の距離が遠すぎたためではなかったか。

「世界同時革命の武装蜂起」とか「自衛隊によるクーデター」とかのアジテートは非現実的、妄想的な性質を帯びていた。まして「切腹」という自己の表現形式というのは、シュールレアリスム的だった。

一方、コンピュータの輸入と資本の自由化はおろか、情報処理進行事業協会や情報サービス産業団体の結成などは、筆者にとってはその中心人物が知己であるために身近かではあるけれど、社会全体から見れば、やはり現実感のないことであったろう。

それにしても、虎ノ門界隈で情報サービス産業の高度化をめぐる方策が議論されていた眼と鼻の先で、新左翼と機動隊が衝突していたというのは、何とも浮世離れした風景だった。

七〇―七一年ごろ、この二つの〈〝惑星〟は大地から遠いところにあって、その距離は遠く隔たっていた。だが七四年に入って、「東アジア反日武装戦線」を名乗る超過激派の暴発によって、情報産業界はその脅威に晒されることになった。

それはあまりにも予想外の出来事だった。

三菱重工爆破事件である。

二

事件が起こったのは七四年八月三十日の昼過ぎだった。突如鳴り響いた轟音と地響きとともに、昼休みのひと時、東京・丸の内のオフィス街を歩いていたサラリーマンにガラスの破片が降り注いだ。ビルの中にいた社員はさらにひどかった。

死者八人、重軽傷者三百七十人を出す悲惨な爆弾テロ事件となった。三菱重工ビルの前に、時限装置付きダイナマイト五百キログラムが仕掛けられていたのだ。

「東アジア反日武装戦線〔狼〕」と名乗るグループは言った。

一九七四年八月三〇日、三菱爆破＝ダイヤモンド作戦を決行したのは、東アジア反日武装戦線〝狼〟である。三菱は、旧植民地主義時代から現在に至るまで、一貫して日帝

中枢として機能し、商売の仮面の陰で死肉をくらう日帝の大黒柱である。今回のダイヤモンド作戦は、三菱をボスとする日帝の侵略企業・植民者に対する攻撃である。〝狼〟の爆弾に依り、爆死し、あるいは負傷した人間は、「同じ労働者」でも「無関係の一般市民」でもない。彼らは、日帝中枢に寄生し、植民地主義に参画し、植民地人民の血で肥え太る植民者である。

十月十四日に三井物産本社ビルが、十一月二十五日に帝人の中央研究所が、十二月十日には大成建設と大倉組の本社ビルが爆破された。これらについて、「東アジア反日武装戦線〔大地の牙〕」と名乗るグループが犯行声明を発表した。

次いで十二月二十三日、鹿島建設のＰＨ工場が爆破され、「東アジア反日武装戦線・パルチザン義勇軍〔さそり〕」と名乗るグループが名乗り出た。これで東アジア反日武装戦線を名乗るテログループは〔狼〕〔大地の牙〕〔さそり〕の三つになった。

警察当局の捜査が進む中で、東アジア反日武装戦線が企業のコンピュータ・システムの破壊を目論んでいることが明らかになった。次のような内容の文書が発見されたのだ。

〝大地の牙〟は、〝狼〟が切り拓いた戦闘地平と技術的成果を主体化することによって、〝狼〟がたどった前史的過程をたどることなく、緒戦において三井物産の中枢に迫り、三井物産の頭脳たる電算機室を爆破せんとした。作戦は成功したが、残念ながら電算機室を破壊するまでには至らなかった。

警察当局ばかりでなく、情報産業界に緊張が走った。大手企業のコンピュータ・ルームに、多くの情報サービス会社が要員を派遣していたためだった。パンチャー、オペレーター、プログラマーを派遣していた企業は〝万一〟のことを考えると背筋が凍った。

翌七五年二月二十八日、その事件が起こった。

東京・神宮前の間組本社ビルが爆破されたのだ。

東アジア反日武装戦線は次のような犯行声明を出した。

わが部隊はキソダニ・テメンゴール作戦の一端を担い、間組本部（六階）に対し爆破攻撃を行なった。二月二八日東アジア反日武装戦線〝さそり〟は、間組本社等に対する調査を行ない、最終的には、本社六階海外事業本部を〝さそり〟、九階電算機コンピューター室を〝狼〟、大宮工場を〝大地の牙〟が、同時爆破することを決定した。決行日は、

二月二八日とし、爆破時間は午後八時とした。われわれは、木曽谷の中国人捕虜戦士たちの反日武装蜂起の革命的精神を復権・継承し、テメンゴールにおけるマラヤ共産党武装勢力の間組攻撃に呼応する意味から、間組爆破攻撃をキソダニ・テメンゴール作戦と名づけた。

二月二八日夕刻、三部隊は、計画どおりに出撃し、テキの事前弾圧的警戒網を巧みにぬってそれぞれ攻撃目標に接近し、爆破攻撃を貫徹した。爆弾はそれぞれ完爆し、東京港区青山の間組本社ビルは、もうもうたる黒煙に包まれた。九階は爆発と同時に火災が起こり、コンピューターは破壊され、データは燃焼した。六階の壁やドアは吹き飛び、天井は落ち、鉄骨はアメのように曲り、スチールの机などはあとかたもなく粉砕された。われわれは、この爆破攻撃の成功を、警察無線の傍受によって確認した。

警察・公安当局の捜査で、犯行グループの主犯である大道寺将司、佐々木則夫、浴田洋子、大道寺あや子らを全国に指名手配し、翌七五年五月、大道寺ら八人の逮捕に成功した。

だがその後、日本赤軍は海外で起こしたハイジャック事件で、爆破事件の首謀者の解放を要求した。テロ犯罪者を解き放つというのは、国際的な治安維持に反することになる。

日本政府は苦慮の末、まず佐々木則夫を、七五年には大道寺あや子を超法規的措置で海外に逃亡せしめた。連合赤軍の坂東国男と同様、二人は日本赤軍に合流しテロ活動に従事したとされる。

三

筆者はここで、ようやく情報システムの話に戻ることができる。読者においても一息つけるに違いない。

三菱重工本社ビルに始まる一連の爆弾テロ事件がターゲットにしたのは「電算室」だった。東アジア反日武装戦線は正鵠を突いていた。一九五〇年代にＰＣＳ（パンチカード・システム）によって始まった事務処理の機械化は、二十年を経てその名を「コンピュータ・システム」ないし「情報システム」と変え、企業の中枢を握るまでになっていた。

そのことを先行して強く認識していたのは都市銀行だったが、この事件は重電、建設、製造、流通、サービスといったあらゆる産業分野に共通することが理解された。

まず動いたのは通産省の情報処理振興課だった。

東アジア反日武装戦線の面々が爆弾を容易に仕掛けるこ

とができたのは、ビルに入退館する人や物がまったくチェックされなかったことに原因があった。電算室への人の出入りも同様にほとんど管理されていなかった。

というのは当時、コンピュータは大掛かりな冷房装置や電源装置が必要だったために、特別な部屋が用意され、かつシステムの運用にかかわる人々は特別な扱いを受けていた。そもそもコンピュータ・ルームに出入りする人が限られていたこともあって、管理という考え方が浸透していなかった。

とはいえ、連続帳票用紙の納入業者、コンピュータ・メーカーの営業マンやエンジニア、ソフトウェア会社のプログラマーやオペレーター、パンチャーが自由に出入りできる状況を放置しておくのはいかがなものか。

身分を疑うわけではないけれども、安全を確保するにはチェックすることが必要であろう。そういった体制を整えることは、計算処理業務を受託する情報サービス会社の信用度を高めるに違いない。

そこで「入退室管理」がテーマになった。

筆者の記憶では、計算センターへの出入りがにわかに厳しくなった。ビルに入るとき、それまで素通りできたのだが、必ず受付けや守衛室を通じて担当者を確認し、カウンターに置かれている入退館記録に所属、氏名、入館時刻を記録することが求められた。

だけでなく、コンピュータ・ルームには磁気カード式のロック解除装置が取り付けられ、例えば深夜や早朝に出向かなければならないときなどは往生したものだった。

元警察官、元自衛官といういかつい体格の中高齢者が警備会社から派遣され、どんなに顔見知りであっても、決まり通りにやらないと通してくれない。

入館証を忘れたときなどは、ビルに入るまでに精力を使い果たすことも少なくなかった。

警備マンたちはそれが仕事なのだし、

――顔見知りだから。

でチェックを甘くするわけには行かなかった。

にしても、

――やりにくいことになった。

というのが実感だった。

以後、通産省の情報処理振興課は日本情報センター協会やＥＤＰユーザー協会などと協議を進め、七六年度に「電子計算機システム安全対策基準」というものを策定し、翌七七年四月から施行した。

それまでコンピュータ・システムの安全対策は地震や火災、水害といった自然災害が対象で、耐震装置・耐震器具、ハロンガスによる瞬間消火設備、防水装置を指すと考えら

れていたが、この指針では「運用管理」が重視されていた。

安全対策基準策定から五年のちの八一年七月、情報処理振興課は情報処理サービス業を対象とする「情報処理サービス業安全対策実施事業所認定制度」をスタートさせることになる。

同制度に基づく審査・認定機関は財団法人・機械電子検査検定協会（機電検）が指定され、同協会の審査をクリアした事業所に対して通産大臣所管の認定委員会が認定証を発行するという制度である。全国の主要な計算センターはこぞって認定取得に乗り出していく。

ちなみにそれ以後のことを記すと、同制度は八〇年代に入って本格化したＶＡＮサービスに対応する必要から、八四年七月に大幅に改定された。従来の設備基準、運用基準に加え、技術基準が加えられるとともに、それぞれについて「基本基準」「標準基準」「強化基準」の三段階が設定された。このとき新設された技術基準は次のような内容だった。

信頼性向上機能

一、電子計算機システムの重要な構成機器は、障害時に代替可能な機能を設けること。

二、電子計算機システムの負荷状態の監視制御機能を設けること。

三、電子計算機システムの障害個所を検出及び切り分ける機能を設けること。

四、障害時における縮退・再構成機能を設けること。

五、チェックポイント・リスタート機能を設けること。

六、重要なファイルには次の機能を設けること。

①障害時の代替機能。

②バックアップ・リカバリー機能。

③ダイレクト更新におけるジャーナル機能。

七、複数の電子計算機システムを接続したシステムの場合には、次の機能を設けること。

①電子計算機相互の障害の検地機能。

②障害時の電子計算機相互の代替機能。

データ保護・不正防止機能

一、ユーザー確認のためのパスワード、識別コード等資格確認機能を設けること。

二、各種資源へのアクセス制御機能を設けること。

三、重要なファイル及び伝送情報には暗号化機能を設けること。

四、次のモニタリング機能を設けること。

①アクセスモニタリング機能。

②コンソールログ機能。

③システム使用状況記録機能。
④アプリケーションプログラムに組み込むモニタリング機能。
五、通信の相手確認機能を設けること。
六、複数の電子計算機システムを接続したシステムで、かつ専用の電子計算機室に設置していない電子計算機システムには、プログラム及びデータの不正変更を防止する機能を設けること。

四

安全対策基準が策定されたことに伴って、磁気カード式施錠システムや監視カメラ・システム、磁気テープ保管庫などが売れ、安全対策コンサルタント会社が登場した。

情報処理機器の輸入販売会社が次々に海外から製品を持ち込み、計算センターや企業の電算部門に売り込んだ。それはそれで情報産業界に新しい市場を作り出す効果があった。

ところが東アジア反日武装戦線の爆弾事件は、別の意味で情報システムに変革をもたらしていた。それはこの事件があったから新しい技術が生まれたというのでは決してなく、技術や製品はすでにして存在していたのだった。要するにトリガーになった。

一つは紙テープや紙カードによるバッチ型の入力システムが、キーボードによるダイレクト入力に転換したことだった。もう一つはデータを記録する方式として磁気ディスクが脚光を浴びるきっかけとなった。ひいてはこれが国内におけるコンピュータ・メーカーのシェアにも影響を与えるのだが、それはのちの話である。

入力方式のことから書く。

紙テープやパンチカードは紙でできている。いうまでもなく、火をつければ簡単に燃える。第二次大戦のとき、世界有数――少なくとも東洋一――の規模を誇った国鉄のＰＣＳ部門は、アメリカ空軍機が落とした爆弾と焼夷弾で三十五万枚以上のパンチ済みカードを焼失し、事実上壊滅した。

このことは、誰でも分かっていた。

ところが、水に濡れたときのことを想定していなかった。手製爆弾が爆発したことによって、火災が発生した。

コンピュータ用のパンチカードや連続帳票の類は一般のオフィスから隔離された倉庫に入っていたので、炎が及ぶ危険性は少なかった。ただし、火災を鎮めるために消防隊が噴出した水が、配管や壁の隙間を伝って倉庫に流れ込んだ。すべてが使いものにならなくなった。

個々の伝票のデータが失われても打ち直せばいいのだが、プログラムやサマリー・データ、顧客データなどは復元するのが容易でなかった。

この時代、プログラムを磁気テープに記録して繰り返し利用するという発想を持っていたのは、筆者の知る限り、日本コンピュータ・ダイナミクスの下條武男しかいなかった。つまり爆破事件に巻き込まれた企業のほとんどが、営々と築いてきたプログラムを、「たかが水」のせいで失ったのだ。

紙のテープやカードを使い続ける限り、火災や水への対策を講じなければならない。かつ、その保存のために大きな倉庫を用意しなければならなかった。

――大量の伝票データをパンチするのは業者に外注する。しかしプログラムはオンライン端末のキーボードからダイレクトに入力できないか。

多くの企業が同じことを考えた。オンライン用の端末とセンター・マシンの間で双方向の処理ができないか。あるいは外注した伝票のデータを磁気テープで受け取れないか。この要求はＩＢＭ社が一九七四年に発表した「ＩＢＭシステム／３７０」と、キー・ツー・テープ装置が解決した。紙の時代がにわかに終焉に近づいた。

もう一つの磁気ディスクというのは、次のようである。

当時、データの集積をコンピュータ・システムの中に「データ・ファイル」として保存しておくという発想を持っていたのは、下條武男を除けば富士通の中村洋四郎か日本電気の水野幸雄など、ごく限られた人だった。

大量のデータは磁気テープに記録され、コンピュータ・ルームに保管されるのが一般的だった。

それが失われた。

「いや、あれほど急激な変化があったのは前にもあとにもなかったですよ」

と　語るのは当時、アメリカ製のソフトウェア・パッケージを販売していたデータ・エレクトロニクス（ＤＥＫ）の技術担当として入社したばかりの佐藤隆である。のちコンピュータアソシエイツ社日本法人（日本コンピュータ・アソシエーツ）の取締役技術統括本部長となった。

「大手ユーザーが一斉に磁気ディスク装置を導入し始めたんです。磁気テープのデータを磁気ディスクにファイルとして格納しておけば、変更が楽にできるし、第一、安全だ、というわけでした。ところがそのデータ・ファイルを管理するソフトウェアがなかった」

なかったのではなく、ＩＢＭ社が提供していたソフトウェアがユーザーの要求にフィットしなかった。ＤＥＫは、アメリカのアプライド・データ・リサーチ（ＡＤＲ）社が

開発した「ザ・ライブラリアン」というパッケージを七三年から販売していた。名前の通り、データやプログラムのライブラリーを管理するソフトウェアである。

「タイミングがドンピシャだった。入社して間もないのに、大手企業のコンピュータ部門に呼ばれましてね。どうすりゃいいんだ、相談に乗ってくれ、というわけです」

佐藤がただの営業部員だったら、パッケージを売ることで終わっていた。しかしこの人物は大学で電子工学を専攻し、コンピュータの仕組みやＯＳ、プログラムというものに知識があった。システム・エンジニアの能力を備えた営業マンだった。

「ともかくザ・ライブラリアンがどんどん売れました。日本の企業は、どこそこが使っている、と聞いただけで採用する傾向がありました。それだけでなく、データの保管について、いっぱしのコンサルティングをやりました。やらざるを得なかった、ともいえるんです」

日本銀行、三菱銀行、三井銀行といった都市銀行、野村證券、九州電力、小野田セメントなど、一九七〇年代をリードしたコンピュータ先進ユーザーが採用を決め、ザ・ライブラリアンは発売から五年で国内に計百六十ユーザーを持つようになる。

～～～～　補　注　～～～～

テメンゴール　Temenggor：マレーシアのペラ州にある水力発電ダムの名前。一九七四年八月。マラヤ共産党武装勢力は、「人民の利益に反する」として、ダム建設現場へ向かう間組の資材搬入トラックをダイナマイトで爆破した。同年十二月九日にほ、テメソゴール・ダム建設の間組宿舎を襲撃して日本人一名が死亡した。東アジア反日武装戦線はその動きを受けて間組とプロジェクトを仲介した三菱商事をねらった。

ハロンガス　ハロゲン元素（フッ素、塩素、臭素など）を含有するガスで第二次大戦中、連合国軍が戦車や戦艦、潜水艦など密閉状況で火災が発生したとき、人体に重大なダメージを与えず瞬間的に消火する消火剤として利用した。第二次大戦後はコンピュータ・ルームの消火設備として標準的に採用されたが、成層圏に達したとき分解して放出する臭素原子がオゾン層を破壊することが判明し九四年までに全廃とされ、特殊なケースを除いてほとんど使われなくなっている。

機械電子検査検定協会　一九五七年に輸出用機械製品の品質検査機関として発足した財団法人・日本機械金属検査協会（ＪＭＩ）を母体に、七二年計量法による指定検定を行う財団法人・機械電子検査検定協会となった。八一年工業標準化法（ＪＩＳ）に基づく認定検査機関、情報処理サービス業電子計算機システム安全対策実施事業所認定制度による指定検査機関の指定を受け、九三年（平成五）国際的な総合品質保証機関「財団法人日本品質保証機構」に改組・改称した。のちに国際標準化機構が定めた品質保証規格の認定登録機関となった。

キー・ツー・テープ装置　大量データ入力用に開発された装置で、従来のキーパンチの技法を継承しつつ装置内部にコード変換機構を組み込み、キー・インと同時に発生したコードを磁気テープに記録した。初期は音楽用カセットテープを使うスタンドアロン型だったが、八〇年代に入って大型磁気テープ装置とスター型のネットワークで結ぶ分散処理方式に発展した。さらにのち磁気テープ装置が磁気ディスク装置に代わって「キー・ツー・ディスク」となり、八〇年代末から九〇年代にかけてＵＮＩＸワークステーションやパソコンを使ったエントリー・システムが誕生した。

データ・エレクトロニクス　日本ＩＢＭの初代社長チャールズ・デッカーが電気・電子部品の輸入会社として東京に設立した「日本事務用品」の子会社「ＪＯＳインターナショナル」のソフトウェア販売部門が独立して設立された。社長は松原次郎、営業統括は清水徹作、営業部員は佐藤隆といった陣容だった。新聞や雑誌では「ＤＥＫ」と略された。

184 アラブの反撃

第百八十四

アラブの反撃

一

タイトルから、おおよその読者は

――オイルショックのことだな。

と推察するに違いない。

実にその通りであって、一ドル＝三百六十円の固定為替制度が崩壊したドルショック、アメリカが頭越しに中国共産党政府と握手したニクソンショックに続いて、日本の経済は曲がり角に立たされた。

遠因はすべてベトナム戦争だった。

ベトナム戦争の発端ないしその遠因を探れば、第二次大戦直後にアメリカの国務長官だったジョン・フォスター・ダレスの「ドミノ理論」にさかのぼる。

すなわちダレスは、第二次大戦後の世界は自由主義陣営と共産主義陣営が東西に覇を競うようになると予測した。朝鮮半島の戦争に続いてインドシナの〝火薬庫〟にアメリカの手が伸びたのは、ここが共産化すれば周辺諸国も同じように自由主義経済から離脱していく、と考えたからにほかならない。

五四年四月、スイスのジュネーブでインドシナ和平協定が結ばれ、北緯一七度をもって北と南に二つの政府が存在することになるのだが、並行してアメリカは、イギリス、フランス、オーストラリア、ニュージランド、フィリピン、タイ、パキスタンの八か国で成る「東南アジア条約機構（ＳＥＡＴＯ）」を結成して、共産主義の封じ込めを図った。

以下、年表風に記す。

59年5月　ベトナム労働党（ハノイ政権）、南部の武力解放支援を決定

60年4月　アメリカ政府、南ベトナムに六百八十五人の軍事援助顧問団を派遣

11月　ラオスの協力でホーチミンルート完成。

12月　南ベトナム解放民族戦線結成

62年7月　ラオスに関するジュネーブ協定調印。

12月　南ベトナムでの米軍事要員が一万一千人に。

64年8月　トンキン湾事件

65年2月　アメリカ軍、北爆を開始

3月　米海兵隊三千五百人がダナンに上陸

7月　米ジョンソン大統領、五万人の増派を発表

ベトナム戦争は以上のような経過で拡大していった。

一九六〇年時点のアメリカ大統領はジョン・F・ケネディであって、現今において彼のイメージが「最も平和を追求した大統領」であるかにされるのは、錯覚ないし虚像であるということができる。

ただし六五年三月に海兵隊が上陸して陸上戦に参加したことが、アメリカを抜き差しできない事態に引きずり込んだとすれば、その責はジョンソンにある。

ともあれ、その戦争にアメリカは精力を使い過ぎた。世界の七割まで保有した金が流出し、経済力が相対的に低減し、ドルの威信が下がった。ニクソンが七一年八月に発表したドル防衛策および、中国共産主義政府の承認は、ベトナム戦争の早期終結に向けた施策だったが、第四次中東戦争（「十月戦争」）の引き金となった、ともいわれている。

二

第四次中東戦争が始まったのは一九七三年十月六日だった。より正確にいえば、同日午後二時ちょうど、エジプト共和国軍がイスラエル支配下のスエズ運河東岸を、シリア軍がゴラン高原に砲撃を開始した。

砲撃のあと四千人の突撃兵が突撃舟艇で運河を渡った。後続の歩兵部隊三万二千、戦車約一千輌はたちまちイスラエル軍の拠点十七か所を落とし、さらに工兵隊が橋を設置する作業に取り掛かった。

エジプト軍はさらに同日夜、イスラエル軍の戦線を飛び越え、ヘリコプターで一千七百人以上の突撃兵を送り込んだ。

イスラエル軍の第二五二機甲師団は直ちに反撃したが、エジプト軍が繰り出すサガー対戦車ミサイルやRPG対戦車ロケット砲で保有戦車の三分の二を失い、戦いを継続することができなくなった。空軍も果敢に反撃したが、翌七日夕刻までに戦闘爆撃機約四十機が撃ち落され、ほぼ無力化してしまった。

ゴラン高原を攻撃したシリア軍は、戦車七百七十輌、装甲車輌六百五十台の二個師団で構成され、イスラエル軍司令部の急所とされたナフィク、西のヨルダン川にかかるブノット・ヤコブ橋を目標に進撃した。ここではイスラエル軍の戦車「センチュリオン」が優位に立った。

しかし、シリア軍は同日夕刻に南部のラフィドを占領し、七日にはナフィクに到達した。このときシリア軍は戦車六百五十車輌で構成するアサド戦車旅団を投入し、一気呵成

にヨルダン川に向けて進撃した。ところがこの時点でシリア大統領のハフェズ＝アル＝アサドは、軍に対して

――現在地で防御線を展開せよ。

という命令を下した。

これがイスラエルに反撃のチャンスを与えた。

イスラエル軍はエジプト軍に向けて二個の機構師団を投入して体勢を立て直す一方、ゴラン高原でシリア軍の戦車二百六十輌を撃破して気勢を上げた。ここで勢いを得たイスラエルは、シリアの首都ダマスカスに攻撃を仕掛ける作戦を取った。

開戦六日目の十月十一日、イスラエル軍第三六機甲師団は戦車三百輌をもってダマスカスへ進撃しようとしたが、さすがにこの作戦には無理があった。塹壕と要塞を何重にも重ねたシリアの防衛線は強固で、イスラエル軍の先鋒は思うように伸びなかった。

十二日、アラブ陣営三番目の参戦国イラクの戦車師団が戦線に到着した。ところがこの師団はイスラエルの猛反撃にあってたちまち敗走し、翌十三日に戦闘を停止してしまった。イラクは、アラブの義理で出兵したに過ぎなかった。

戦況の焦点はエジプト軍に移った。

エジプト軍は一千輌の戦車を投入し、スエズを越えてシナイ半島の奥深くにまで兵を進めていた。このときエジプト政府は、シリア、イラク両政府がこの戦争の継続に意欲を失いつつあることに気がついていた。このため、エジプト政府は両国に働きかけを行ったが、アメリカの介入を回避すべきだという意見を無視できなかった。

十五日にいたってイスラエルは、シャロン将軍が率いる第一四三機甲師団をシナイ戦線に転進させてエジプト軍の足を止めることに成功した。かつ十八日から二十日にかけて別働の戦車部隊をスエズ運河南方――突出して進撃したエジプト軍の背後――に迂回させた。

これが停戦のきっかけとなった。

戦闘は十月二十三日に止み、二十四日にイスラエルとアラブ三か国の間で暫定的な停戦協定が結ばれた。この戦争による損失は、イスラエルが戦死三千人、喪失戦車八百四十輌だったのに対し、アラブ三か国は戦死九千人、喪失戦車二千五百輌だった。数字の上ではアラブ側の損失が三倍だが、

――イスラエルは不敗。

という先入観を払拭することができたという意味で、アラブ諸国には勝利感が強かった。イスラエルもそのことを強く認識した。今後はアラブ諸国と折り合いをつけながら行かなければならないであろう

戦争は暫定停戦協定ののち、十二月二十一日にスイスの

ジュネーブで開かれた中東和平会議、翌七四年一月十八日のエジプトーイスラエル兵力引離し協定で集結した。だがもう一つの戦いが始まっていた。アラブ諸国は石油という武器で西側諸国と戦うことを決意したのだった。

繰り返しになるが、アラブ諸国はドルショックによって、唯一の輸出産品である原油が西側諸国、なかんずくアメリカに支配されていることを実感した。油井の開発、パイプライン、精製工場、積み出し港などすべてが西側諸国の資本に握られ、自営権がまったくないことに彼らは気がついた。これが民族主義を覚醒させる要因となった。

ドル防衛策が発表された次の年の十月、産油国で組織する石油輸出国機構（ＯＰＥＣ）は自国内にある石油関連企業の株式の五一％以上を輸出国が保有する目標を立てた。第四次中東戦争が勃発した直後の七三年十月十七日には、生産量を削減して、親イスラエル国への石油の輸出を禁止すると宣言した。

最初の禁輸国はアメリカとオランダだった。アラブの石油輸出国で組織するアラブ石油輸出国機構（ＯＡＰＥＣ）もこれに同調した。

このため、供給過剰気味だった石油の原価が一気に高騰した。はじめ一バレル（約百五十九リットル）三ドルだった原油価格は、たちまち四倍の十二ドルに跳ね上がった。ばかりでなく、輸入できなくなるかもしれなくなった。ＯＰＥＣ諸国（イラン、イラク、クウェート、サウジアラビア、ベネズエラ、カタール、インドネシア、リビア、アラブ首長国連邦、アルジェリア、ナイジェリア）は、自分たちが保有する原油が世界経済に与える影響力を過小評価していたが、禁輸措置と産油量調整による価格操作に西側諸国が予想以上に慌てふためいた姿を見て、自信を強めていった。

例えばフランスでは、ガソリンスタンドが開店休業の状態になり、物流が滞った。トラックが動かず、航空機や船舶の欠航が相次いだため、倉庫に商品があふれているのに消費者に行き渡らなくなったのだ。メーカーは生産調整に入らざるを得なくなった。特に石油に依存する化学メーカーの打撃は大きかった。

その影響は経済活動全体に及んでいった。ヨーロッパでは国境を越えて生産と供給が行われていたから、フランスの経済麻痺はオランダやドイツに飛び火した。製造業で操業の短縮と人員の整理が始まり、労働者の抗議運動が始まった。

石油不足は電力の供給にも影響を与えた。加えて冬が近づいていた。中東の人々にはその実感がなかったが、北半球の北緯三十五度以上に住む人々には深刻な問題だった。

そのエリアに、「先進工業国」の大半が属していた。

三

当時、日本はエネルギー資源の主力が石炭から石油に転換したばかりだった。統計によると、七三年に日本が輸入した原油は二億九千万キロリットル（十八億二千万バレル）だった。

この年をピークに日本の原油輸入量は減少し、こんにちにいたっても三億キロリットルを上回ったことはない。その後の経済発展を考えると、驚くべきことといわざるを得ないのだが、その話は別に譲る。

石油の海外依存度は九九％であって、そのうち中東産油国が占める割合は七七％に達していた。それまでは、金さえ出せば買うことが出来たが、ＯＰＥＣは親イスラエル国には輸出しないし、友好国以外の国には供給量を削減するという声明を出したのだから、田中内閣は動顛した。

十二月十日、政府は副総理・三木武夫を代表とする特使を中東八か国に派遣し、その甲斐あってＯＰＥＣは二十二日、

――日本は友好国。

と認定した。

だが世情はパニックに陥っていた。

モノ不足が起こるという危機感があらぬ風評を呼び、トイレットペーパー騒動が起こり、続いて洗剤、砂糖、醤油などを買い求める消費者がスーパーに殺到した。全国最大の生活協同組合として知られる「コープこうべ」（当時「灘神戸生協」）は当時の様子を次のように記している。

ある日突然、スーパーの店頭からトイレットペーパーが消えた。これに端を発し、砂糖、しょうゆ、洗剤なども相次いで姿を消す。昭和四十八年秋の「オイルショック」は、日本全土に危機的なモノ不足を引き起こした。

（中略）

原料不足や資材の高騰、操業時間の規制などにより物価は急騰し、インフレが発生する。

しかし、実質的な石油危機以上に深刻だったのは、消費者のパニック心理であった。実際、ひどい便乗値上げも各地で増えており、「いま買っておかなければ、買えなくなる。モノがなくなる」という風説が口コミで広がっていた。

不安はさらに不安を呼ぶ。

どこのスーパーでも、開店と同時に買い物客が殺到。トイレットペーパーの棚は、あっという間に空っぽになっていた。続いて、砂糖、しょうゆ、洗剤など生活必需品すべ

てに買いだめが及ぶ。このため、商店では仕入れが追いつかず、「お一人様一個限り」などと規制を始めた。

だがこの規制が消費者の不安をさらにあおる……。いつの間にか、際限のない買いだめのイタチごっこが全国で起こっていた。

同じことがアメリカでもあった。人気テレビ司会者ジョニー・カーソンが七三年十二月十九日の自分の番組で、

「みなさん、最新のニュースをご存じ？　冗談ぬきで、新聞に書いてあったんだけど、トイレットペーパー不足が起きてるんだって」

とジョークを飛ばした。

日本の騒動をネタにしたのである。ところがそれを真に受けた視聴者がスーパーに走り、それを見聞きした消費者が売り場に殺到する事態となった。

このことは別の観点から、非常に興味深い例証となった。どのようなプロセスで風評が発生し、それが都市の群衆心理をどう動かすか――。

つまりケインズ、サミュウェルソンによって提唱された現代経済における「経済主体の極大行動原理」の実証例であり、またテレビや新聞が果たす経済効果の測定例であり、かつ新しいマーケティング手法の具体例だった。

政府が打ったのは、省エネルギー対策だった。原油の備蓄がほとんどゼロに等しかった。このため、ガソリンの値段がじりじりと上がった。

一リットル四十五円だった市販価格は八十円、百円、百二十円となり、運送会社が音を上げた。ガソリンスタンドは休日営業を中止し、マイカー自粛が呼びかけられた。

次に電力の消費を抑制する諸策が講じられた。当時、電力は約八割が火力発電によってまかなわれていたためだった。テレビ局は深夜放送を中止し、デパートやオフィスビルはエスカレーターやエレベーターの運転を抑制した。

トイレットペーパーがなくなることはなかったにせよ、紙の値段が高騰したのは事実だった。船舶用燃料の高騰と船便の制限によって、原料となるパルプの輸入量が減少したのが最大の要因だった。

七三年秋口まで、Ａ４サイズの上質紙は文具店などで一枚一円が相場だったが、冬場に一円五十銭、翌七四年春には二円二十銭から二円五十銭に値上がりした。

これに伴って雑誌や書籍が値上がりし、例えばそれまで星（★）一つ五十円だった岩波文庫、どれでも百五十円という岩波新書が個別に定価を設定するようになった。

ハードカバーの書籍も価格の表示法が変わった。

例えば七〇年七月初版の『豊饒の海』〔暁の寺〕（三島由

紀夫）は、箱入り三百四十二ページの上製本で六百六十円だが、ほぼ同じ厚さの『さびしい王様』（北杜夫）は箱なしで八百円に値上がりした。

さらに八〇年代に入ると奥付に価格を入れず、

――価格はカバーに表示してあります。

という具合になる。

ともあれ七三年のオイルショックでは、ガソリンと紙の値上がり、不足が深刻だった。情報産業に限っていうと、やはり紙不足が重大な課題となった。当時、通産省の情報処理振興課業務班長だった鈴木孝男は、次のように回想している。

「情報処理産業の生産物は紙に印字されたデータであり、これがなければ業界の死活問題になるとのことで、資源エネルギー庁、業紙課（当時）等と夜遅くまで毎日掛け合ったものです」

印字用の帳票用紙ばかりでなく、パンチカードや伝票用紙の品不足と値上がりは、その年の暮から七四年に入って顕著になった。

スタンダードの十一インチ連続帳票は七三年春ごろは一枚七十五銭前後だったが、年末に一円八十銭から二円に上昇し、年を越すと三円近くに跳ね上がった。大量に連続帳票を消費する計算センターはコスト高で経営が圧迫され始めた。

さらに計算センターばかりでなく、ソフト会社も資金繰りが苦しくなっていた。ただ、ソフト／サービス業界には展望があった。ドルの切り下げと原油価格の高騰で、他産業は一斉に新規投資を引き締めたが、情報化投資だけは減少しなかった。

さらに他産業が七四年度――七五年四月入社――の新卒採用を大幅に縮小したことで、ソフト／サービス産業に大卒採用のチャンスが回ってきた。

オイルショックは一時的に日本の経済に混乱をもたらした。ところがこの結果、省エネのブームが起こった。市民生活の中では新聞紙やダンボールなど廃紙の回収と再生が始まった。本音でいうと誰もが真っ白で柔らかなティッシュを使いたかったが、ねずみ色でゴワゴワの再生紙で我慢することを庶民は覚えた。

それまで人々は、大量生産・大量消費こそが経済発展の原動力だと信じていた。そのために古いものを「古い」という理由で捨て、テレビや雑誌から発信される新製品を次から次に購入することが是とされた。

――日本人は「ＮＥＷ」が好きだが、「ＮＥＷ」はすぐ古くなる。

と海外から揶揄された時代だった。

だがオイルショックは地球資源に限りがあることを教え、さらに「狂乱物価」によって、大衆は「昭和元禄」に浮かれていた生活を見直すべきではないか、と考えるようになった。

生活の無駄を排除するために商品は実利重視で選別され、無用の買いだめは忌避されるようになった。日用品の過大包装をなくす運動が全国に広がり、スーパーは個別包装を止めて専用の買い物袋を導入した。いわゆる「レジ袋」と呼ばれるものだが、これもまた石油資源の消費につながるという理由から七〇年代末以後、再利用運動が始まった。

産業界で最も敏感に反応したのはエネルギー産業、なかんずく電力業界だった。東京電力によると、七三年の段階で国内の第一次エネルギーは、その七七％を石油に依存していた。だが、石油に大きく依存することは、ＯＰＥＣなど産油国の意思に日本のエネルギー政策が左右されることになり、そのリスクは大き過ぎると判断された。

そこで資源エネルギー庁と電力業界は、火力発電所の熱源として天然ガスを導入するとともに、原子力発電施設の増設に着手していった。

とはいえ、天然ガスによる火力発電所や原子力発電施設の建設は一朝一夕にできるものではなかった。技術開発ばかりでなく、〝絶対〟の安全対策が講じられない限り、石油ベースの火力発電からの移行は容易でなかった。

そこで彼らが講じたのは、電力の使用量を減らすことだった。このため東京電力は、七四年十一月に「全社エネルギー対策推進チーム」を編成し、まず、日常管理による節減を自ら実行するとともに大口需要者に協力を依頼した。

具体的には室内照明の節電、冷暖房用空調機の運転管理強化などだった。

次いで取り組んだのは廃熱の再利用と自然エネルギーの活用だった。廃熱の再利用では廃熱風・廃温水の再使用、発電タービン復水熱のボイラー給水加熱再利用などであり、自然エネルギーの活用では地熱発電や風力発電にかかわる技術と機器の開発だった。また産業機器のエネルギー消費を低減するための触媒や精密ベアリングの開発などが並行して進められた。

その結果、全製造業における製品生産所要単位当たりエネルギー総費用は、七四年度に対し七五年は五％減、七六年度は一〇％減、七七年度は二〇％減、七八年度は三〇％減と着実に低減していった。この技術はやがて公害の防止につながり、燃料電池など非石油エネルギーの開発につながっている。

もともと大きな電力消費量が欠かせなかったアルミニウム精錬などは別として、工場の節電対策ばかりでなく、省

エネ型原材料の開発や作業工程の見直しなどが進められた。その中で注目されたのは、従来のメカニックな制御機構ではなく、ＩＣを使ったデジタル方式の制御システムだった。

半導体回路とプログラムで電子的に工作機械を操作し、さらに工作機械そのものをロボット化しようとする動きや、デジタル・データを工場内のネットワークで集約して品質を管理するコンピュータ・システムの適用が進んでいった。

自動車メーカーは全力をあげて燃費の改善と低公害化に取り組み、家電メーカーは省電力消費技術の開発で競うようになった。〔省エネ〕が新しい付加価値として認知されたのだ。そのためにはマイコン制御方式が最適であるという結論に、多くのメーカーが到達した。

デジタル技術を応用した事務機器が普及し始めたのもオイルショック以後である。例えばコピー機がそうだった。従来、設計図面などの複写は「青焼き」と呼ばれる化学薬品処理方式の転写が主流だったが、デジタル・スキャナーの技術や液晶の技術を組み合せたデジタル・コピー装置が登場した。

さらに全産業規模でコンピュータの利用が急速に進んだ。無駄を省きコストを削減するために、資材調達、生産、在庫、物流のすべてを最適化しなければならない。

富士通と日立製作所が共同で開発した大型コンピュータ「Ｍシリーズ」、日本電気の「ＡＣＯＳ」シリーズなどが発売されたのは、このタイミングだった。

～～～～　補　注　～～～～

トンキン湾事件　Gulf of Tonkin Incident：一九六四年七月三十一日から、アメリカ海軍の駆逐艦「マドックス」がトンキン湾周辺で南ベトナム軍の支援活動を開始していた。八月二日、北ベトナムの哨戒艇が「マドックス」に二発の魚雷を発射したとして、「マドックス」と空母「タイコンデロガ」が北ベトナム哨戒艇を攻撃・破壊した。しかし一九七一年六月、『ニューヨーク・タイムズ』がアメリカ合衆国が仕組んだものだったことを暴露した。

▼空母「タイコンデロガ」　一九四三年に就役し、太平洋戦争レイテ沖海戦（四四年十月二十～二十五日）、ルソン島上陸作戦（四五年一月六～九日）などに参加した。四五年一月二十一日、台湾沖で日本軍機の特攻攻撃を受けて大破した。第日本帝国政府がポツダム宣言を無条件受諾して降伏したあと、東京湾に入って帝国陸軍兵士の復員を支援した。

ハフェズ＝アル＝アサド　Hāfiz al-Asad／１９３０～２０００。シリア・アラブ共和国第四代大統領（在任：一九七一～二〇〇〇年）

シャロン　Ariel Sharon／１９２８～２０１４。第一次中東戦争（一九四八年五月～四九年二月）で歩兵中隊長として従軍し、以後、予備役と国防軍への復帰を繰り返した。第二次中東戦争（五六年十月～五七年三月）では第二〇二空挺旅団長、第三次中東戦争（六七年六月）では第三八機構師団長を務めた。七二年六月に退役したが第四次中東戦争の勃発で復帰し、独断でスエズ逆渡河作戦を進めてイスラエル軍内の不協和音を生んだ。少将を最終階級として政界に転じ、八一～八二年国防大臣、二〇〇一～〇六年第十五代首相となった。

バレル　一バレル＝百五十九リットル。十九世紀の半ばにアメリカのペンシルベニアで油田が開発されたとき、原油の輸送にシェリー酒の樽を使った。「バレル」の名は、その「樽」に由来している。シェリー酒用の樽は五十ガロン（一ガロン＝三・七八五リットル）だったが、途中で蒸発して目減りし四十二ガロンになっていた。そこで四十二ガロン＝百五十八・九七リットルを一バレルと呼ぶようになった。

トイレットペーパー騒動　大阪の万国博覧会跡地にできた千里ニュータウンのスーパーマーケットが震源地とされているが、実際は分からない。売り惜しみして店先に商品を並べない小売店もあったりして、騒動は全国に広がった。

ジョニー・カーソン　John William "Johnny" Carson／１９２５～２００５。一九六二年十月から一九九二年五月まで、ＮＢＣ（National Broadcasting Company）の『ザ・トゥナイト・ショー・スターリング・ジョニー・カーソン』の司会を務めた。

185 静かなる多数派

第百八十五

静かなる多数派

一

リチャード・ニクソン

一九一三年一月九日、カリフォルニア州ヨーバ・リンダに生まれ、四二年六月海軍予備役中尉に任官した。四三年十月大尉、四五年十月少佐、四六年三月現役任務を離れ、同年下院議員に当選した。

五三年一月海軍予備役中佐となり、第三十四代大統領ドワイト・アイゼンハワーのもとで六一年まで副大統領を務めた。六〇年の大統領選挙で民主党のジョン・ケネディに敗れたが、六九年第三十七代大統領に就任した。

六九年十一月ソ連と戦略兵器制限交渉（ＳＡＬＴ）を開始して東西冷戦の緩和に着手し、並行して中国共産党政府との関係改善に努め、中国の国際社会への復帰を実現した。

七一年八月ドル防衛策を発表して戦後ＩＭＦ体制に終止符を打つきっかけを作った。またベトナム戦争からアメリカ軍を撤退させ、七四年六月には中東五か国を歴訪、続いてソ連を訪問して貿易協定とＡＢＭ制限条約に調印した。

ワシントン市内のウォーターゲートビルにあった民主党全国委員会本部に、共和党のニクソン再選委員会の関係者が盗聴器を仕掛けようとした不法侵入事件について、ホワイトハウスがもみ消し工作を行ったことが明るみに出た。

ニクソンは関与を否定したが、議会や世論の批判が集中し、七四年七月、下院で大統領弾劾訴追状が可決されたのを受けて大統領を辞任した。

九四年四月二十二日、脳卒中で死去。享年八十一。

歴代大統領は引退後も手厚い保護がつき、その葬儀は国葬というのが恒例だったが、彼は生前から国葬を望まないことを家族に伝えていた。四月二十七日、カリフォルニア州ヨーバ・リンダの生家前で葬儀が執り行われた。

田中角栄

一九一八年五月四日、新潟県刈羽郡西山町に生まれ、高等小学校を卒業して救農工事現場などで働き十五歳で上京した。三六年私立中央工業学校を出て四三年土建会社を設立した。戦時中は朝鮮で土木工事の仕事などをしていたが、敗戦で引き揚げ、四七年衆院選で初当選した。

五七年七月第一次岸内閣で郵政大臣として初入閣し、民間放送テレビの一斉免許で手腕を発揮し、六五年には経営

不振に陥った山一証券に金融支援を行って再建した。六五年総選挙の自民党大勝で幹事長に就任、第三次佐藤内閣で通産大臣として日米繊維交渉を取りまとめた。

七二年七月、自民党第六代総裁の椅子を福田赳夫と激しく争ったのち首相に就任し、日中問題の解決に取り組んだ。七三年には金大中事件をめぐる日韓関係の改善に努め、オイルショックに伴う石油備蓄基地建設や省エネルギー運動を実施した。

七四年十一月十一日発行の月刊誌「文芸春秋」に掲載された立花隆「田中角栄研究」が発端となって、十七日にフォード米大統領訪日反対・田中退陣要求全国統一行動に百五十万人が参加、これを見て同月二十六日に退陣を表明した。

七六年二月四日、アメリカ議会上院外交委員会でロッキード献金事件が表面化し、国際興業社主・小佐野賢治、全日空社長・若狭得治、同副社長・渡辺尚次、丸紅会長・檜山廣らの国会証人喚問が始まった。

次いで三月四日には戦前・戦後を通じて右翼のフィクサーとして知られた児玉誉士夫を東京地検特捜部が臨床尋問を行い脱税容疑で起訴、七月二十七日に田中前首相の逮捕に踏み切り、十一月二日法務省が同事件灰色高官五人の氏名を発表した。

ロッキード事件は丸紅ルート、全日空ルート、児玉ルート、小佐野ルートの四ルートで公判が進められ、八一年十一月五日、東京地裁は小佐野賢治に懲役一年の実刑判決を言い渡した。

以後、若狭得治（懲役三年、執行猶予五年）、橋本登美三郎（懲役二年六か月、執行猶予三年）、佐藤孝行（懲役二年、執行猶予三年）などが有罪とされた。田中角栄に懲役四年、追徴金五億円の実刑判決が出たのは八二年十月十七日だった。

田中は一貫して無罪を主張しただちに東京高裁に控訴したが、八五年二月、脳梗塞で倒れ、政治的影響力を失った。九三年十二月十七日没。享年七十五。

この二人の政治家は、〝戦後〟の終焉に立会っただけでなく、その中心的な役回りを演じた。

繰り返すが、ここでいう〝戦後〟とは、日本政府が一九五一年の「経済白書」で使った「戦後」――戦災による焦土や飢え――のことではない。

第二次大戦が終結し、アメリカ対ソ連（ないし自由経済圏対共産経済圏）の対置構造が確定してから以後、四半世紀の間に積みあがった芥を、この二人は強引に取り除こうとした。

ニクソンはウォーターゲート事件で悪名を残したために、政治家としての手腕、業績が正当に評価されていないように見える。同じように田中角栄という人物も、ロッキード事件が邪魔をしている。

だが、例えばニクソンは、前任のケネディ―ジョンソンが拡大したベトナム戦争の泥沼からアメリカ経済を抜け出させるために、さらには第二次大戦後の共産主義敵視政策がもたらしたキューバ危機という最大の緊張を解くことに最大の努力をした。

そのためには、ドルを唯一の共通通貨としたＩＭＦ体制を破壊しなければならなかった。その結果、中東におけるアラブ対イスラエル（イスラム対ユダヤ）の問題を引き起こし、石油に新しい通貨価値を与えたことは否めないが、ともあれ〝戦後〟体制に改革を起こした。

田中角栄という人物が果たしたのは、東大法学部―官僚というエリート集団に挑戦したことだった。吉田茂、池田勇人、佐藤栄作など歴代は、煎じ詰めれば官僚政治の頭目であって、政党や派閥の均衡ばかりでなく、政治と官僚のバランスの上に成り立っていた。しかし田中という人は、そのしがらみを多く持たなかった。

ドルショックで一ドルが三百六十円から三百八円に切り上げられたとき、この人物が最初に発した言葉は

――ツバメは大丈夫か。

だった。

空を飛ぶ燕のことであろうはずはない。新潟県燕市のことだった。

同市はナイフやフォークなどステンレス製洋食器の輸出で成り立っていた。新潟に新幹線と高速道路を通し、信濃川の河川敷に大規模な工業団地を作ろうとしたのは、他の地方選出議員と同じように、彼においては当然のことだった。

そのことで彼が否定されるなら、他の国会議員はすべて――大野伴睦、荒船清十郎などに限らず――否定されなければならない。

日本国首相として、田中角栄は公害防止と省エネルギー化に取り組み、物価安定策を講じ、日中和平を実現した。日本と中国の間には十五年戦争という深い傷があって、その傷に触れることは歴代が避けて通っていた。

キッシンジャー秘密外交のあとだったとはいえ、田中はあえてその傷口に触れた。国交回復交渉の打診から実現まで九十四日というスピードは、田中なくして断行できなかった。

田中は日本経済の自由化にも大きな役割を果たした。通産相時代に達成した日米繊維協定は、日本とアメリカの経

済摩擦を予見したものだったし、実をいえばコンピュータの輸入自由化、外資参入の開放などはすべて田中が下地を作った。

その後の三木武夫、福田赳夫、大平正芳、中曽根康弘を加えた五人は「三角大福中」と総称され、それぞれに肯定と批判がある。その両方に突出しているのは、どう見ても田中角栄ということになる。

このためにニクソンと田中を惜しむ人も少なくない。この二人に共通しているのは、「サイレント・マジョリティ」（静かなる多数派）である。

この言葉は、ニクソンが大統領に就任した直後の演説で使った。

サイレント・マジョリティに支持され、サイレント・マジョリティによって引きずりおろされたという意味で、二人はやはり自由主義、民主主義の信奉者だったに違いない。

二

ニクソンが大統領を辞任することになった遠因は、国防および軍事に関する機密文書が相次いでニューヨーク・タイムズ紙とワシントン・ポスト紙に暴露されたことだった。

彼が大統領に就任して五か月後の六九年五月九日、ニューヨーク・タイムズス紙がベトナムにおける米軍のホーチミン・ルート越境爆撃を暴露した。このとき情報を漏洩したと思われる政府職員や民主党上院議員の自宅などに盗聴器が仕掛けられた。

七〇年は何ごともなく過ぎたが、翌七一年三月、政府議会の承認を経ずカンボジアへの爆撃を指示した国防総省の秘密文書がワシントン・ポスト紙に掲載された。続いて六月十三日にはニューヨーク・タイムズ紙が「ペンタゴン・ペーパーズ」を掲載した。

三月に起こった機密文書漏洩事件を調査していた国防総省の内幕を暴露したもので、それは大統領補佐官キッシンジャーの元同僚ダニエル・エルズバーグからニューヨーク・タイムズに手渡された。

七月、大統領側近のアーリックマン首席補佐官はヤング補佐官とエージル・クローグ補佐官を責任者とするエルズバーグ事件特別調査班を編成した。ヤングとクローグは行政府ビルの地下に「鉛管工」の看板を掲げた本部を設置した。ここに元ＣＩＡ諜報員でチャック・コルソン補佐官の部下であるハワード・ハント、元ＦＢＩ捜査官のゴードン・リディーがスタッフとして参加した。

この直後、今度はニューヨーク・タイムズ紙がＳＡＬＴ交渉における米国側譲歩案の内容を暴露した。また十二月

十四日にはワシントン・ポスト紙がインドーパキスタン紛争にアメリカ政府が介入する意図を示した秘密文書を暴露した。

こうした機密文書の漏洩に危機感を覚えた「鉛管工」グループは、「ペンタゴン・ペーパーズ」を漏洩したエルズバーグの襲撃と、記事を掲載したワシントン・ポスト紙のジャック・アンダーソン記者の暗殺を企てたが、実行者のうち数人が逮捕されたことから計画を断念した。

七二年の五月、彼らは民主党がすべての元凶と判断して、ワシントン市内ウォーターゲート・ビルの民主党全国委員会事務所に侵入し、ここに盗聴機を仕掛けた。

六月十七日、「鉛管工」グループの八人がウォーターゲート・ビルに再度侵入し逮捕された。これがニクソンの命取りとなった。

逮捕された八人は

「民主党のマクガバン大統領候補がキューバのカストロや北ベトナムのホー・チミンから資金を受け取っている証拠を握るために侵入した」

と供述した。

ところが翌十八日、ＡＰ通信が

「逮捕された八人のうち、マッコードはニクソン再選委員会の警備主任を務めていた」

と報じ、ニクソン陣営が関与していることを暴露した。

十九日、ワシントン・ポスト紙はマッコードの政治的背景や再選委員会との関係を一面トップで詳細に書いた。

このとき連邦調査局（ＦＢＩ）はマッコードが所持していた手帳からハワード・ハントの関与を突き止め、さらに「ニクソン再選委員会」からメキシコの銀行宛てに十一万ドルの資金が送られていたことをつかんでいた。

二十日、ワシントン・ポスト紙は一面トップでウォーターゲート事件の主犯はチャック・コルソンであって、コルソンは大統領補佐官の部下だったことを暴露した。これを受けて民主党はニクソン再選委員会をプライバシーの侵害と公民権法違反で告訴した。

ニクソンがこの時点で、共和党大統領候補の指名を辞退していれば、これ以上に事件は広がらなかった。だが彼は八月二十六日にマイアミで開かれた共和党大会で大統領候補の指名を受け、十一月七日に民主党のマクガバン候補を大差で破って再選した。ここからが本当の事件になった。

一九七三年一月、ウォーターゲート裁判で被告全員が有罪を認め、単独犯行を主張した。上層部に誅が及ぶことを畏れて、すべての罪を自分一人で被るのは日本だけの現象ではないらしい。ただ日本と違うのは、自殺者が一人も出ていないことだ。

二月九日、上院にウォーターゲート特別調査委員会が設置された。委員長は民主党のサム・アービン上院議員だった。前後して雑誌「タイム」が、

「六、七人の新聞記者と、数は不明だが複数のホワイトハウス職員たちが、六九年から七一年にかけて電話を盗聴されていた」

と報じた。この報道は正しかった。

五月二十二日、大統領側近はニクソンの声明として盗聴や鉛管工グループの工作などをすべて認め、

「国家の安全保障に必要な措置だった」

と強調した。

特別調査委員会の公聴会で不利な証言が飛び出すことを恐れたためだった。その懸念は七月十三日、前大統領補佐官のバターフィールドが、大統領の指示で大統領執務室での会話をすべて録音していたことを認めるかたちで的中した。以後、ホワイトハウスと議会の間では、録音テープの提出が焦点となった。

十月十日、アグニュー副大統領が脱税、収賄、強要の罪に問われて副大統領を辞任した。検察がニクソンの片翼をもぎ取ったのだ。後任は共和党下院院内総務ジェラルド・フォードだった。それはニクソンが、自分の後任を準備したに過ぎなかった。

フォードが副大統領に指名された同じ日、連邦高裁は大統領の訴えを却下して、録音テープを議会に提出するよう命令した。対して大統領陣営はテープの代わりにその速記録を提出するとしたが、議会は聞き入れなかった。二十件にのぼる大統領弾劾決議案が提出され、ニクソンは窮地に追い込まれた。

七四年二月六日、下院は賛成四一〇、反対四で司法委員会にニクソン調査の権限を与えることを可決し、同委員会は四月十一日、録音テープの提出を求める提案を三三対三で採択した。連邦地裁もテープを提出するよう命令した。

ニクソンは再び拒否したが、もはや体制を立て直すことはできなかった。六月の中東歴訪とソ連訪問が、アメリカ大統領としての最期の仕事になった。

七月二十七日、下院司法委員会は、二七対一一で一連の大統領の言動は司法妨害であるとする弾劾決議第一条を、二八対一〇で権力乱用とする同第二条を、二一対一七で議会を侮辱したとする同第三条をそれぞれ可決した。

下院本会議の表決でこれが成立すればニクソンは大統領を罷免されることになるし、可決する見通しが圧倒的に強かった。

八月八日、ニクソンは遂に自ら大統領の地位を去ることを発表し、副大統領フォードが自動的に昇格した。

一か月後、フォード大統領は
――ニクソン前大統領に、全面的、自由かつ絶対的な恩赦を与える。
と決定し、これをもって四年以上にわたる大統領のスキャンダルに封印が打たれることになった。

三

ロッキード事件が明るみに出たのは、田中角栄が首相を退陣して一年三か月後、一九七六年二月四日だった。アメリカ上院外交委員会の多国籍企業小委員会が召喚したロッキード社役員のクラッターが、
――全日空に旅客機「トライスター」を売り込むため、総額約一千万ドルを日本側に支払った。
と証言したのである。
この証言は日本に限定した話ではなく、ロッキード社がイタリア、トルコ、オランダなどに行った売り込み工作全般に関する話の一環に過ぎなかった。
二日後、同社副会長だったコーチャンは、
――代理店である丸紅商事の勧めに従って、日本政府の高官に二百万ドルを手渡した。
と証言した。
二人の証言によると、それは七〇年から七二年にかけてのことだった。
当時、日本人はようやく海外旅行ができる程度に豊かになり、ハワイやグアムが人気を集めていた。大手旅行会社がパックツアーを売り出し、航空会社には大型旅客機による大量輸送力が求められていた。
海外路線への乗り入れを目指す全日空は、このときマクダネル・ダグラス社（のちボーイング社に吸収合併）の「DC―10」を検討しており、ロッキード社はそれを覆すべく、多額の工作資金を投入したのだった。
コーチャン証言が伝えられてから十日後の二月十六日、国会でロッキード事件証人喚問が行われた。
この様子はテレビで実況中継され、高い視聴率を得た。小佐野賢治や伊藤宏、全日空社長の若狭得治らは、野党議員の質問に対して
――記憶にございません。
を連発し、これが流行語になった。
事件の成行きはすでに記した。
その構図を整理すると、次のようになる。
まず、ロッキード社は全日空の次期主力旅客機の決定をDC―10からトライスターに覆すため、児玉誉士夫に多額の資金を渡し、児玉から小佐野、伊藤を通じて田中角栄

に五億円を渡した。

一方、全日空からは運輸大臣だった橋本登美三郎と政務次官だった佐藤孝行、自民党幹部だった二階堂進などに総額三千万円が手渡された。金銭の授受に直接かかわった主要な人物は一網打尽で逮捕され、田中前首相はその頂点にいた。

前首相の逮捕に踏み切った東京地検特捜部の堀田力（のちさわやか福祉財団理事長）について、一九九九年十月十八日付「朝日新聞」〔天声人語〕は次のように記している。

弁護士でさわやか福祉財団理事長の堀田力（つとむ）さんは、かつて東京地検特捜部の検事を務めた。「ロッキード事件」の捜査に心血を注いだ一人である▼「マスコミと検察は、基本的には同じ志です。腐った事実、みんなが知らなければいけない事実で、しかも隠されている事実をきちんと公にする。マスコミは社会的責任を、検察は法的責任を明らかにする。それによって社会を浄化するのが基本的な使命だと思います」▼『壁を破って進め私記ロッキード事件』（講談社）と題した本を堀田さんは書いた。それに触れて語った個所が、なかでも私たちジャーナリズムに携わる者の痛いところを突く。「書かなかったのはプライバシーの部分などごくわずか。政治や外交に関することをはじめ、あとは事実を全部明らかにしたのです。あの本について、何人かの記者から取材を受けました」▼「ところが、ほとんどの方が『国家公務員法違反になりませんか』『あそこまで書いて大丈夫ですか』と聞く。ジャーナリストの書評にもそうしたものがあった。大変心外でした」「法務省や検察の方から、しかられるのなら分かる。ただし、甘んじては受けず、言い返しますが。でも、どうしてマスコミの方から大丈夫なのかと聞かれるのか。なぜ、もっと話さないのかと言ってくれないのか。取材されながら心外でした」

「鬼より怖い」といわれる東京地検特捜部が精査した結果、贈収賄の罪が確定したのだから、その事実は事実なのだろう。ただし、七六年八月二日に死亡した田中角栄の私設運転手・笠原政則が明確な証言をしていたら、何か別の事実が表面化したかもしれない。だが彼の死は多くの人が不審に思ったが、「自殺」として処理され、追及の道は閉ざされている。

以下はインターネット・サイトに掲示されている様々な解釈、推測、推理であって、検察当局が認知した「事実」とはやや違っている。だが、中には「なるほど」と納得してしまう所論がないでもない。

一つは、ロッキード社への領収書に「ピーナッツ」という符号が使われていたことについてである。ロッキード社のトライスターは、アメリカでは「TL1101」と呼ばれていて、「P」で始まる符合と一致しない。

日本政府の第四次防衛力整備計画に組み込まれた対潜哨戒機「P3―Cオライオン」のことではないか――という説がある。政府首脳会談で決定したことであれば、ロッキード社や丸紅が裏金工作をする必要はそもそもなかったことになるのだが、着岸点は面白い。

もう一つは、全日空が運輸族議員に配った裏金の意味に関する推理で、トライスター採用の認可云々ではなく、国際路線の獲得をねらったものだった、という。これは正鵠を衝いている。ロッキード社もトライスターを日本の国内路線に就航させる思惑ではなかったであろう。

三つ目は、アメリカが日本の国産旅客機開発計画を潰すためだったという説である。当時、日本は戦後初の国産機「YS―11」を開発していたが、アメリカは、自動車や家電製品、コンピュータなどの次に、航空機の分野でも日本が強力なライバルになると見た、という。

だからといって外交委員会でコーチャン証言を引き出し、ややこしい手順で田中角栄を潰す必要はなかったのではないか。

最期の説は、この事件の背後に日米のエネルギー戦略が潜んでいるという見方である。なるほど田中は中東、つまりアメリカ資本が支配する地域に依存する原油の輸入先を東南アジアにシフトし、またオーストラリア政府と共同で原子力エネルギーを開発しようとした。

脱アメリカの志向が石油資本を逆なでし、回りまわって田中の失脚につながったという。

そうであったかもしれないし、そうでなかったかもしれない。事件から三十年を経た現在、そのことは、もはや詮索の外にある。

ただ一ついえることは、いまだに田中は中国政府から

――中国を世界に復帰させてくれた恩人。

と深く感謝されている、と信じられていることだ。

中国には

「最初に井戸を掘った人の恩は三世を過ぎても忘れない」

ということわざがあるそうだが、ならばアメリカのキッシンジャー大統領補佐官がそれに相当するではないか。このあたりの機微は、なかなか日本人には分からない――というより、知らされていない。

〜〜〜〜　補　注　〜〜〜〜

ＡＢＭ制限条約　ＡＢＭ（弾道弾迎撃ミサイル：Anti Ba- llistic Missile）に関する米ソ合意。一九七二年五月ニクソン米大統領とブレジネフソ連共産党書記長が締結した軍備統制条約で、国土全体を防御するミサイル防御システムを禁止し、双方の首都と首都から最低一千三百キロ離れた場所の大陸間弾道弾ミサイル発射基地を防御する二か所の制限的なＡＢＭ基地だけを認め、二つの基地の迎撃ミサイルと発射台数は各百機に制限された。

立花　隆　たちばな・たかし／１９４０〜２０２１。長崎県に生まれ一九六四年東京大学仏文科を出て文藝春秋社に入った。六六年退社し、東京大学哲学科に学士入学、七一年中退しフリーライターとなった。七四年『田中角栄研究』を発表し田中内閣の崩壊の原因を作った。八三年ジャーナリストとしての仕事に対し菊池寛賞。九五年東京大学先端科学技術研究センター客員教授。主な著書に『日本共産党研究』『農協』『宇宙からの帰還』『精神と物質』に『インターネット探検』などがある。

ロッキード献金事件　丸紅ルート、全日空ルート、児玉ルート、小佐野ルートの四ルートで公判が進められ、八一年十一月五日、東京地裁は小佐野賢治に懲役一年の実刑判決を言い渡した。以後、若狭得治（懲役三年、執行猶予五年）、橋本登美三郎（懲役二年六か月、執行猶予三年）、佐藤孝行（懲役二年、執行猶予三年）などが有罪とされた。田中角栄に懲役四年、追徴金五億円の実刑判決が出たのは八二年十月十七日だった。

海外路線への乗り入れを目指す全日空は、このときマクダネル・ダグラス社（のちボーイング社に吸収合併）の「ＤＣ―10」を検討しており、ロッキード社はそれを覆すべく、多額の工作資金を投入した。二月十六日、国会でロッキード事件証人喚問が行われた。この様子はテレビで実況中継され、高い視聴率を得た。

若狭得治　わかさ・とくじ／１９１４〜２００５。一九三八年東京帝国大学法学部を出て逓信省に入り、終戦時は運輸省運総局日本海事務局の運送課長だった。六五年運輸省事務次官として国鉄料金の値上げ問題、日米航空協定を改定、日ソ航空協定の締結、新東京国際空港候補地の選定などにかかわった。六九年全日本航空に移って顧問、副社長、社長を歴任した。

檜山　廣　ひやま・ひろ／１９０９〜２０００。一九三二年東京商科大学を出て大道貿易に入った。五二年丸紅飯田取締役となり、五七年常務、六四年社長に就任した。

小佐野賢治　おさの・けんじ／１９１７〜１９８６。山梨県に生まれ一九四一年東京で自動車部品業を創業。徴兵で中国へ出兵したが病気で除隊となり、それをきっかけに軍需品の販売で大儲けした。四五年熱海ホテル、山中湖ホテル、強羅ホテルを相次いで買収し国際興業を創設、四六年に東急グループの五島慶太から東都乗合自動車（現・国際興業バス）を譲り受けた。六一年山梨交通会長、六六年富士屋ホテルの経営権を握り、六九年十和田観光電鉄を買収したのち、七三年シェラトンパレスホテルを取得して海外にも進出した。

児玉誉士夫　こだま・よしお／１９１１〜１９８４。福島県本宮町に生まれ一九一八年（大正七）上京して姉の嫁ぎ先である朝鮮の京城、本宮町の実家、次兄の働き先の大阪、長兄が住む東京などを転々とし、二六年、東京・向島の鉄工所に見習工として入っ

た。労働組合活動に参加したが、労働争議で組合がなぜ「われらの祖国ソビエト！」と叫ぶのか違和感を抱き右翼に傾斜、二九年（昭和四）憲法学者・上杉慎吉主宰の「建国会」に入会した。その後津久井龍雄主宰の「急進愛国党」に移籍し、天皇直訴事件、井上準之助蔵相脅迫事件、内大臣・宮内大臣暗殺未遂事件等で起訴され、懲役刑に服して三七年（昭和十二）出所、外務省情報部長・河相達夫の知遇を得て中国各地を視察後、三九年河相の斡旋で外務省情報部嘱託となり上海を拠点に情報活動に従事した。四一年十一月、国粋党総裁・笹川良一の仲介で海軍航空本部嘱託となり、上海に軍需物資調達のための「児玉機関」を作った。終戦直後に東久邇内閣の参与となったが、内閣総辞職で解任、四六年戦争協力容疑で巣鴨プリズンに収容され四八年釈放となった。ロッキード事件では同社から巨額の対日工作資金を受け取ったとして脱税と外国為替管理法違反で起訴された。その初公判（児玉ルート）は七七年六月東京地裁で開かれたが八四年一月審理未了のまま死去した。

ダニエル・エルズバーグ　Daniel Ellsberg／１９３１～　：イリノイ州シカゴに生まれ一九五二年ハーバード大学経済学部を出た。六四年国防総省に入り、六五年ベトナム戦争平定計画担当補佐官を務めた。七一年「ペンタゴン・ペーパーズ」を「ニューヨーク・タイムズ」や「ワシントン・ポスト」などに提供四、スパイ防止法に基づく国防機密漏洩罪に問われたが控訴棄却となった。岩国の在日米軍基地に核爆弾や戦術核兵器が貯蔵されていたことを暴露したことでも知られる。

ＳＡＬＴ　Strategic Arms Limitation Talks：「戦略兵器制限交渉」と訳される。東西冷戦下における核兵器制限を目的に、アメリカ合衆国とソビエト連邦が協議した。

トライスター　ロッキード社の大型旅客ジェット機。正式名称は「Ｌ―１０１１」。全幅四十七・四メートル、全長五十四・二メートル、全高十六・九メートルでロールスロイス社製ジェットエンジン三基を装備し二百五十人から三百四十五人を乗せることができた。ジェット機による大量輸送時代に対応し、ボーイング社のＢ―７４７、ダグラス社のＤＣ―10がライバル機となった。最終的に二百五十機が生産され、日本では全日空が採用した。

クラッター　John William Clutter：ロッキード社の元東京駐在事務所代表だった。

コーチャン　Archibald Carlisle Kotchian／１９１４～２００８。スタンフォード大学からプライスウォーターハウスに進み、ロッキード社の子会社「ベガ・エアプレーン」社に入った。第二次大戦中、戦闘機や輸送機の増産を監督し、六七年ロッキード社社長に就任した。

堀田　力　ほった・つとむ／１９３４～　：京都大学を卒業し検察官となった。東京地方検察庁は特別捜査部検事としてロッキード事件の捜査に従事したのち、甲府地方検察庁検事正や法務省官房長などを歴任した。退官後は弁護士として活動するかたわら、元読売巨人軍の元選手・監督の川上哲治（かわかみ・てつはる／１９２０～２０１３）とともに「さわやか福祉推進センター」を開設するなど福祉事業家として活動した。

186 ボートピープル

第百八十六

ボートピープル

一

一九七五年の四月三十日正午、南ベトナムの首都サイゴンの独立宮殿に北ベトナム正規軍の戦車隊が突入した。南ベトナム政府のズオン・バン・ミン大統領は無条件降伏をし、ここに長かったベトナム戦争は終結を見た。七三年一月、パリで「ベトナム和平協定」が調印されて二年三か月後のことだった。

物量や兵器の性能において圧倒的に劣勢だった北ベトナムを、最後まで一枚岩で統率したのはホー・チ・ミンという人物である。思想家であり政治家であり、かつ北ベトナムの象徴でもあったこの人物は、しかし歴史的な勝利を見ることができなかった。六九年九月に逝去していたのである。

本名はグエン・シン・ツォンという。

一八九〇年五月十九日生まれというが、誕生日には異説がある。地方官吏の父が上級官吏の試験を受けるべくベトナム王朝の古都フエに移り住んだとき、フランス・インドシナ総督府が設けたベトナム人官吏養成学校「クオックホック（国家学堂）」に入った。ファンティエットで小学校の教師をしたのち、サイゴンで技術者養成校に入学した。

二十一歳のときシャルジュール・レユニ運輸会社のコック見習いとなり、フランスに渡った。以後三十年間、海外での流転が始まる。

まず彼は船員となって、アフリカやアメリカに行った。のちパリで共産主義に接近し、三十一歳でフランス植民地民族連盟の創立に参加した。

二三年、モスクワで開かれた農民代表インターナショナルで執行役員、二四年のコミンテルン第五回大会で東方部常任委員、二六年ソ連のボロディン軍事顧問団の一員として中国に行き、広東で「ベトナム青年革命同志会」「共産主義同盟」を設立した。

二八年コミンテルンより党創立の権限が与えられ、香港に「ベトナム共産党」を創設した。

その後、党の方針をめぐってやや内紛めいたことがあった。この時期、彼はモスクワで結核との闘病生活を送るかたわら、レーニン国際大学で革命理論・被抑圧解放運動の研究に没頭した。一九三八年に再び中国に入り、中国共産党・葉剣英麾下の国民党支援軍に随行しつつ南下し、四一

年二月、ついに中越国境を越えることができた。
第二次大戦下のベトナムでは、日本軍にとってもフランス・インドシナ方面軍にとってもグエン・シン・ツォンという男は危険分子だった。
彼は北部パクボの洞窟に潜みつつ独立闘争路線を示して「ベトナム独立同盟（ドゥックラップ・ドンミン＝ベトミン）を結成した。ホー・チ・ミン、漢字で表記すると「胡志明」（志明らかなる異邦人）を名乗ったのはこのときである。
中国南部にベトミン後方拠点を設置する仕事を進めていたとき、共産主義の拡大に警戒を強めていた中国国民党に拘束され、四三年九月に釈放されたとき、自分の足で立てないほどに体力が衰えていた。
ややあって再びベトナムに戻り、四五年八月、日本が無条件降伏した好機をとらえて全国的な蜂起を発動して「八月革命」を成功させた。
このとき日本に旧王室の保大（バオダイ）帝を首班とする亡命政権があったため、最初の民族分裂の危機に迫られたが、天運は彼に味方した。連合軍諸国は戦後処理に忙殺され、インドシナが真空状態となったのである。九月にいたって「ベトナム民主共和国臨時政府」を樹立し、ここに初の統一独立国家が誕生した。

二

最大の不思議は、なぜアメリカが負けたのか、ということである。
最大十トンの爆弾を投下できる超々大型爆撃機「B―52」、最新鋭のジェット戦闘機、ロケット砲、火炎放射砲を備えた装甲車輌、連装機銃など近代装備を備え、ピーク時には五十万人を超える兵力を投入して、なぜ勝てなかったのか。
――ベトコンのゲリラ戦法に攪乱された。
という指摘がある。
なるほど、ベトコンは民衆に紛れて爆弾を仕掛け、アメリカ兵や政府中枢の要人を殺し、テト（旧正月）に一斉蜂起して南側の足下をすくった。アメリカ軍が朝鮮戦争で恐れていたことが、ベトナムでは実際に起こった。
だがそれは、決定的な敗因ではない。
――ラオス、カンボジアの山岳地帯を貫く北側の補給路を断てなかったのが敗因である。
とする考え方もある。
いわゆる「ホー・チ・ミン・ルート」を延べ何十万もの人々が往復し、手と足で中国から物資を運んだ。アメリカ

は国際法に則って、越境して歩兵部隊を送ることができなかった。それも一理あるには違いない。

だが最大の敗因は、北ベトナムに侵攻しなかったことだ。北緯十七度線を越えて機甲師団と歩兵部隊を送り込み、ハノイを占領し、その他の都市を制圧すれば、戦争はもっと早く終った――かもしれない。

アメリカ軍は超々大型爆撃機で、北緯十七度線以北に大量の爆弾を落とした。それは太平洋戦争における日本本土の空襲に倣った作戦だったが、爆弾が炸裂したのは工業地帯や家が密集した都市ではなかった。赤土の荒野か広葉樹林が茂る密林だった。

もっといえば、アメリカはランチェスターの法則を忘れた。法則の原理を忘れた、と言うべきであろう。そもそもこの法則は、敵と味方が同じような武器と兵力で戦うことを前提として研究され、そこに計数化された作戦が適用された。

第二次大戦は工業国と工業国の戦いだった。工業生産力と技術力が優劣を決定し、精神力と物量力が戦闘の勝敗を左右した。ベトナムではこのすべてが通用しなかった。旧日本帝国陸軍が残していった元込めの単発銃が、ＩＣを搭載した最新鋭のジェット戦闘機を撃ち落したのだ。

もう一つの敗因は、最初からアメリカは及び腰だった。北緯十七度線を越えてハノイを占領すればいいことは分かっていたし、それは容易なことだった。にもかかわらず実行しなかったのは、ソ連と中国が戦いの前面に出てくることだった。

であれば、アメリカはベトナムで戦うべきではなかった。

アメリカは延べ二百六十万人の兵士をベトナムに送り込み、五万八千人が戦死、七十五万二千人が負傷した。南ベトナム側の兵力はピーク時百十八万人に達し、約十七万人が死亡した。対して北ベトナム側は正規軍と南ベトナム解放民族戦線（ベトコン）は計九十七万七千人が戦死し、百三十万人が負傷したといわれる。

このころ日本では新左翼諸派が活力を失い、ベトナム反戦運動も下火になっていた。このためにサイゴンの陥落は、遠い外国の軍事クーデター程度にしか報道されなかった。主要なマスメディアのうち、最後まで特派員を置いていたのは毎日新聞だけだった。

同紙特派員としてサイゴンの陥落を見届けた古森義久は、その直後の様子を次のように報道した。

サイゴンに軍政を布いた軍事管理委員会が「米植民地主義や傀儡政権の低俗な書物を禁止する」布令を出したのを

きっかけに、焚書が始まったが、エロ本だけではなく、欧米の文学や一般教養書までが燃やされた。「解放学生青年連盟」と名乗る青少年が本屋や民家を一軒一軒回り、「反革命的不良図書」を片端から没収した。さすがにこれは民衆から激しい反発を買ったので、軍事管理委員会も行き過ぎを戒める布告を出し、外国の本でも医学や自然科学の本は除外し、また民家に立ち入って没収するのは禁止された。

人民裁判や公開処刑も始まった。初めは刑事犯が対象だったが、間もなく旧政権下の「反人民的行動」まで処罰の対象になった。通常の訴訟手続きは行われず、当局が動員した民衆のなかから有罪の声が上がれば処刑するというやりかたである。

臨時革命政府は南側旧政府の要人や国家公務員、旧軍の将校などを次々に捕らえていった。逮捕されたのは三十万人を下らないとされている。一般市民であっても共産主義に服従しないと判断された人々は「新経済区」への移住を強制された。そこは未開拓の荒野やジャングル、あるいは南政府軍が仕掛けた地雷原だった。

新政府は開拓者たちに家を建て、最初の三カ月は食糧を支給すると約束していたが、現地の役人たちが横領することが少なくなかった。このために餓死や自殺が相次いだ。アメリカ軍に従軍したフリー・ジャーナリストの徳岡孝夫は次のように書いた。

七五年四月のサイゴン陥落の直前、直後に国外に脱出した「南」ヴェトナム人は総計一三万人を越したが、これは旧サイゴン政権の関係者や政府軍の高級将校、資本家とその家族が大半であり、革命につきものの亡命者とみなすことができる。しかしその後も脱出者は切れ目なく続き、七六年、七七年と増え続けた。

この年（七八年）、外国に到着したヴェトナム難民は八万五千人以上に達した。その遭難率は五〇％近いと推定されるので脱出者の実数は七八年だけで恐らく二十万人近くに達しただろう。

サイゴン陥落時の難民が、米軍機や米艦艇で運ばれたのに対し、その後の難民は、陸続きの国が社会主義国で、陸路の脱出が不可能なため、航洋性のない河川用の船や小さなボロ漁船で海上に乗り出し、運を天に任せて近隣のマレーシアやタイの沿岸にたどり着くか、公海上で他国の船に拾われるかを当てにした決死的脱出であった。しかもシャム湾に跳梁する海賊に襲われれば殺されないまでも、身ぐるみ剥がされ、女性は子どもに至るまで集団暴行される。船はエンジンを壊され、燃料油も強奪されるから漂流せざ

るをえない。

彼らは「ボートピープル」と呼ばれ、海流に乗ってしばしば日本の沖縄や五島列島、時に神奈川沖に漂着した。日本政府は亡命を受け入れないという国是をもって彼らを犯罪者同然に扱い、一部をアメリカに送り届け、多くをベトナム本国に送還した。

三

これよりずっと時代が下った二〇〇一年の四月一日、ホーチミン市の病院で、六十二歳になった大酒食らいのチェーンスモーカーが亡くなった。その男の名は、チン・コン・ソンという。

彼は一九三九年、ベトナムのダクラク省バンメトートで生まれ、十歳でサイゴンに移った。五八年サイゴン大学在学中に自作自演の音楽活動を始め、南ベトナムで反戦歌手として名前が知られるようになった。

六七年からハノイ生まれの女性歌手カイン・リーと組んで反戦活動の先頭に立ち、七二年に政府からすべての活動が禁じられた。

七五年の初夏、彼はカイン・リーとともにボートピープルの一員として密出国し、命からがらアメリカに渡った。しかしアメリカでは「再教育キャンプ」に送られ、そこでも音楽活動が禁じられた。アメリカ国内で「ベトナム」を語ることはタブーだった。

活動を再開したのは八〇年に入ってだった。何本かの映画音楽を担当するうち、ベトナム共産党が経済開放策に転じ、彼の音楽を解禁した。八九年、かつて一緒に活動したカイン・リーとパリで再会することができた。

日本では六二年二月に大阪の毎日放送テレビが「お眠り坊や」を紹介し、七八年にＮＨＫが近藤紘一のドキュメンタリーをもとに制作したドラマ『サイゴンから来た妻と娘』の主題歌として、彼が作った「美しい昔」が流された。

ややあって、演歌歌手の天童よしみが「美しい昔」をＮＨＫの特番で熱唱して話題を集めた。天童はデビューから長い間、ヒット曲に恵まれなかった。ベトナムを旅行したとき、街角に流れているこの曲に惹きつけられ、以来、コンサートで必ず歌うことを続けていた。それがベトナムで知られ、ホーチミン市でコンサートを開いたこともあった。

――チン・コン・ソン自身は、歌はあまり上手くなかった。だが、カイン・リーと言う表現者を得たことで、特に創作の面で自在に才能を発揮することができた。

と評される。

彼が死するや海外で活躍していたベトナム人歌手の多くが帰国し、党委員長なども弔問に訪れた。沿道には一万人もの民衆が出て、その棺を見送った。

「お眠り坊や」は、「美しい昔」とともに彼の代表作とされる。日本でのタイトルは「坊や大きくならないで」というのである。日本人の耳には、森山良子の歌声とともに記憶されている。

四

戦争は勝者にも敗者にも、戦後の痛みを残す。

途中で「和平」を口実に戦線から離脱し、敗戦の原因を作ったアメリカは、戦争犯罪を問われなかった。北ベトナムがソ連や中国のように大国であったら、ベトナム戦争拡大の張本人としてジョンソン、ニクソンの歴代大統領は、東条英機と同じ判決を受けてもおかしくなかった。

公的な裁きは受けなかったが、アメリカはその後、一九八〇年代末まで「ベトナム・シンドローム」という悪魔にうなされなければならなかった。このために責任の追及は行われず、要するに「何もなかった」ことにしようと、社会全体が考えた。

七〇年代の後半、フォードもカーターもレーガンも、このことには触れないように努めていた。ベトナム帰還兵とその家族と、ベトナムの人々が救われないまま残された。

だがそれは、所詮無理な話だった。初めて傷を癒してくれる指導者や映画を求め、八〇年代のレーガン政権の登場やスタローン主演の「ランボー」などは

――決して忘れることができない戦争。

として、ベトナム戦争を表現したともいえるであろう。

そしてベトナム戦争世代＝ベビー・ブーマー達がある程度余裕ある生活をする八〇年代半ば（ベトナム戦争終結十周年の頃）から、この戦争をよりリアルに見つめ直そうとする傾向がはっきりするようになった。

ボブ・ディラン「風に吹かれて」
ジョーン・バエズ「勝利をわれらに」「ドナ・ドナ」
ピーター、ポール＆マリー「花はどこへいった」
ママス＆パパス「夢のカリフォルニア」「花のサンフランシスコ」
ブルース・スプリングスティーン「合衆国に生れて」
ジョン・レノン「ハッピー・クリスマス」「イマジン」
カーティス・メイフィルド「バック・ツー・ザ・ワールド」
スティビー・ワンダー「ミュージック・エイリアム」

ビリー・ジョエル「ザ・ナイロン・カーテン」
ジミー・ヘンドリックス「ジプシーのバンド」
サイモン&ガーファンクル「スカボロフェア」「7時のニュース／きよしこの夜」
マービン・ゲイ「ホワッツ・ゴーイング・オン」
エル・チカーノ「ビバ　ティラド」
ジミー・クリフ「メニー・リバー・ツー・クロス」
……

これらの歌はベトナム戦争時あるいはその終結後、アメリカ国内で、ないし全世界で反戦歌として歌われた。
ジョーン・バエズが歌い上げた「勝利をわれらに」は、もともとアメリカにおける黒人解放運動の歌だったし、ピーター、ポール&マリー（PPM）の「花はどこへいった」はマレーネ・デートリッヒがすでに第二次大戦前に歌っていた。
ブルース・スプリングスティーンの「合衆国に生れて」は、次のように歌う。

地元でちょっとしたトラブルに巻き込まれ
軍隊に入隊させられ
黄色い人間を殺すために外地へ送られた
故郷に帰って精油所へ行くと
人事係に「一存で雇えるならいいんだが」と言われ
復員軍人庁の役人に会いに行ったら
「もう現状が分かったろう」と言われた
ケソンでベトコンと戦った同胞がいたよ
ベトコンたちはまだ生きてるけど
あいつはもういない
あいつにはサイゴンに愛する女がいた
彼女の腕に抱かれてる
あいつの写真を今でも持ってる

サイモン&ガーファンクルの「7時のニュース／きよしこの夜」は衝撃的な作品だった。流れるのは、サイモン&ガーファンクルが歌う聖歌「きよしこの夜」である。その静かで清々しい歌声をバックに、ベトナムで何人のアメリカ兵が死んだか、その戦闘はどうであったかがニュースとして語られる。
歌だけでなく多くの映画が作られた。
「プラトーン」はオリバー・ストーンがメガホンをとり、アカデミー賞を受賞した。
「地獄の黙示録」はワーグナーのワレキューレが印象的だった。

シルベスタ・スタローン主演・脚本の「ランボー」第一作は、ベトナム帰還兵の苦悩をアクション映画として描いた。燃えがる町、爆発するコンビニエンス・ストアの映像が、戦争の風景と重なった。

オリバー・ストーンは「7月4日に生まれて」という作品も残している。トム・クルーズが好演した。

スタンリー・キューブリックはマシュー・モディーンを主演に起用して「フル・メタルジャケット」を作った。ジャングルがまったく登場しない異色の反戦映画だった。

ロバート・アルトマンの「マッシュ」はベトナムの野戦病院に送り込まれた医師たちの日常をコメディ・タッチで描いた。冗談を交わしながら負傷した兵士の血が吹き出る首を両手で押さえるシーンは、不謹慎というより、

――笑っちゃうよりほかにないだろう？

という、この戦争の本質を描いていた。

空軍機が撒き散らした枯葉剤「エージェント・オレンジ」の後遺症は、従軍兵士とその家族に後遺症をもたらした。一九六一年から七一年までの十年以上にわたって、アメリカ軍が散布した「エージェント・オレンジ」は一千二百万ガロンに及び、他の枯葉剤、殺虫剤は一千九百万ガロンに達していた。

その中には大量のダイオキシンが含まれていて、地中に深く染み込み、植物を汚染し、最終的に食べ物となって人間を汚染した。アメリカではベトナム従軍兵士の三世代あとの子孫に、先天性失損症が少なからず出ており、ベトナムでは六十五万人がなおも慢性的な後遺症に苦しんでいる。

～～～～　補　注　～～～～

ズオン・バン・ミン　Duong Van Minh／1916～2001。一九六三年十一月、南ベトナム陸軍准将だったとき独裁的暴政者とされたゴ・ジン・ジェム大統領に対し軍事クーデターを起こし臨時政府を樹立した。翌六四年一月、敵対勢力のクーデターによって失脚し、政局から姿を消した。しかし彼はは「ビッグ・ミン」の異名で軍と民衆から支持されており、七一年の大統領選挙に立候補した。選挙に敗れはしたもののミンが強い影響力を持っていることをグエン・バン・チュー政権は改めて認識し、閣僚として起用することになった。

七五年北ベトナム軍の南進が始まり南ベトナム軍が総崩れになったとき、グエン・バン・チュー、グエン・カオ・キら政府首脳がいち早く海外に脱出したが、ミンはサイゴンに留まって臨時大統領に就任した。大統領就任から四十四時間後、ラジオ放送で北ベトナム政府に対して無条件降伏を通告、大統領官邸に突入してきたベトコン兵士に身柄を拘束された。ミンはその後拘禁生活を送ったが、八三年フランスへの出国が認められ、のちアメリカに移ってカリフォルニア州で余生を送った。

フエ　Hue：ベトナム最後の王朝グェン王朝（一八〇二～一九四五）の都があった。現在は観光地となっている。王宮はベトナム戦争で被害を受けた。

葉剣英　Ye Jianying／1897～1986。広東省梅県に生まれ雲南講武堂を出て広東革命政府軍に参加した。一九二四年黄埔軍官学校教官となり二六年北伐軍に参加、二七年中国共産党に入って広東暴動を指導したが失敗して香港に逃れ、次いでドイツ、モスクワに留学した。帰国した三〇年党中央軍事委参謀長、三一年江西ソビエト区紅軍第三師団参謀長、労農紅軍学校長などを経て三四年の長征に参加、三六年西安事件で周恩来とともに蔣介石との交渉に当たって第二次国共合作を成立させた。四九年新中国政府下で北京市長から広東省人民政府主席となり、五一年華南軍区司令、五五年に元帥となった。

五六年軍事科学院長となったのを機に中央政府に参画するようになり、六七年中央軍事委副主席、政協主席などを務めたが文化大革命で林彪派の攻勢で権力から遠ざけられた。七一年中央政界に復帰し、七三年党副主席、七五年国防部長として七六年十月の四人組逮捕を主導した。華国鋒、胡耀邦政権で党副主席、政治局常務委員、七八年から八三年まで全人代常務委員長を務めた。周恩来死去直前、病床にあった周、鄧小平と三人で江青ら四人組打倒の策を練ったとされる。引退後も党と軍の大長老として大きな影響力を持った。

保大　Bao Dai／バオダイ／1913～1997。ベトナム王国の皇帝だったが最初フランス軍、のち日本軍の傀儡政権となり、第二次大戦終結の翌年ホー・チ・ミンに政権を譲った。一九四九年フランス政府の後押しで「南ベトナムコーシチナ共和国」を樹立、その元首に就任したが五四年ディアン・ビエン・フーの戦いでフランス軍が北ベトナム軍に大敗したのをきっかけにフランスに移住した。

B―52爆撃機　「B―52」はボーイング社の開発コードで、正式名称は「ストラトフォートレス」。全幅五十六・四メートル、全長四十二・四メートル、全長四十八・一メートル、総重量二百二

十三トン、最高速度は毎時一千三十七キロ、航続距離は二万百キロという超々大型爆撃機。そもそもは戦略核爆撃機として設計されたが七一年にミサイルと通常爆弾による全天候型爆撃機に改良された。北ベトナム爆撃に使われたほか、輸送機に改造した同型機が戦車や重火砲、軍用車などを大量に空輸した。

古森義久　こもり・よしひさ／１９４１～　：東京都に生まれ慶應義塾大学経済学部を出て毎日新聞社に入った。サイゴン、ワシントン特派員、のち産経新聞に移りロンドン支局長、ワシントン支局長を歴任した。ベトナム戦争当時、サイゴン陥落後も現地に踏みとどまって報道を続け、七五年度ボーン上田賞を受賞。八一年には在日米軍の「核持ち込み」を否定しないライシャワー発言をスクープした。主な著書に『ベトナム報道一三〇〇日』（一九七、筑摩書房）、『世界は変わる』（一九九一、文藝春秋）などがある。

徳岡孝夫　とくおか・たかお／１９３０～　：大阪市に生まれ京都大学英文科を出てフルブライト留学生としてアメリカのシラキュース大学に留学した。帰国後毎日新聞社に入り社会部記者、編集次長、編集委員などを歴任した。記者時代にベトナム戦争、中東戦争、三島事件などを取材した。三島事件の際には、三島が直前に決行を伝えた二人のジャーナリストの一人。また日米開戦にいたる真珠湾攻撃前夜の歴史発掘を手がけ、当時の外務省怠慢の責任を追及した。主な著書に『「真珠湾」を知っていた女』（一九九三、文藝春秋）がある。

沖縄や五島列島への漂着　民俗学・歴史学の観点でベトナムのボートピープルは一つの実証的な情報を提供することになった。すなわちコーチシナ半島から海流に乗れば七日以内で沖縄や五島列島に漂着することができるという事実である。縄文・弥生文化、原日本人の形成を考察するうえで貴重な事実だった。

カイン・リー　Khanh Ly／１９４５～　：ハノイ市に生まれ、一九六〇年代にアメリカに移住してダンスホールで歌手となった。チン・コン・ソンと出会い、ベトナムを素材にした歌を唄った。七〇年代に南ベトナムに戻り、七五年四月二十九日（サイゴン解放前日）ボートピープルとして脱出した。アメリカ合衆国カリフォルニア州を拠点に歌手活動を続け、越僑歌手の重鎮として知られる。

近藤紘一　こんどう・こういち／１９４０～１９８６。東京に生まれ六三年早稲田大学文学部を出て産経新聞社に入り、七一年サイゴン特派員となった。現地の下宿先の女性と結婚し、七五年四月のサイゴン陥落の模様を日記体で書き、同年十月『サイゴンのいちばん長い日』として出版した。南ベトナム政府が崩壊していく状況を、社会や文化にまつわるエピソードとともに描いた。続編ともいうべき『サイゴンから来た妻と娘』で大宅壮一ノンフィクション賞を受けた。

187 龍の目覚め

第百八十七

龍の目覚め

一

この時代、最も注目されたのは中国という国である。

北は万里の長城、黒竜江でソ連領と接し、西は崑崙山脈とゴビ沙漠をもって境となし、南はチベット、南沙諸島曾母暗砂まで二万二千八百キロにおよぶ国境線を持ち、陸地面積は約九百六十万平方キロメートルと世界第三位を誇る。国土は広く、民もまた多い。

そもそもこれほどの大地を一つの政権が掌握すること自体、ほとんど不可能に近い。黄河の北は麦と馬、南は米と舟の文化であり、西には遊牧の民が住まい、東は一万八千キロの海浜をもって市擢で生業を立てている。

古代においては東と西、のちには南と北が統一と分裂の機軸になった。二十世紀においてすら南北に軍閥が跋扈し、それが日中戦争の混迷を深める要因となった。

蔣介石が率いる国民党政府との戦いに勝利し、台湾に追放した毛沢東が、「中華人民共和国」の建国を宣言したのは一九四九年十月一日である。歴史的慣習に倣って彼は、北京の紫禁城天安門で宣言文を高らかに読み上げた。

天安門。

高さ三十三・七メートルというこの巨大な門は、一四二〇年に明の永楽帝が建てた「承天門」が戦火で焼失したため、一六五一年に再建された。「天安門」の名が付いたのはそのときである。

紅殻の城壁と瑠璃瓦に彩られ、その資材は冬の寒さが最も厳しいとき、道に水をまき、それが凍った上を滑らせて運んだといわれる。もとは皇帝の詔書が発布されるところであった。

天安門に立つ毛沢東を中心に、左後方に劉少奇、朱徳、周恩来など建国の英雄たち居並び、眼下には人民が歓喜の声をあげている。城門楼に掲げられていた「開国大典」の絵は董希文が描いた建国式典の様子だったが、要人が失脚するたびに修正が重ねられていた。すなわち政争と粛清の歴史を描いてもいた。

一説に五十万人を一度に収容できるといわれ、しばしば歴史を動かす舞台となった。六五年に始まった「プロレタリア文化大革命」は、国家主席に就任した劉少奇を名指しで攻撃し、これを毛が「造反有理」としたために軍を巻き込んだ権力闘争に発展した。

紅衛兵たちは『毛沢東語録』を片手に街を練り歩き、劉少奇ら反毛派を「実権派」と呼んで批判し、多くの文化人、政治家、軍人が粛正され、あるいは農村に追放された。混乱は国際的孤立と経済の沈滞を招き、周恩来が国務院総理として収拾に手腕を振るった。

周は毛の五歳年少だった。江蘇省淮安県に生まれ、若いころ日本、フランス、ドイツに学び、軍事と外交に秀でた能力を発揮した。一九七二年二月、ニクソン米大統領と会談して中国の国際社会復帰を決定し、同年九月には日本の田中角栄と日中国交回復で合意するなど、最晩年に重要な仕事をした。

偶然だが、第二次大戦後の中国を率いたこの二人の政治家は、ともに一九七六年、示し合わせたように世を去った。年下の周の方が早く、一月八日に息を引き取った。毛はそれから八か月あとに没し、その遺体は天安門広場南側に建てられた毛沢東記念堂に、いまも安置されているという。

二

文化大革命の嵐がまだ盛んだったころの話である。

一九七一年の三月二十八日から四月七日まで、第三十一回世界卓球選手権大会が名古屋で開かれた。中国は世界チャンピオンの荘則棟選手をはじめとする選手団を送り込んできた。卓球は共産主義中国が国際社会と接触するほとんど唯一のか細い糸だった。

このときアメリカ選手団のカリソン副団長はひそかに、中国選手団に随行してきた宋中秘書長と接触を持った。共同通信北京支局長だった中島宏によると、それは大会最終日の四月七日のことだった。

私は午前中、中国代表団が宿舎の藤久観光ホテルでアジア・アフリカ・中南米の卓球選手を招いて開いたガーデン・パーティーをのぞきに行った。ちょうど真ん中辺に、すっかり親しくなった宋中秘書長が招待客と談笑しているのが見えたので、参加者をかき分け近寄った。

するとタイミングよく旧知の江培柱秘書が「重要電話、重要電話」と言いながらメモを宋中氏に手渡した。ちらりと見ると毛筆で「為中美両国人民的友誼」（中米両国人民の友好のために）と題がつけられているのだけが見えた。

何年か後に再会した宋中氏から、これこそが本国からの米国チーム招待の指示だった、と聞かされた。電話の北京発信担当は私のよく知る中国外務省関係者だった。彼と江氏は毎日、決まった時間に、しごく簡単な方式の暗号で電話連絡し合い、北京と日本の代表団との意思疎通を図って

いた。初めは一日三回だったが途中から毛沢東の指示で五回に増やしたという。

米中チームの関係では、これより先、四月四日と五日に、中国の元世界チャンピオン、荘則棟選手が、ヒッピー・スタイルで有名になった米チームのグレン・コーワン選手と友好交歓したことが大きなニュースになっていた。私は、荘選手の行動が儀礼の範囲を越えていたので、反米ムードが強い中国内で、相当に批判されると推測していた。そこで電話メモは、この件は「問題にしない」という結論だろう、と勝手に想像し見過ごしてしまった。宋中氏は一読すると外へ出て行った。その後、米チームの宿舎へ行き、ハリソン副団長に指示の内容を伝えたのだという。

中国政府は、アメリカ選手団を中国に招くのは時期尚早、という結論に達していた。ところが四月六日の夜、毛沢東主席が就寝する直前に「招聘」を指示したので、政府関係者は大慌てになった。

当時、自民党幹事長の職にあった田中角栄が、毛主席の側近にアメリカ選手団の受け入れを働きかけたといわれる。就寝の直前に政治的案件で毛主席と面会できたのは周恩来のほかに考えられないので、田中が周にメッセージを送り、周が毛の了解を取ったのかもしれない。詳しいことは伝えられていない。

アメリカ選手団の随行員は、北京政府にアメリカ政府要人のメッセージを伝えたであろう。七月にキッシンジャーが訪中するときも、田中角栄はひそかに仲介の労を取った。ニクソンの北京訪問は「頭越し外交」といわれるが、田中においては周知だったようなのである。

三

アメリカ、日本と国交を回復し、国連で中国の代表政府であると承認されても、毛と周はただちに経済政策を転換できなかった。文化大革命はすでに軍部まで巻き込んだ権力闘争に発展していて、二人の手では制御できない状態だった。

周の死が転機をもたらした。

彼は中国共産党が創設された時からの闘士であり、日本軍国主義に身を張って祖国を守った英雄であり、国民政府との調整に腐心した政治家だった。あまつさえ国際的に孤立した中国の外交を一手に引き受け、最後は国際的な復帰を実現した大功労者だった。

にもかかわらず七六年当時の中国政府は、その死に対して十分な礼節を尽さなかった。少なくとも民衆の目にはそ

う見えた。

彼の遺灰は、遺言に従って中国の山河にまかれた。毛沢東を革命の英雄として偶像に祭り上げ、六億人の人民を統率する企ては、すべて周が指揮を取った。現実主義者でもあった彼は、自分自身が新しい偶像になることを拒否した、といっていい。だが民衆の目には、革命に殉じた清廉な英雄に見えた。

党と政府では、上海派の江青、張春橋、姚文元、王洪文が台頭していた。彼らは劉少奇を血祭りに上げる過程で権力の中枢に近づき、周恩来から文化大革命の実質的な指揮権を奪うことで党と政府を牛耳ろうとしつつあった。周の死後、彼らは周を批判することで、階段をもう一段上ろうと考えた。

この四人の意向を受けた「文匯報」は、三月二十五日号に「走資派還在走，我們就要和他鬪」（走資派はいまなお歩み続け、我々はまもなく彼らと闘う）と題した論文を掲載し、その中で、

「党内那箇走資派要把被打倒的至今不肯改悔的走資派扶上台」（党内の走資派は、打倒されても悔い改めようとせず、走資派の登場を助けている）

と書いた。

走資派とは文化大革命によって打倒された劉少奇の一派のことだが、論文がいう「党内の走資派」とは周恩来、「打倒されても悔い改めようとしない走資派」とは鄧小平を指しているものと理解された。周を「走資派」と断したことに抗議の声が上がった。

三月二十九日、南京大学の学生を中心とするデモ隊が市中を行進し、南京駅を通過する列車に文匯報批判と周恩来擁護の大スローガンをペンキなどで書いた。四人は触れてはならない琴の糸に触れてしまったことを知ったが、もはや手遅れだった。全国で火の手が上がった。

三月十九日、北京市朝陽区牛坊小学校の紅小兵が、天安門広場の人民英雄紀念碑前に花輪を捧げた。花輪には

——周伯伯永遠活在我們心中

という言葉が副えられていた。

「周おじさんは永遠にわたしたちの心の中に生きている」という意味であって、のちに「天安門悲歌」として全国に知られた。

これがきっかけとなって、四月四日の清明節（二十四節季の一であって、春分ののち十五日目からの三日間、人々は先祖の墓参りや郊外へ出かけたりする）までに、人民英雄紀念碑前に人々が誰いうともなく集まって英雄を追悼し、花輪や詩詞を献じた。

人々は周恩来を祀るべき場所を見出していた。
それは人民英雄紀念碑だった。
形もどこか位牌に似た雄碑は、人民革命のために碧血を流した人たちを記念し祀る碑であり、その裏には周恩来によるといわれる揮毫があるためによる。人々は彼を人民英雄と見なし、そのため、ここに悼むために集まってきた。
対して当局は
――反革命的な動きあり。
として、民兵五万、公安三千を動員して天安門広場を包囲し、花輪を取り去り、群衆の排除を行った。
これを知った民衆は翌五日、当局の封鎖を破り、「花輪を返せ」「仲間を返せ」と叫びながら「聯合指揮部」を取り囲み、これを焼き討ちした。午後九時三十分、一万人の民兵と三千人の警察、五個大隊約二千五百人の北京衛戍部隊が出動し、棍棒と皮ベルトをもって民衆を制圧していった。これが彼らの命取りになった。
事件の背景には、周恩来への追悼の念だけでなく、十年も続いた文化大革命への反発があった。知識階級に空白が生じ、経済が低迷した。密室政治が横行し、地方官吏が権力を乱用し、人民が相互に監視し合う抑圧的な日常が続いていた。
だが人々は、正面切って文化大革命反対を口にすることはできなかった。それが英雄の追悼という行動に結びついた。ただ当初の献花は純粋な追悼の念と愛国の思いで行われた。政治的な意味合いを持つようになるのは、むしろこれ以後である。

四

のちに明らかになったところによると、周恩来は自分の死期が近いことを知って、腹心に江青、張春橋、姚文元の名を示し、
――自分が死んだら、この者たちが私を悪しざまに罵るであろう。
と言い置いた。
毛は老い、もはやその存在は象徴でしかなくなっていた。そもそも文化大革命は、毛の陰謀にほかならなかった。経済政策の失敗を理由に、自分を国家主席を座から引きずりおろした劉少奇一派を転覆し粛清するのが目的だった。それを承知していた周が毛を支持したのは、あくまでも毛が国家の屋台骨であると信じたからではなかったか。
七六年の九月九日、毛沢東は死んだ。死亡したとされる日は、古来から吉兆が顕われるおめでたい「重陽の節句」に当っている。その死亡日もまた、政治的な意味合いが込

められていた。

それから二十七日後の十月六日、江青、張春橋、姚文元、王洪文（「四人幇」、あるいは「王張江姚」と呼ばれる）は北京市紫禁城に隣接する中南海の懐仁堂で、「反革命クーデターの予防的措置」の名目で電撃的に逮捕された。逮捕を指導したのは葉剣英、聶栄臻ら軍幹部、直接逮捕に赴いたのは汪東興率いる八三四一部隊だったと記録される。

四人組逮捕の翌日、華国鋒が党主席に就任した。「反革命的クーデター」とは、どちらにとっての言葉であったのか、歴史はまだ結論を下していない。

ともあれこの四人の失脚をもって文化大革命は幕を閉じた。天安門事件を「反革命的民衆の反乱」とした政府の決定は、七八年十二月に開かれた中国共産党十一期三中全会で、全面的に撤回された。

併せて決定された「四つの近代化」策は、農業、工業、国防、科学技術の四つを現代化することに主眼が置かれた。これに基づいて中国政府は「三金政策」（鉱業、工業、金融）など、中国経済を発展させる国家的大目標を打ち出していく。それは七五年の第四期全国人民代表大会で周恩来が提起した内容だった。

四人幇のうち最も政治経験が豊かでリーダー的存在だった張春橋は、八一年に死刑・執行猶予二年の判決を受け、のち終身刑に減刑された。その後死亡したともいわれる。姚文元は懲役二十年の判決を受け服役、王洪文は無期懲役で収監され九二年に病没した。

毛沢東の妻で「女帝」ともいわれた江青は、一九一四年、山東省諸城で生れ、本名は「李進」という。山東実験劇院に入り、のち上海で「藍蘋」（ランピン）の名で舞台に立った。

三八年毛沢東が彼女を四番目の妻にすると決めたとき、党の幹部たちは

――決して政治にかかわらせてはならない。

と諫言した。しかしその諫言は守られなかった。

八一年の林彪・四人組特別法廷で文革の正当性、自らの正しさを昂然と主張し、「反革命集団を組織、指導した主犯」として死刑・執行猶予二年の判決を受けた。八三年無期懲役に減刑されたが、九一年服役中に自殺した。

天安門広場に献じられた多くの詩は、多くの人々が書き写し、七七年ごろから「天安門革命詩抄」の名で編集が進み、七八年に香港で初めて印刷物として刊行された。のち類似の詩集が南京や上海などでも刊行され、「天安門悲歌」「天安門詩抄」「天安門詩文集」「革命詩抄」の五種の存在が確認されている。

収録されている詩詞は自由詩三十七篇、四言詩九篇、五言詩四十八篇、六言詩五篇、七言詩百六十六篇、詞百篇、その他三十七編、付録六篇とされる。

編者は、「童懐周」とあり、北京第二外国語学院漢語教研室主任だった汪文風を中心とする十六名のグループの名乗りと考えられている。「童」と「同」は同じ発音であることから「同懐周」が本来であろうとされる。「ともに周を懐かしむ」の意味にほかならない。

「読三月二十五日《文匯報》有感」と題された詩がある。

三月二十五、妖霧起黄浦
　三月二十五日、黄浦に妖霧が立ち上り
文匯充当馬前卒
　文匯報が手先を務めた
攻撃総理真露骨
　総理を攻撃することまことに露骨だ
当用開水煮
　熱湯で煮詰めてしまえ
偽君子　窃国賊
　君子と偽って国を盗み取る賊は
謀議簒政心太黒
　政権簒奪を謀議する心は真っ黒
幾番夢中称王侯
　何回王侯になる夢を見たことか
無奈是鼠輩
　いかんともしがたい鼠賊
好児女　皆揩涙
　立派な息子娘達よ、皆涙を拭い
総理霊前列成隊
　総理の霊前で隊列を組もう
駆妖邪、莫慈悲
　妖邪を駆逐するには慈悲はいらない
要以刀槍対
　武器でもって対抗するのみ

「向総理請示」と題した詩篇もある。この中の「江橋」は江青と張春橋を示唆している。

黄浦江上有座橋
　黄浦江には橋があり
江橋腐朽已動揺
　江の橋は腐り果てすでに揺らいでいる
江橋揺　眼看要栲掉
　江の橋はぐらついて

今にも崩れ落ちようとしている
請指示是折還是焼
どうか御指示を　叩きつぶすか、焼き捨てるか

〜〜〜〜　補　注　〜〜〜〜

南沙諸島　**曾母暗砂**　南沙諸島は南シナ海の中央に浮かぶ約百の環礁で成る。曾母暗砂はその南端（北緯四度）にある無人島で、中国が領有権を主張している。かつてはどこにも帰属しない商船の中継地だったが、一九三九年大日本帝国陸軍が上陸して領有を宣言し「新南群島」と命名した。五一年の対日講話条約で再び無主権となったあと、中国が南沙群島を含む南海諸島全域の領有権を主張して周辺諸国との間で領有権をめぐる紛争が生じた。現在は中国、台湾、ベトナム、マレーシア、フィリピンの五か国が領有権を主張し、分割占領状態にある。

市擢　してき：海上交易のこと。中国では陸続きの商取引を「交易」といい、擢をもって行う海上交易を「市擢（してき）」と表現した。『魏志倭人伝』にも倭人が玄界灘を往来して韓地と交易していた様子を伝える「南北市擢」の文字が見える。

蒋介石　Jiang Jie-shi または Chiang Kai-shek／チャン・チエシー／１８８７〜１９７５。中国の浙江省に生まれ一九〇七年（明治四十）日本の陸軍士官学校に留学し振武学校（留学生のための陸軍士官学校予備学校）を出て浙江財閥の政治的代表者・陳其美や孫文と接し中国革命同盟会に入った。辛亥革命に参加し二二年（大正十一）広東軍政府に参画、二三年大本営参謀長となった。二四年黄埔軍官学校長、二七年宋美齢と結婚して孫文の後継者となった。二八年（昭和三）南京政府主席となり三七年国共合作を成功させ米英両国の援助を得て対日抗戦を展開した。日本の無条件降伏に際してラジオ放送で「報暴以徳」（暴に報いるに徳を以ってすと呼びかけ、日本軍人・軍属の本国帰還を平和裏に導いた。のち共産党・毛沢東との抗争に敗れ四九年台湾に移った。

毛沢東　Mao Ze-dong／１８９３〜１９７６。字は「潤之」。湖南省湘潭県に生まれ一九二一年（大正十）上海で陳独秀・李大釗等とともに中国共産党を創立、湖南代表として第一次中共全国大会に出席した。二四年第一次国共合作ののち共産党中央委員、二七年武漢政府樹立に伴い中央農民部長となった。五か月後に農民軍三千を引き連れて西省井崗山に入り、朱徳軍と合流して「井崗山ソビエト区」を樹立したのち三一年江西省瑞金を首都とする「中華ソビエト臨時政府」主席となった。日中戦争・国共内戦を経て、四九年北京を首都に中華人民共和国の成立を宣言し国家主席。五八年国家主席を劉少奇に譲ったものの六六年にスタートさせた文化大革命で実権派を失脚させた。六九年毛・林彪体制を確立し、周恩来を首相に任じ中国の基礎を作った。

董希文　Dǒng Xīwén／１９１４〜１９７３。浙江省紹興に生まれ、幼少期に杭州に移った。父は地方の文物鑑定家だった。三二年杭州之江大学土木工学部に進み三三年蘇州美術専科学校、上海美術専科学校、ベトナム美術専科学校、国立杭州芸術専科学校本科を経て画家となった。三七年日本軍によって杭州が陥落したとき二人の妹を失ったのをきっかけに抗日宣伝活動に参加した。四二年敦煌で壁画を学んだとされる。『カザフ族の羊飼いの女』『北平解放』『開国大典』などの作品に大きな影響を与えている。四六年「董希文敦煌壁画模写創作展覧」が大きな反響を呼び国立北平芸術専科学校の副教授となった。

荘則棟　Zhuang Zedong／１９４１〜２０１３。北京に生まれ、幼いときから卓球を習い五七年全国大会の混合ダブルスで優勝し

た。六一年の第二十六回から六五年の第二十八回まで世界卓球選手権大会で三回連続男子シングルスチャンピオンとなった。団体優勝にも貢献し、三度にわたって体育運動栄誉賞を授与され、七四年文化大革命で国家体育運動委主任になった。四人組逮捕後、山西省で四年間投獄され、釈放ののち山西省などで卓球コーチを務めるかたわら映画にも出演した。

中島　宏　なかじま・ひろし／１９３４～　：七〇年当時、共同通信社の北京支局長だった。アジア通信社連盟（ＯＡＮＡ、のち「アジア・太平洋通信社機構」と改称）が一九七〇年八月、東京で総会を開催したとき、中国政府は「台湾の中央通訊社を招く総会開催は二つの中国を作る陰謀に加わることだ」と警戒していた。共同通信社はＯＡＮＡの会長会社として台湾の中央通訊社の受け入れを認め総会を開催したため、北京支局長の中島が国外退去処分を受けた。

重陽の節句

古来、中国では奇数を陽、偶数を陰とする思想があった。奇数月と同じ奇数の日を「重陽」と呼び、季節に応じた祭事を行った。すなわち一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日である。このうち最も大きな奇数が重なる九月九日がとくに「重陽」とされている。

江青　Jiang Qing／１９１４～１９９１。出生時の名は「李淑蒙」、間も無く「李進」「李進孩」と改名した。

華国鋒　Hua Guofeng／Hua Guofeng／１９２１～２００８。本名は「蘇鋳」。山西省交城県に生まれ一九五九年湖南省党委書記となった。七一年林彪事件以後北京で活動し始め、文化大革命後期の七三年政治局委員、七五年国務院副総理兼公安部長、七六年国務院総理兼党第一副主席を経て、八〇年首相に就任した。「華国鋒」の名は抗日戦争時に属していた「中華救国先鋒隊」にちなんでいる。

四つの近代化　si ge xiàndàihuà：周恩来が一九七三年の中共第十回全国大会で提唱、七五年の第四期全人代第一回会議で基本路線を確定した。アメリカ、日本との国交回復はそれに基づいて行われた。華国鋒は外貨準備が不十分だったために行き詰まったが、鄧小平は最も基本となる農業の工業化のため山峡ダムに代表される水利の整備と電力の増産、化学肥料と耕作機械の普及に努め、併せて深圳、珠海、汕頭、廈門を経済特区に指定して資本主義原理を導入した。またプラスチック成型、電気製品の組立生産などを全世界から受注して軽工業の振興を図った。

188 テレビの時代

第百八十八

テレビの時代

一

『経済白書』は一九五一年に初めて発行され、そのときにつけた副題「もはや戦後ではない」が流行語になったことは、これまでに何回か書いた。

二十五年目、一九七六年版の副題は

「新たな発展への基礎がため」

だった。

ドルショック、オイルショックという国際的な要因による二つの波を越えて、ようやく日本経済は安定を取り戻しつつあった。政局が安定しなかった。田中角栄は首相の座から降りたとはいえ自民党内最大派閥のボスとして君臨し、隠然たる力を温存していた。

田中を「金権政治」と批判し、七四年十二月に念願だった首相に就任した三木武夫は、ロッキード問題に端を発した自民党内の動揺を沈静化することに終始し、政治の実をあげることができなかった。

田中が逮捕される一か月前、河野洋平ら六人の議員が自民党から離脱して「新自由クラブ」を結成したのを皮切りに、自民党内で「三木降ろし」が始まった。

――現執行部では総選挙に勝てない。

というのである。

福田派が叛旗をひるがえし、これに田中派が同調して三木退陣が決まった。だが国民は、そうした自民党の派閥争いに飽き飽きしていた。

その年の十二月五日に行われた第三十四回総選挙で自民党は議席数を二百七十一から二百四十九に減らし、社会党は百十八から百二十三に回復、公明党は二十九から五十五に躍進した。民社党も十九から二十九へ議席を伸ばし、共産党は三十八から十七へ大きく後退した。結成されたばかりの新自由クラブは新たに十七議席を獲得して気炎をあげた。

この年の経済成長率は四・〇％、最終消費支出は二・九％にとどまり、安定成長路線が明確になった。輸出の回復（前年度比一六・六％増）、物価と地価の上昇に歯止めがかかったことなどから、日銀は景況短期観測（短観）で「景気の底離れ」を宣言したが、民間設備投資がマイナス〇・一％と落ち込んだ影響が懸念された。

翌七七年、『経済白書』の副題は

「安定成長への対応を進める日本経済」

だった。

三木に代って首相となった福田赳夫は経済通の政治家として知られたことから、景気対策に期待が集まった。ところが二月九日に東京外国為替市場で円が急騰し、この日一日で円は一ドル＝二百八十五円台に跳ね上がった。その後、三月二十二日には二百八十円を割り込み、年末の終値二百四十円まで円高に歯止めがかからなかった。

実質経済成長率は四・四％、最終消費支出は四・〇％、物価上昇率は八・一％と、いずれも前年より改善されたが、民間設備投資はマイナス〇・四％と悪化した。加えて急激な円高で一千万円以上の負債を抱えて倒産した企業が一万八千五百社に達する史上最悪の記録を作った。

明けて七八年、『経済白書』は

「構造変革を進めつつある日本経済」

と、やや苦し紛れの副題を付けた。

円高は止まらなかった。前年末、二百四十円台だったものが七月二十四日ついに二百円を割り、十月三十一日には百七十五円五十銭の最高値をつけた。

だけでなく、日本の輸出攻勢に音を上げたヨーロッパ諸国は日本政府に輸出の抑制と輸入の拡大を求めていた。七月十六日から西ドイツのボンで開かれた先進国首脳会議で、日本は実質七％成長と輸出規制などを約束せざるを得なかった。

これが国内経済の萎縮を促した。

実質経済成長率は五・三％、最終消費支出は五・三％、民間設備投資は四・五％に回復したものの、輸出はマイナス〇・三％に減少し、完全失業者が百四十一万人と過去最悪の記録となった。

十一月二十七日、福田赳夫は自民党総裁選に出馬しないことを表明し大平正芳の選出が自動的に決定した。しかしそれは円高による失業問題や円・ドル対策に責任を取ったのではなかった。自民党内の派閥争いの結果にほかならなかった。

国会での首班指名は自民党の内紛で持ち越しとなり、十二月七日にようやく発足した大平内閣は、その直後から難問を抱えることになった。ボンで発表した共同声明にもかかわらず、日本の貿易収支は百十六億ドルという空前の黒字を計上し、ＯＰＥＣが原油価格の段階的値上げを決定したのである。

二

七九年の『経済白書』の副題は

「すぐれた適応力と新たな出発」

だった。

この年の経済概況について、「電通広告景気年表」は次のように記す。

わが国経済にとって、昭和五十四年は回復の年であった。国内民間需要の自律的上昇力が定着するにつれ、企業収益や雇用情勢の改善も着実に進んだ。一方、その過程で相次ぐ原油価格の上昇と円安基調とが重なり、インフレ再燃の不安が顕在化し，政策の転換を迫られた。そのため，秋以降先行き景気を懸念する声も聞かれたが、景気上昇の勢いは予想外に衰えないままだった。

なるほど経済指標はいずれも「回復」を示していた。

・実質経済成長率　五・五％
・最終消費支出　六・五％
・民間設備投資　一二・八％
・輸　出　四・三％
・消費者物価　三・七％

一月一日、ＯＰＥＣが第一次原油値上げを実施した。このため政府は石油消費を五％節約するための具体策を決定したが、それを見透かしたようにＯＰＥＣは四月一日に第二次の値上げを実施した。

七月一日には一バレル二十三・五ドルを上限とする二重価格制が実施され、年末にはサウジの標準原油二十四ドルを底に国ごとに最大一二・一七％を値上げすることが決定された。実質的に一バレル三十ドル時代がやってきた。

第二次オイルショックである。

このときの原油価格高騰は、前年末から末期的症状を呈していたイランの王政が二月十一日に崩壊し、イスラム民族主義政権が成立したことに端を発していた。

親アメリカないし自由主義経済圏寄りのサウジアラビアやクウェート、アラブ首長国連合などと、イスラム民族主義を唱えるイラン、イラク、シリアなどがＯＰＥＣ内で激しく対立し、イランが原油の対米輸出を全面的に閉鎖したのだ。

原油価格の高騰が輸出立国・日本の経済力低下につながると見た機関投資家は、一斉に円売りに走り、このため円は一ドル＝二百五十一円まで下落した。

二年前に二百八十円だったのが一年後には百七十五円、さらに一年後には二百五十一円という乱高下に、日本政府は適切な手を打つことができなかった。

九月七日、衆院本会議で社会、公明、民社三党が内閣不信任案を上程した。三党の議席数は合計二百七、だったから、与党である自民党が否決すればいいだけの話だった。

だが首相大平は解散に打って出た。

抜き打ち解散で野党はおろか、自民党非主流派を追い落とす作戦である。

十月七日に行われた総選挙で自民党は二百四十八で横ばい、社会党は百七で党勢を弱め、公明党は五十七で微増にとどまった。

共産党は十七から三十九に躍進、民社党も三十五と増加した。親自由クラブは一気に議席を四に減らし、結局のところ与野党の勝敗は不明、自民党大平派だけが勝利という、まことに不思議な結果となった。

国内経済も同様にまことに不思議だった。

原油の高騰で石油、化学、繊維、鉄鋼、エネルギーといった産業は低迷が続いていたが、値上げ効果で利益を計上し、一方の円高基調を見越して生産拠点をいち早く海外に展開した家電、自動車、食品などは好調だったにもかかわらず、国内の人員を整理するというねじれが生れていた。

これはアメリカが数年を先んじて体現していた現象だった。状況は似たり寄ったりだったのだが、日本はそれに気づかないまま、八〇年代の〝我らが時代〟に突入していく。

三

「電通広告景気年表」の広告費統計が面白い。

企業が使った広告費の総額は、七六年が一兆四千五百六十八億円だった。前年比一七・七％増である。内訳は

・新聞　４５５０億円（一一・二％増）
・テレビ　５０９３億円（二一・〇％増）
・雑誌　７９７億円（一九・〇％増）
・ラジオ　７０４億円（一六・九％増）
・ＤＭ／屋外　３１１４億円（二二・二％増）

だった。

七七年は総広告費が一兆六千四百二十七億円（一二・八％増）で、「テレビ」が一四・八％増の五千八百四十七億円、「新聞」が一〇・四％増の五千六十八億円と両者の水が開いた。

七八年は総額が一二・四％増の一兆八千四百五十七億円、内訳は「テレビ」が六千五百三十五億円、「新聞」が五千七百二億円、「ＤＭ／屋外」が四千三十億円だった。「ＤＭ／屋外」の伸びが目立った。

七九年は総額が一四・五％増の二兆一千百三十三億円と初めて二兆円台に乗った。「テレビ」は一四・九％増の七千五百八億円、「新聞」も一四・九％増の六千五百五十四億円、「ＤＭ／屋外」は伸びがやや鈍化して一〇・九％増の四千四百六十八億円、「雑誌」「ラジオ」がともに一千億円を超えた。

不況であれば不況なりに、好況であればなおさら、企業が広告宣伝に力を入れたため、広告業界は年率二けた台の好況を謳歌していた。政局が不安定な中で経済が先行き不透明感を強めた結果、人々は「情報」を求めた。七〇年代後半、日本は、「テレビの時代」に入ったといっていい。それが広告売上げの急増につながっていた。

それでも新聞は、自分たちが主導権を握っている、と考えていた。例えば朝日新聞は七六年三月、「意見広告掲載基準細目」を決定し，制限を緩和した。関西広域圏Ｕ局五局が共同制作・編成・共同セールスを目的に「ＫＵ５」設立し、新聞協会が新「新聞広告倫理綱領」「新聞広告掲載基準」を制定したのは同じ年の五月だった。

このころから、広告宣伝の位置づけが変化した。

それは、戦後生まれが全人口の半数を突破し、小売・サービス業など第三次産業の就業人口が五二％に達したことと無縁ではない。国民の九割が「自分は中流」という意識を持ち、七割が「とりあえず幸福」と回答する時代でもあった。社会全体が飽和状態に近づきつつあった。

新しい商品に飢えていない消費者に、どうすれば購買意欲を喚起することができるかが広告宣伝の課題になった。それまでは特定商品の名前を連呼し、あるいは商品の性能、機能、味や便利さを売るのが広告宣伝の主な目的だったが、もはやそれは意味を持たないのだ。特定商品を拡販するためのキャンペーンやマーケティングの手段としてテレビが利用されるようになったのは当然の流れだった。

その先駆けは七〇年十月にスタートした国鉄の「ディスカバー・ジャパン」であり、古くはレナウンの「レナウン・ルック」に求められる。その手法は映像と音楽だった。性能や機能でなく、イメージで売るのである。

企業も媒体も大きく様変わりした。

サントリーやブリヂストン自転車が消費者参加型の広告募集企画を展開し、名指しはしないまでも競合を意識した比較広告が企画され、デパートの大丸が商品のデメリット表示を開始した。

在京ラジオ三社が共同企画「Ｔ・Ｑ・Ｌラジオ・ワークショップ」を開いたり、統一キャンペーン「はたちの献血」を展開した。これによってスポンサー企業を集めるのだが、広告宣伝に社会的意義が求められ始めた。

雑誌は総入れ替えの様相を呈していた。

七六年に新たに創刊されたのは百九十六、休廃刊は八十四だった。七七年は百九十誌が創刊され、百六誌が休廃刊になった。七八年の創刊は百六十五、休廃刊は九十八、七九年は創刊が百九十五、休廃刊が七十六と記録される。よくもまあ雑誌は数多いものと感心するばかりである。

「ライフカタログ世界の一流品大図鑑」「特選街」など高級グッズ情報誌、「ＣＥＣＩＬＥ」「ＰＯＰＥＹＥ」、「Ｈｏｔ　Ｄｏｇ　Ｐｒｅｓｓ」など若者向け情報誌、「アウトドア・スポーツ」「ザ・ミュージック」といった趣味の雑誌、「クロワッサン」「アルル」「モア」「新鮮」「素敵な女性」など女性向け、「アングル」「東京タウン情報」などタウン情報誌が創刊され、また「女性セブン」、「ヤングレディ」がワイド版に、「るるぶ」が隔月刊から月刊に移行したのはこのときである。

宣伝の手段も変った。

営団地下鉄にパロディポスター広告が登場した。チャップリンの代表作『独裁者』のモチーフにした「独占者」、マリリン・モンローの『帰らざる河』を文字った「帰らざる傘」。

東京，大阪の国電に車内ステッカーが登場し、イベントや地域に密着したキャンペーン型が登場した。カネボウ化粧品「レディ80」募集企画，日産自動車「ニッサングリーンカップ全国草野球大会」協賛，味の素「サラダパーティ」、日立家電「マスタックス・フェア」などが話題となった。

その意味では〝頑張れニッポン〟キャンペーンに連動した「バレーボール・ワールドカップ」、地域密着型の全国高校サッカー、春の高校バレー大会、夏の高校野球、全国高校ラクビー選手権大会などはその延長線上にあったと見ることができる。

ときにはテレビ番組そのものが大きなイベントになった。

「植村直己北極探検第一報」「隅田川花火大会」「エジプト・ピラミッド再現計画」などが放送され、中でも日本テレビが開局二十五周年を記念して全国を結んだ初の二十四時間番組「愛は地球を救う」は、十二億円もの募金を集めた。

映画と企業広告、テレビＣＭとレコード会社、芸能プロダクションのタイアップが進んだのもこの時期である。角川映画「人間の証明」のテーマ曲をはじめ、「サクセス」「愛のメモリー」「ワインカラーのときめき」「マイ・ラグジュアリー・ナイト」「マイ・ピュア・レディー」「ＵＦＯ」「君のひとみは　一万ボルト」「ミスター・サマータイム」

「いい日旅立ち」などがヒットチャートを飾った。

芸能プロダクションはテレビＣＭの威力に目を見張った。新人歌手をテレビＣＭに売り込み、そのイメージをタレント化する手法が確立されていく。この時期にデビューした新人タレントにとっては、テレビＣＭに出演することが登竜門でもあった。

反対に「テレビに出ない」ことを売り物にするタレントも人気を集めた。井上陽水、吉田拓郎、あるいは「ニューミュージック」と総称されたフォーク系、ロック系のタレントたちがそうだった。

いずれにせよテレビというものが価値観の機軸になった。かつ、彼らが対象にしたのは戦後ベビーブーム、いわゆる「団塊の世代」にほかならなかった。

四

以下に七〇年代後半の新商品、新サービスを羅列する。

一九七六年

家庭用ビデオ／超高感度カラーフィルム「フジカラーＦ―２・４００」／大衆マンション／低価格システムコンポ／ファンシー商品／ストロボ内蔵コンパクトカメラ／男性用香水／電気もちつき器／キヤノン「ＡＥ―１」／理研「増えるワカメ」／大和運輸「クロネコヤマトの宅急便」／できたて弁当「ほっかほっか亭」／フィールドアスレチック／入院費給付保険　・成人病特約保険／財形給付金保険

一九七七年

ふとん乾燥機／電子チューナーテレビ／超薄型電卓／クォーツ時計／低価格一眼レフカメラ／自動焦点カメラ／ルームランナー／トレーニングウェア／焼酎（純、ワリッカ）／大型ボトルウィスキー／トマトジュース／野菜ジュース／冷凍ピザパイ／一リットルサイズコーラ／ゴキブリ捕獲器／男性用オーデコロン／石油温風暖房器／液体洗剤／テレビ付きパチンコ

一九七八年

三ドア大型冷蔵庫／マイコン内蔵エアコン／マイコン内蔵全自動洗濯機／音声多重放送テレビ／コンサイス／コンポステレオ／フードプロセッサー／マイコン学習機／静電式普通紙複写機／ラジカセ／ブロック崩し（テレビゲーム）／人工皮革繊維／風船ガム／素材缶詰／腐貴ワイン。

一九七九年

時計付き電卓／メロディー電卓／ラジオ付き双眼鏡／中国パック旅行／デジタル式クォーツ時計／カセットラジカセ／太陽熱温水器／超音波美顔器／自動車電話／ウォークマン／使い捨てカイロ／シュガーレスガム／スポーツ飲料／ウーロン茶／紙容器入りむぎ茶／外食産業／インベーダー・ゲーム／親子二代返済住宅ローン

ヘェー、こんなものが……というのには、大きく三つの意味合いがある。

一つは「意外に早くからあったんだ」という意外性である。もう一つは「まだこんな時代だったの？」という驚き、最後の一つは「なんでこんなものが」という感想であるに違いない。

電通広告景気年表によると、流行歌は次のようだった。タイトルのみを書く。

このうち大方のメロディを口ずさむことができる人は、筆者と同世代か、よほどカラオケ好きといっていい。

一九七六年

北の宿から／想い出ぼろぼろ／およげ！たいやきくん／ビューティフル・サンデー／北の宿から／俺たちの旅／木綿のハンカチーフ／岸壁の母／あなただけを／横須賀ストーリー／わかって下さい／あばよ／あの日にかえりたい／なごり雪／山口さんちのツトム君／めまい／パールカラーにゆれて／春一番／夏に御用心／どうぞこのまま／オーマリヤーナ／想い出ぼろぼろ／針葉樹／メランコリー／東村山音頭／ラブ・イズ・ブラインド／ジョリーン／ソウル・ドラキュラ／ロックン・ロール・ラブレター／ダンシング・クィーン／マスカレード

一九七七年

勝手にしやがれ／帰らない／ウォンテッド／青春時代／渚のシンドバッド／昔の名前で出ています／勝手にしやがれ／津軽海峡冬景色／雨やどり／カルメン77／SOS／愛のメモリー／失恋レストラン／イミティション・ゴールド／夢先案内人

一九七八年

UFO／かもめが翔んだ日／サウスポー／モンスター／君のひとみは一万ボルト／透明人間／季節の中で／青葉城恋唄／微笑がえし／わかれうた／カナダからの手紙／LOVE（抱きしめたい）／勝手にシンドバッド

一九七九年

魅せられて／私のハートはストップモーション／夢追い酒／おもいで酒／北国の春／関白宣言／みちづれ／おやじの海／ガンダーラ／ＹＯＵＮＧ　ＭＡＮ／チャンピオン／ＹＭＣＡ／ＨＥＲＯ／美・サイレント／ビューティフルネーム／燃えろいい女／いとしのエリー／きみの朝／セクシャルバイオレット№１／愛の水中花／万華鏡／異邦人／愛の嵐／銀河鉄道９９９

七〇年代には内外で大きな事件が立て続けに起こった。新左翼による佐世保エンプラ闘争、羽田闘争、神田カルチェラタン、赤軍派の登場、新宿騒擾、大菩薩峠、よど号ハイジャック、京浜安保共闘、三島由紀夫の自刃、川端康成の自殺、ニクソン訪中、日中国交回復、沖縄返還、あさま山荘銃撃戦、第四次中東戦争とオイルショック、ベトナム和平、サイゴン陥落、ウォーターゲートとロッキード事件、文化大革命と毛沢東、周恩来の死、天安門事件と四人組、二百海里漁業水域、イラン革命、スリーマイル島原発事故、韓国朴大統領の暗殺、ソ連軍のアフガン侵攻と西側諸国のモスクワオリンピック・ボイコット……。

「事件」をテレビが中継し、それが高い視聴率を取った。新聞は「事件」を適度にセンセーショナルに、かつ適度に常識的に、場合によっては適度に保守的に扱わなければならなかった。なぜならそれが実売部数を決め、広告収入を左右したからだった。雑誌も同様だった。

首相・佐藤栄作が退陣会見で

――テレビカメラはどこか、国民に直接話したい、新聞記者の諸君とは話さない、帰ってくれ。

と開き直ったのは一九七二年の六月十七日だった。そのとき記者たちは売り言葉に買い言葉で退出したが、彼らには国家権力の頂点に立つ人間の傲慢ぶりを国民に映像で知らせる役目があった。

「事件」はテレビのイベントになってゆく。

一方、立花隆は田中金権政治を追い詰め、本多勝一はベトナム戦争を書いた。アメリカでは「ワシントン・ポスト」と「ニューヨーク・タイムス」がニクソン政権を崩壊させ、中国では「文匯報」が政変を促した。

七〇年代、たしかに、テレビは主導権を握った。それに引きずられて、活字系のマスメディアは地道な調査報道や追跡報道の余裕を失ってゆく。事件やイベントをエンターテインメント化することが常態化するのは八〇年代以後である。

この十年は間違いなくマスメディアの質を変えた。

〜〜〜〜　補　注　〜〜〜〜

福田赳夫　ふくだ・たけお／１９０５〜１００５。群馬県に生まれ一九二九年東京帝国大学を出て大蔵省に入った。銀行局長、主計局長を経て五二年衆院議員。五九年自由民主党幹事長、六二年「党風刷新連盟」を結成して池田内閣を批判、佐藤内閣で蔵相、幹事長、外相を歴任した。七二年党総裁選で田中角栄に敗れたが七三年蔵相、七六年首相。

大平正芳　おおひら・まさよし／１０１０〜１９８０。香川県に生まれ一九三六年東京商科大学を出て大蔵省に入った。五二年衆院議員となり、六〇年池田内閣で官房長官、外相、佐藤内閣で通産相、第二次田中内閣・三木内閣で蔵相、七八年首相。八〇年衆参同時選挙の応援演説中に急性心不全で死去した。

イランの王政　一九一〇年クルド人による秘密結社「クルドの希望」が結成され、第一次大戦で一時活動を停止したが、一九二〇年セーブル条約によってクルド国家建設が国際的に承認された。イギリスはハーシム家のファイサルをイラク国王に就任させたが、二三年のローザンヌ条約でレザー・ハーンが王位に就いた。これがパーレビ王朝となる。第二代国王のモハンマド・レザー・パーレビ（在位一九四一〜七九）は、石油収入と米国の支持に頼り、独裁体制のもとで急速な近代化（いわゆる「白色革命」）を強行した。一九七八年聖地コムでの学生デモをきっかけに、暴動が全国規模に拡大、王政が崩壊し、七九年一月国外に脱出した。

媒体の広告規制緩和　例えば朝日新聞は七六年三月、「意見広告掲載基準細目」を決定し、制限を緩和した。関西広域圏U局五局が共同制作・編成・共同セールスを目的に「KU5」を設立し、新聞協会が新「新聞広告倫理綱領」「新聞広告掲載基準」を制定したのは同じ年の五月だった。

独占者　チャールズ・チャップリン（Charles Spencer Chaplin／１８８９〜１９７７）が一九四〇年に制作した映画『独裁者』を文字った。周囲の状況を気にせず大きく脚を広げたり脇に荷物を置いて座席を占有する傍若無人ぶりを戒め、座席の譲り合いを訴えた。

帰らざる傘　一九五四年に封切りされたアメリカ映画『帰らざる河』の文字り。いうまでもなく電車の中に傘を忘れないように、という意味。

植村直己　うえむら・なおみ／１９４１〜１９８４。兵庫県に生まれ明治大学農学部に進んだ。山岳部に属し一年のうち百三十日を山で過ごした。六四年大学卒業と同時に南米に渡り工事現場で働き六五年飛び入りで明大ヒマラヤ登山隊に参加、ゴジュンバカンⅡ峰初登頂に成功した。六六年キリマンジャロ、六八年アコンカグア、七〇年チョモランマ（エベレスト）、マッキンリー、七六年エルブルーズと世界五大陸最高峰登頂を達成した。七八年犬ゾリによる北極点単独行、八四年マッキンリー冬季登頂に成功したが、その帰路に遭難した。

映画『人間の証明』　「犬神家の一族」に次ぐ角川春樹事務所製作第二弾で、森村誠一の同名の小説が原作だった。出演は三船敏郎（郡陽平）、岡田茉莉子（八杉恭子）、岩城滉一（郡恭平）、高沢順子（朝枝路子）松田優作（棟居刑事）などだった。テレビで放送されたコマーシャルのキャッチフレース「母さん、ぼくのあの帽子、どこへ行ったんでしょうね」とテーマソング（歌：ジョー

山中）が与えた印象が強く、映画としては印象が薄かった。

▼森村誠一　もりむら・せいいち／１９３３～　：東京に生まれ青山学院大学卒業後、ホテルマンとして働くかたわら社会小説を書き、六九年『高層の死角』で江戸川乱歩賞、七二年『腐蝕の構造』で日本推理作家協会賞。新幹線や高層ホテルなど、当時としては現代的な場所を舞台にストーリーを組み立てた。

二百海里漁業水域　第二次大戦後、海岸線から沖合いまでの距離でなく、大陸棚（水深二百メートル）を基準にする考え方がアメリカから提示されたが、韓国政府が一方的に二百海里を「排他的経済水域」に設定、その水域に日本領の竹島が入っていたことから日韓の主権争いが発生した。また自国沿岸に大陸棚がほとんどないチリ、ペルー、エクアドルなど南米諸国は沿岸二百海里を領海とする姿勢を示した。国連は八二年の国連海洋法条約で十二海里の領海と、公海上に二百海里の排他的経済水域（ＥＥＺ）の設定権を認め、これが現在の国際的合意となっている。

スリーマイル島原発事故　アメリカのペンシルベニア州スリーマイルアイランド原子力発電所で、七九年三月二十八日に発生した。加圧水型原子炉の定格出力での運転中、蒸気発生器に水を送っていた主給水ポンプが停止し、自動的に補助給水ポンプが起動したが、ポンプの出口弁が閉じていたため給水できなかった。非常用炉心冷却装置（ＥＣＣＳ）が自動作動したが、運転員の誤判断で同装置を手動停止したなどの機器故障や誤操作が重なった。その結果、炉心上部が露出し、炉心が溶融するというこれまでにない事故となった。

韓国朴大統領の暗殺　七九年十月二十六日、韓国の朴正熙大統領が中央情報部（ＫＣＩＡ）の幹部で腹心でもあったＫＣＩＡ部長・金載圭に射殺された。韓国政府は「偶発的な事故」と発表したが、アメリカは「クーデター発生」と分析し在韓米軍は厳戒態勢に入り、済州島を除く韓国全土に非常戒厳令が敷かれた。北朝鮮侵攻の可能性も取り沙汰されたものの、日本政府は「遭難事件で韓国国内の問題」と分析した。

▼朴正熙　パク・チョンヒ／１９１７～１９７９。慶尚北道に生まれ三七年（昭和十二）大邱師範学校を出て小学校教師となり、四二年満州・新京軍官学校を首席で卒業した。「高木正雄」少尉として日本の陸軍士官学校に派遣留学し、四四年関東軍に編入された。四五年八月十五日の終戦時は満州軍歩兵第八団の団長副官・満州国陸軍中尉だった。四六年韓国に帰還し韓国警備士官学校を出て韓国陸軍情報局第一課長、第五師団長、五三年少将、六一年第二軍副司令官としてクーデタを指導し国家再建最高会議副議長、同年七月国家再建最高会議議長、十一月大将。六二年大統領権限代行となり六三年民主共和党総裁・大統領に就任した。セマウル運動を推進し六五年日韓条約締結、七二年南北共同声明ののち維新革命で体制を一新した。主な著作に『指導者の道』『わが民族の進む道』『国家と革命と私』がある。

ソ連軍のアフガン侵攻　七〇年代初め、ザーヒル・シャー国王の従兄弟にあたるモハメド・ダウドが王制を倒し、自らを大統領とする共和国を宣言した。このクーデターはソ連が仕掛けたもので、ソ連はアフガン人民民主党（ＰＤＰＡ）を通じて干渉した。その結果、ダウドは親欧米の姿勢に転じ、七八年四月ＰＤＰＡ弾圧を開始した。これに反発したＰＤＰＡ系の軍人はクーデターを起こし「アフガニスタン民主共和国」を樹立したが、アミン軍事政権は宗教関係者や封建地主層の支持を失い、さらに国際的に孤立し

た。親ソ派政権の維持を目論むソ連は七九年十二月二十一日、国境を越えてアフガニスタンに侵攻してカルマル傀儡政権を立てたが、各地に反ソ連のゲリラを誘発、ことに宗教弾圧されたイスラム教徒は「ジハード（聖戦）」と称して長期戦に入った。これを支援するためアメリカ政府が活動資金と武器を供与したのが過激イスラム原理主義集団「アルカイダ」だった。

モスクワオリンピック　一九八〇年七月十九日から同年八月三日まで開かれ、八十一か国・地域、男性四千九十三、女性一千百二十四の計五千二百十七人が参加した。

▼ボイコット問題　七九年十二月に発生したソ連軍のアフガニスタン侵攻に抗議する意味でアメリカのカーター大統領が大会ボイコットの方針をアメリカ・オリンピック委員会に伝え、他の西側諸国にも同調を求めた。日本政府が追随する方針を固めたのは八〇年二月だった。多くの選手はＪＯＣ本部で大会参加を訴えたが五月二十四日のＪＯＣ総会における投票でボイコットが最終決定された。日本以外では西ドイツや韓国、中国など約五十か国がボイコットした。イギリス、フランス、イタリア、オーストラリア、オランダ、ベルギー、ポルトガル、スペインなどは参加したが、イギリスはボイコットを指示した政府の後援を得られず、オリンピック委員会が独力で選手を派遣した。そのため、優勝時には国旗の掲揚と国歌の演奏が行われず、五輪旗と五輪歌が使用された。

本多勝一　ほんだ・かついち／１９３２～　：長野県に生まれ千葉大学、京都大学を経て一九五八年朝日新聞社に入った。六二年東京本社社会部、六三年カナダ・エスキモー取材がきっかけとなってルポライターとなった。六八年編集委員となった。

日本IT書紀　10 迅風篇 巻之二十五 懊悩

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。